
詭策士・黒川露の異世界記

乙黒

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

詭策士・黒川露の異世界記

【Zコード】

Z2405S

【作者名】

乙黒

【あらすじ】

彼は才色兼備の同級生に巻き込まれて、異世界に召喚されてしまつた。その世界はまさに乱世だ。魔王が舞い、国が踊り、様々な陰謀がめぐりあう。その中でも彼は、勇者という核兵器が欲しかったグラトウェル王国に召喚された。そして、そんな世界で過ごす後、彼は“詭策士”と呼ばれるようになるのであった。

第一話 始まりの前触れ

「黒川君、今日は図書委員の日だから！」

彼こと、黒川露に、昼時の学校の廊下で声を掛けたは、同じ図書委員の少女。

髪は短く、目は大きい。中々可愛い少女である。

「ああ、分かった。後で行……」

「こないでしょ！」

彼はそれにさらつとかわしてその場から去りつとしたのだが、彼女に腕を掴まれ引き留められた。

彼女は彼と半年もの付き合いがあるので、嘘を簡単に見破られたようである。ちなみにここでいう付き合いは、恋人同士ではない。ただ、二人が高校に入つて図書委員になつてから半年が経つているのだ。

「行くつて……だからトイレに行つてから……」

「駄目！ 今すぐ行くの！ じゃないと黒川君は絶対に逃げるし、昼休みは図書室の開放日でしょう！」

どうやら彼の行動は読まれていたようだ。

と、いうよりもどれだけの数図書委員を抱いたのや？

「あ、行くわよー！」

「おー、引っ張んなよ……」

彼の細い体躯では彼女の腕を振り払えず、そのまま連れて行かれるのであった。

そして図書室に着くと、彼女は室内の一 角を指差し、

「黒川君！ そいつの本の整理やつとこでー！」

彼に命じる。

「りょーかーい

と、間延びした返事をする彼は現在、本の整理を…………していなかつた。

カウンターでパソコンを操作ながら、高校の本の貸し出しをしている彼女の死角であるつ場所で、そこらにある本棚から適当にひとつ本を読んでいた。

題は、ゲシュタルト心理学とはなにか？、結構コアな本だ。

「仕事ぐらじしてよ！ もう、またさせつて……」

そして読みふけつて数十分後、変わらずその場所にいた彼は、仕事を終わった彼女に怒られた。

「ああ、『ゴメン、この本が面白くてさあ

「ゲシュタルト心理学？ 難しそうな本ねえ……」

「だろ？ 今度読むか？」

「そうねえ、ちょっと読んでみたいかも……」

キーンゴーンカーンゴーン

「お、授業が始まるから帰るうぜ。鍵は任せた」

「分かった！ また教室で」

と、彼は授業を受ける為、教室に向かった。

どうやらタイミング良くなつたチャイムにより、彼は助けられた。あのままだつたら、彼女に説教を受けるのは明確であろう。ふと、前回の説教の長さを思い出すと、廊下の途中で身ぶるいをする露なのであつた。

だが、鍵を閉める途中に彼女は、

「ああー！ 騙された！」

と、思い出したのである。

「ふうー 今日も疲れた……」

今日の授業が全て終わり、露は教室で両手を大きく伸ばしていた。

カキーン

彼は音が鳴つたことにより、その出所である窓の外を見る。

「おっ、頑張るなあ……」

感想はそれだけであつた。部活動に入つてない露は外で元気に汗を流す彼等を見て、自分もなにか入つた方がいいかな、と思うが思うだけであつた。

入る気はさらさらない。もしあつたら、既に部活動に所属している。なんせ、彼はこれを考えるのが数十回目だからだ。

だが、それが彼という人間なのだろう。なにかやりたいと思つも、行動には出さない。

ドスンッ

「いてつ……」

そして、水筒の入つた鞄を持って無駄事を考えながら教室を出ると、彼は何か固い物とぶつかり地面に尻もちをついたのであつた。

第一話 始まりの前触れ（後書き）

お読みくださいありがとうございました。
まだまだ未熟ですが、ご意見、ご感想、アドバイス等がございましたらどうぞよろしくお願ひします。

第一話 IJから始まる異世界生活

「うへ、すまんな」

露にぶつかつたのは、剣道の袴を着た女性である。

彼は地面に座つたまま、その女性を上から下まで見るとその美しい目に田を奪われそうになるが、それよりも彼女の存在に驚愕した。

(「冗談だろ……？」)

濡れ鳥のような長い黒髪は腰まであり、ぼさぼさの短い黒髪である露とは比べ物にならない。顔も田鼻の筋が通つていて、凛としている美しい顔。田も日本人らしい黒で二重で大きい。

誰もが振り返るであろうこの美しい女性を、露は知っていた。

「IJの格好は気にしないでくれ。部活の途中で呼び出されたから、着替える暇も無かつたんだ」

伊吹凜、露と同じ一年生でありながら今代の生徒会長だ。

IJの高校で、彼女の伝説は学年を通り超えて有名である。
田ぐ、成績は常に学年一位。

田ぐ、スポーツ万能。特に剣道は全国の常連らしい。

田ぐ、毎日の告白は当たり前。それもその整つた顔つきや、かっこいい言動から、男よりの方が多く、彼女非公式のファンクラブまであるらしい。

(「誰もいないよな？」)

露はそんな噂を脳内で再生しながら、左右を確認する。誰もいないのを確かめる為だ。

もし、熱烈な彼女のファンにこの光景を見られると、「お姉さんに怪我をさせる気だつたの……」「我々の女神を……」など、彼女に触れるだけで命の危険を感じるほどの行為に及ぼれるらしい。そのおかげで明日からの学校生活が不安でしょうがないくらいだ。だがそれは、彼女のファンには“信者”と表現されるぐらいに変わった人間が多いせいで、しかもその詳細の過激度は、日に日に増していくらしい。

(ふうー良かつた)

そんな噂を友達から聞いていた彼は、日に見えない額の汗を手で吹きながら安堵した。

どうやら近くに人の気配は無い。

「ほら、大丈夫なのか?」

この声と共に凛から手を出された。
とるべきか、とらぬべきか、露は一瞬悩むがどる事を選んだ。

「ありがとな」

と、手を握った事が間違いだと、後の彼は語る。

ブワツ!

鞄を持つてない手で、彼女の手を握り立とつとしたその時、その時であった。

急に地面が発光し、へそから下が動かなくなつたのだ。

「はっ！？」

「な、なんだこれは！？」

手を放し、焦る凛を尻目に見る足元。そこには彼女を中心に広がる丸い幾何学模様があった。

言語か落書きか。それとも意味を持った絵か。書いている内容は検討もつかない。だが、露もその光る文字を作る円に、入っていたせいか、凛と同様下半身が動かないのだ。

そして、光がどんどん弱くなる。

もう少し経つと彼はこの意味不明な現象が消えると思い、胸を撫で下ろしたくなる。が、ふと疑問に思つ。

(これにはなんの意味があるんだ？)

もし、足元が急に光るだけなら下半身が動かない理由にはならない。

もし、下半身が動かないだけなら足元が急に光る理由にはならない。

(この二つは運動しているのではないだろ？) そして、終わりは始まり？

嫌な予感が頭をよぎる。

光るのは第一段階で、それが終わると本当の目的が始まるのではないかと。

「終わるのか……？」

凛の心配そうな声を余所に、彼の嫌な予感が的中するのであった。

「うーわ……やつぱりかよ……」

足元の光が消えると、田の前が闇に染まり、体が落ちていくような錯覚に陥いった。例えるなら、エレベーターの下がる時に、一瞬だけ現れる浮遊感。あれが無限に続くような、そんな感覚だ。それがどれくらい続いた頃、急に足元に立つという感触が現れた。そして……。

「ユリは……どうなのだ?」

地面に足が着き、光が戻る。

凛の声が聞こえる隣のいる彼の田に見えたは、景色が“まるで”変わった空間なのだった。

第二話 未知との遭遇

露が最初に気付いたのは、よく周りが見えない。学校にいた時は目に入る光の量がまるで違うので、虹彩がそれに追いつかず上手く見えないのであつた。

浮遊感が現れる前は太陽の日や電灯の明かりで遠くの物まではっきり見えたのに、今は明かりといえば左右の壁に小さな火が一つ。ぱちぱちとなる音から、後に松明たいまつと判断した。

(はあーここ学校だよな?)

露にとつての確認だ。この世界では瞬間移動なんてあるわけがなく、学校にいたという事実さえが信じられなくなつてくる。

「うわ、なんだこれは!? 何が起きたんだ!」

だが、すぐに現実に引き戻された。

隣から聞こえる彼女の透き通った声によつて、だ。慌てている彼女の声が、さつきまで学校にいたという事実の確認となつたのである。

「おやおや、今日は一人もいるんじゃのう!?」

露は目が慣ってきたので、老人のしゃがれた声の方を見た。

居たは後ろには金の刺繡に青い継ぎ目のないローブに身を包んだ老婆がいて、それを守るような感じに鎧を着た人が一人。

鎧は俗に言うローマ軍団兵の鎧だ。曲げた金属の板を重ねて、胸部、腹部、肩を防護するように作られた甲冑。兜は顔の正面以外を守つたヘルメットのような形である。

(考える。吸収しろ。無駄は排除するんだ。どうしてこうなった?.)

様々な未知との遭遇が彼には待っていた。

それが“日本”という国の常識を持つ彼を混乱へと招いていたのだ。

まず、彼はどうしてここにいるかが分からぬ。だが、これは情報のない現時点では、考へても仕方がないので、今は考へないようにする。自分がこの場所に移動したと、認識するだけになんとか抑ええた。

彼が次に不思議の思つたは、彼等の存在だ。

鎧なんて実物を目にした事がなく、テレビや本でしか見ないので兵士達は平然と着てている。

一瞬コスプレかと露は思つた。

コスプレなら特別な店に売つてるし、ネットでも買える。実際にヨーロッパでは、日本のサバイバルゲームみたいに様々な甲冑を着た人たちが集まつて戦うといった事が行なわれているらしい。

が、すぐに彼は訂正した。

鎧を着た二人は、遊びでやつてゐるような田ではなく、ぎらぎらと光つた肉食獣の目。それに鎧からはみ出て見えるは、太く発達した筋肉。おそらく軍か、それに近い形態に所属している兵士なのだろ。

それに後ろの老婆も、はいドッキリでした〜、と言つよつた雰囲気ではない。明らかに本気な表情だ。

「おい、これはなんなのだ？ 説明してはくれないか？」

若干、冷静さを取り戻した凛が三人に尋ねる。

「ほーう、すぐに尋ねるのか！ これは前回と比べると使い物になりそうじゃのうー！ あいつは失敗して死におったし……全くそのせいで、こんなわしが望まぬ召喚をする羽目になりおったし……！」

感心するように老婆は頷いた後、兵士たちは舐めまわす様に凛を見て感想を告げる。

「いやいや、ネヘニア様。彼は確かに役立たずでしたが、女性は兵士には向かないでしょう。それよりも彼女は王家の娼婦として役立ちそうです。こんな整った顔の女性。街中でもあまり見ません」

それに凛は一回体が跳ねた。

男たちの視線の意味を、言葉の意味を、理解したのだ。

「娼婦か、兵か。そこは王に決めてもらつかのう……では、手筈通りにやるのじや。男の方は殺しても構わん。始まって以来のしきたりじやから、両方とも存外に扱つても問題は無かるつ」

老婆は指で兵士たちに命令した。

兵士達はゆっくりと警戒するよ、腰に携えた剣を抜いて露達へと近づいて来る。

(これは現実だと過程しろ。そして、その上で生き残る道を考えるんだ)

意味は分からぬ。

状況も上手く飲み込めない。

だが、彼らが自分に対して悪意を持つてるのは、なんとか分かった。

それに迷つてる暇も猶予も無さうなので、即座にこの状況をなんとか乗り切ろうと、露は決意する。

周りを壁に囲まれ、後ろは凹凸のない壁。左右の壁には松明。そして出口は前にいる三人の後ろ。下は学校で見た模様と同じ幾何学模様で、上は何も無い天井。老婆が持つは杖。

兵士は一人。

隣には、何も持つてない完璧超人な凜。
万年帰宅部。武器もなし。趣味も習い事もやつてない自堕落な学生の露。

手札はごく僅かで、乗り切る可能性は無に等しい。

だが、彼の頭の中には既に彼らを倒して、自らが逃げのびる逆転の“策”があつた。

さあ、始めようか。

彼が脚本、彼が主演で、彼が行なう、“最初”の血塗られた演劇

ミュージカル

を。

第三話 未知との遭遇（後書き）

しばらくは毎日更新で行きたいと思います。
ですが、すぐに予定が変わるかも知れませんので、そこはご了承ください

第四話 火（前書き）

第四話 火

露は勝つ“秘策”を実行する為に、凛の協力が必要であった。

(伊吹、ここから脱出するために協力してくれ)

だから、小声で兵士に呼ばれないう喋りかける。

(分かった。あいつ等に身を任せると、とんでもない目に余るやうだからな……)

凛は奴らの下心丸出しの表情から、このままの未来がすぐ予測できた。よって、名前も知らぬ同級生の案に乗る。

(だが、どうすればいい？ 武器さえ持つてれば私も応戦できるが、何も持つてないぞ。奴らの武器を奪うのか？)

彼女ははつきり兵士たちを戦つて倒すと思っていた。

実は露が何かの武術に心得があり、素手でも奴らを倒せると、そう考えていた。

(……ああ、そうだ。それで奴らの氣をひく為にあの右にある松明を老婆に投げてくれないか？ その後は部屋の隅で、目を瞑つているだけでいい)

この間にも、少しずつ少しずつ兵士達は露等に近付いていた。

一辺が6メートルもある部屋の中、兵士達は既に半分に差しかかるぐらいいだ。

(私も戦えるぞ。これでも武術の心得があるんだ。だから……)

(いや、それだけでいい。後は声も出さず端で見といてくれ)

凛にとつて自信満々の露が、何故か信用できたので首を縦に振る。この時、露の顔は既に笑っていたといつ。

確証は無いのだが自分の策が、必ず成功すると思つてゐる。

「ふん、なにをこそこそしてゐるのじや。お前たちの抵抗はどうせ無駄じゃ。精々足掛け」

「の老婆であるネヘニアの声が、開幕の引き金となる。

(3、2、1……)

「今だつ……！」

そして露が引金を引いた演劇ミュージカルが始まった。

凛と、何故か露も左右の松明へそれぞれ向かつ。

「の事に、酷く老婆ら3人は驚いた。

しかし、これまでの召喚してきた人間は、必ずしも誰しもが大人しいわけではない。中には抵抗したり、反撃してきたりする聰明な者も数人いる。その中でも特に多いのが、老婆という自分等を迂回して出口へと逃げる者。

大昔に、こんな話がある。昔、召喚の儀の最中に兵士や召喚主の隙をつき、城内へと逃げ出した者がいた。勿論、その者は後日殺した。

「の時、この国ではそういう状況にならない為に、『勇者』が

動き出した時のがマーニュアルが作られた。

よつて、これは老婆にとつて想定内の行動なのである。

「皆の者っ！！」

ネヘミアの掛け声で、兵士達はマーニュアルに書かれた通りの行動を始めた。

扉の前に召喚主であるネヘミアが立ち、それを守るように二人の兵士が剣を構えながら立つ。

これで露達は袋の鼠へなると、思った。

「……」

「フンッ！」

だが、予想は大きく外れた。

二人は出口ではなく、松明へと足が向かい、露が無言で凜が掛け声と共に、老婆へと松明を投げたのだ。

「うわちつ！」

松明の火は老婆の服へと移り、燃え始める。

「ネヘミア様っ！！」

兵士達は剣を構えながら、あたふたと何度も振り返る。
どうしていいか分からぬのだ。

ネヘミアの火は消さないといけないし、“勇者”達も注意しなければいけない。

「落ちつくのじゃ！ 火はすぐ消すつ！ わしは大丈夫じゃ！ 前を見続けれつ！」

本来なら露はここで追撃をかけるつもりだったのだが、今回はしなかつた。

火はすぐ消す、この予想外の言葉によつてだ。

水も無い状態で消すなんてあり得ない。と、いつもなら信じないのだが、違う場所へと急に移動したこの状況だ。露はおかしくなつたのか、老婆の言う事が本気に“視えた”。たんなる勘だが、もし消えれば、露にとつては好機となる。

なのでその好機に備える事にした。

「『それは火を消す恵み、それは大地を潤おす恵み』」

そして、場面はネヘミアによつて、次なる局面を迎える。

「『我に恵みを与えたまえ』」

彼の勘が失敗したら窮地へと、成功したら好機へと、そんな彼の命を賭けた博打が、鍵を握るそんな局面だ。

第四話 火（後書き）

読者からウォルテニア戦記に似てるとの書き込みがありました。
読んでみると、冒頭は確かに似ています。

ですが、読んで頂けると分かるように、この作品の主人公は基本的に、長い間積み重ねられた武術ではなく、知恵で勝つので、違う作品だと思っていただけると幸いです。

第五話 アドリブ

「なつ……」

凜の驚きの声がと同時に、ネヘミアの頭上の何も無い空間から突如水が現れる。

そして火は消え、辺りは漆黒の闇となつた。
これに兵士達三人は、大きく驚く。

ニヤリ

露はこの予想外の状況に、思わず笑みがこぼれた。

彼が作った本来の脚本は鞄の中に入っている水を落とし、この筒の中に水があるとネヘミア達に分からせて部屋の奥に誘い出す。そして、彼らが扉の前から居なくなつた隙にこの部屋から逃げる“予定”だつた。

だが、それには大きな欠点がある。

顔がばれるのだ。

これでは、ここから逃げる場合にとてもないハンデを背負う羽目となる。

例えば、この国では安全にいられる場所がないのだらう。もし、

彼の顔が張り紙かなにかに書かれて

國中に張られると、人に見つかる度に警察のような存在に追われるのだろう。そして捕まれば……最悪の想像は幾らでも出来る。

奴らにしてみれば、露達がここから居なくなつて都合のいいわけがない。

もし老婆たちに善意があれば、あんな獣の目で一人を襲つたりせ

ずに、良識な行動をとると彼は思う。

多分、あのまま無抵抗だつたら奴隸のような虐げられた生活を送ると、何となく何となくだが露はそう思った。

(死なせる……か)

なら、顔を知られた彼らには死んでもらうのが一番都合がいい。だが、露には彼等を“殺す”度胸も技術も無い。

(覚悟を決める。業を背負え。最後まで目をそらすな)

しかし、彼は静かに決意する。

どんな事があつても、どれだけの人が死んでも、諦めずに、生き残り元の世界に戻る、と。

火が消えてからのこの間、僅か0・1秒。

味方は舞台。露は主演から下りた。全てをアドリブで進めよう。

(さあ、続くだ……)

そこからの彼の行動は早い。

足音を消しながら、未だにその場所から動かない兵士達の僅か数センチの所まで近づく。

そして、一人目の肩を押した。

「うわっ！？」

当然、兵士はぐらついた。

その間に露はもう一人の兵士も押す。

「おっ！？」

重い鎧を重點的に上半身につけてる兵士はバランスが悪い。だから少し押すだけで体勢を崩し、壁によりかかっているネヘニアによりかかる。

「なんなのじゃー？ 重い……ぞ……」

そして一人は、ネヘニアを犠牲にして地面へと倒れた。

ところで、男の体重が軽く見積もって、7~80キロ。それに鎧が数キロ。勿論ながら重い。

それが一人分。

筋肉も殆どない細腕の老婆には、耐えがたき重さだった。

「は……早く……だけ……」

ネヘニアは肺が圧迫されてるので、呼吸がしづらしく声も出しきれない。

男一人もなんとかネヘニアの上から離れようと囁つたが、鎧のせいでも々上手く離れられない。

「……おい、兵士の一人が剣を光らせてるぞ」

「」で兵士を押した後、壁際へ移動した露の、悪魔のよつな囁きがあつた。

いや、老婆にしてみたら神の囁きのように聞こえたのだろう。

(剣を光らせてみじゅと、わしを斬るのか？　目が見えない状況で
？)

そんな暗闇の下、ネヘミアの頭に、様々な考えが行き交った。
隣の国の暗殺者。この国でネヘミアを疎ましく思つてゐる者。そ
れとも、ネヘミア自身に向かの恨みを持つてゐる者。

彼女はこの国で、1・2を争つほどの魔法使いだ。敵は数えきれ
ないぐらいいて、数えきれないぐらいい作つてきた。

といひで老婆に“聞いた事のない声”を疑う氣などむからりない。
もし事前に露の声聞いていたなら、信じなかつたであつた……。

(ならば……これは、天命を行なうであらうわしに對しての、救命
策か。全く神は……粋な計らいをしよる)

そして、そんな彼女のそんな考へは、露の思惑通りに進む。

ネヘミアは今出せる最大の声で、

「『吹き飛ばせ』」

魔法を放つた。

第五話 アドリブ（後書き）

今日中になんとか間に合いました。
読んで頂けるとともに嬉しいです。

第六話 終結

「ぐほっ！」

突如烈風が兵士二人を襲い、扉とは逆のすぐ下には幾何学模様が描かれた円の上に吹き飛ばされ、その余力で壁にまで叩きつけられた。

「これはおそらく彼女がやつたのだろう、と露は思つ。

（受け入れる。この超常現象を……）

本当なら彼はこの非科学的な出来事を信じたくない。しかし、否定しても状況は依然として変わらない。

彼女は言葉を言い、風が起きた。

これが現実だ。

だったら、と彼はこれを信じて利用する。

それが彼の選択であつた。

（ネ……ヘニア……様……？）

ところで、吹き飛ばされた兵士達は何が起こったか理解不能だった。

突然肩を押され、ネヘニアを潰し、そして飛ばされたこの状況。守る筈の存在だった者に、傷つけられてるこの状況。

信じてる筈だった者に、裏切られるこの状況。

全てが全て、気が狂いそうにもなる。

「ネヘミアに一方的に殺される。それで本当にいいのか？」

だが、ここでも兵士達に悪魔の囁きがあった。

(あれはネヘミア様に助言していた者?)

そして、その助言の後自分達は魔法を受けた。

(神は皆に平等を与えるという。ならこれは私に?)

目が見え始めた後、さらに一人の兵士の想像が“加速”した。
何故、ネヘミアが自分を殺すのかは分からない。
けれども敵意を持つてるのは明らか。

兵士はそこまで考えたが、反撃までには及ばなかった。
もしかしたら、何か事情があるのかもしれない、淡い希望が絶
えてなかつたのだ。

「『荒れ狂う濁流、それは敵を流す物』」

だが、ネヘミアが兵士を見て語りかける様になつた時、淡い希望
は消え兵士の考えは変わつた。

(この方は私達を殺すおつもりなのだ……。ならば……!)

守つて死ぬならいい。

だが、何も守れずに死んだのなら、これまで生きてきた人生の意味
が分からない。

この時に兵士の内の一人は、ネヘミアを殺そつ、と決断する。

そこからの兵士の行動は早い。
急いで駆け寄り、そして

「『荒れ狂う濁流、それは敵を巻き込……』」

持つてた剣で詠唱が終わる前のネヘミアの胸を……刺す。
磨かれた剣と腕のおかげか、銀色の刃は彼女の胸を簡単に貫けた。
兵士が剣を抜くと、その傷跡から出でたのは致死量をはるかに
超えるであろう血。

赤でネヘミアの足元に、小さな水たまりを作るほどの量だった。

「お、おい、何故……？　何故……？」

これを動かすに見ていた兵士は、地面に横たわるネヘミアを見た
事により困惑していた。

先程の言葉で、ネヘミアを疑つたのも分かる。
でも何故、殺さないといけないのかが分からないのだ。
己たちはネヘミアを守る存在で、もし何かの事情で殺されても文
句は言えないのではないか、と。

「はあ、はあ、はあ」

一方、ネヘミアを刺した兵士は負の感情に押しつぶされて、過呼吸になり始めていた。

殺すまでは殺されない為の勢いでやつた。
後悔はしていない。

だが、罪悪感で押しつぶされそうになる。

この兵士は、これまでにも人を殺した事がある。
だが、ここまで、ここまでの罪悪感は生まれて初めてだつた。

「なあ、あんた、あいつを殺せば田撃者は〇だ。罪にはならないぜ

」「でも悪魔の囁きは聞こえる。

だが、ここで困惑していた兵士はこの声に疑問を持った。

(本当に信じていいのか？)

「の声でネヘニアは魔法を放ち、兵士はネヘニアを殺した。だったら、信じるべきではないのではないかと。

「おおおー————!..」

しかし、彼女を殺した事による圧倒的な罪の意識により、狂った方の兵士は涙で顔を濡らし、大声で円の上にいる兵士に向かう。これに対して、円の上にいる兵士は立ち向かう他なかった。

信じるな、と言いたい。

しかしそんな猶予は残されていない。

だから立つて剣をしっかりと持ち、撃退する為に右手で持った剣を左腰に構えた。

ジュパッ！

斬りかかった二人の内、早く剣が到達したのは、ネヘニアを殺した兵士だった。

「な……なんで……あれを……信じる……？」

太ももを先に斬られた兵士は、友だつた者に斬られる事による疑問と、あの声を憎く思う。

「「めん……」「めん……」

すすり泣く声が、狭い部屋に響く。
そして、この謝罪が兵士の聞いた最後の言葉だった。

「「めん……」「めん……」

尊敬していた者を斬り、友だつた者を斬り、兵士の心はぐちゃぐちやだつた。

これからどういいか分からぬ。
罪は無いとしても……上手く生きていけるわけがない。
既に、声を出さない凜の事は頭になく、先の事ばかり考える。
その目には既に光は無い。

「死んだら……楽になるぜ……」

死のう、兵士がそう思つた瞬間だつた。
生きていても希望はない死んだら楽になる。
そう思つと、一気に気が晴れたような気がした。

「ははっ……」

兵士は不気味に笑いながら、一人の血がびっしりとついた剣を首に当て、

ザシユツ！

そして、自らの力ではねたのだった。

これで露の、最初に行つた苦く後味が悪い演劇は幕を閉じる。ミニアージカル

今回、これが上手く行つたのは、命が追い込まれた事により、騙す才能が極端に上がつたのと運が良かつた事、後は暗闇という人が疑心暗鬼になり易い舞台。

どれもが彼の味方になつたのだ。

今後も彼は今回の事を深く胸に刻みながらも、詭策士きせきしの道を歩む。

詭策とは、敵を騙す経略の事である。

それは、決して気持ちがいいものではない。

しかし、力がない彼はこれに頼るしかないのであった。

第六話 終結（後書き）

間に合わなくてすいません。

諸事情により、少し遅れてしまいました。

今話はかなりダークな描写となりましたが、次回からは当分出て来ないと思います。もし気分が悪くなられた方がいたら、この場を借りて謝罪をしたいと思います。
すいませんでした。

(奴は……悪魔か?)

三体の死体が横たわっている部屋にいる凜は、この状況がまだよく分かつていなかつた。

彼女としては松明を投げた後、露の指示に従つて部屋の隅に目を閉じ、ネヘミアが火を水で消した時には既に目を開けていた。

凜としては、あれからの光景は脳裏に焼き付いて離れないのだ。敵だつた筈の三人が、互いを互いに傷つけあい、そして死んでいつたあの光景が……。

その発端は彼、黒川露。

彼の声によつて三人は、まるで彼の糸繰り人形のように踊り狂つた。

恐ろしい。

それが彼女の彼に対する愚直な感想だつた。

不思議な現象で、兵士を吹き飛ばした老婆。

声も出せないほどの狂氣に満ち溢れ、最後に自害した兵士。

そして、抵抗する間もなく斬り殺された。

全ての始まりは彼で、終わりも彼が締め括つた。

(何故？ 何故？ 何故？)

全てが終わった今となつてはもう遅い。

だが、彼女は彼を止められなかつた事を後悔している。

だから彼女は露に近づき、座つてゐる彼の襟首を強引に掴んで立たせ、

「何故だ？ 何故、あいつらを殺した！！」

自分でも怖いくらい低い声で怒鳴った。

「生きる為だよ……。俺は俺が生きるのに、最高の選択肢を取っただけだ……」

壁に体を預けながらも、顔を逸らしている露。凜は、そんな彼がどうしようもなく憎かつた。

「ど二」が最高だ！！ 彼等は死んだのだぞ！！ それでもお前は最高だと言つのか？

そう問い合わせると、彼は凜の手を振り払い、開き直るように言葉を発す。

「ああ、言つね！ 絶対に言つね！ あいつ等が死んで何が悪い？ あいつは俺を殺そうとしたんだぜ！！」

彼の耳に残るもは、男の方は殺しても構わん、とのネヘミアの声。これのおかげか頭は妙に冴え、あんな策が土壇場で思いついた。けれども、彼女等には感謝していない。むしろ憎悪の方が強い。彼女等がいなければこんな疎ましい力に頼る必要も無かつたのだ。

「だが、殺すまでも無いだろ？！ それにお前は結果がどうあれ、人を殺したのだ！！ それに対する罪悪感は無いのか？」

ここで、もし凜は自分だつたら、と考えた。

もし自分がだったら、あの罪悪感に耐えられるわけがない。

仲間を仲間同士で殺させ合い、自滅させた。

こんな残酷な殺し方に精神が持つ筈がないのだ。
だが……

「……ねえよ。全くねえよ！俺はあいつ等を殺してない。あいつらは自分たち自身で殺し合つたんだ！！ それのどこに罪悪感を持つ？ 僕は悪くない。殺し合つきつかけを『与えただけだ！！』

だが、彼は精神が保つていてる。
彼は心が強い。

心が弱い自分とでは、立つてゐる土俵が違うのだと。

そんな彼では、いやそんな彼だからこそ、この話は永遠に平行線を辿ると、凛は思つた。

「……私はお前が嫌いだ……」

だから、強引に話を切る。

「……ああ、俺もだ。俺も……綺麗事しか言わないあんたが嫌いだ

……」

この露の呴きを最後に、こんな形で一人の話は終わったのだった。

第八話 惨劇

露と凜が言い争つた数十分後、扉の前には幾多もの兵士がいた。鎧はあるの兵士達と同じである。

「マナセ様、お出で下さいました。それ、上へ

兵士に案内されたのは、長い青髪の三十代程の女性。その兵士の目を釘付けにする豊かな胸がなんとも言えない妖艶な魅力をかもし出している。

「バルナバ、お母さんがまだこの中にいるって本当なのかしら?」

「はい、マナセ様。本當です。我々は開どうすればいいのか分からず立ちつくしております。こんな状況はどうもつた事をしたらいいのでしょうか?」

そんな慌てるバルバナを見て、マナセは溜息を一つ。

「深呼吸をして落ち着きなさい。貴方は第一騎士団第四部隊の騎士長でしょ? 貴方がそんなど部下にも不安が伝わるわよ」

このバルバナという男は、戦場で大きな武勲を立てたため、城の警備を主に務める第一騎士団第四部隊の騎士長へとなれた。

だが、まだ26歳と異例の出世を果たしたので、まだまだ精神的にも年齢的にも未熟であった。

だから、宫廷魔術師になつて早10年の経験豊富なマナセは、バルバナに深呼吸をさせ、落ち着かせたのであった。

「ああ、落ち着いたわね。現状の報告をお願い

「はっ、既に召喚の儀が始まつてから3時間。準備に1時間もかかりますから、残りの2時間。これまで、様々な事故はありましたが、召喚主であるネヘミア様が出て来ないのは初めてであります。なので、マナセ様をお呼びします！」

バルバナはビシッと敬礼をしたので、マナセは頭を抱える。この場合、ネヘミアを母と持つマナセが焦るのが普通だ。肉親の安否が不明だと誰でも関係なく、冷静な判断をとれない。

（私も貴方みたいにできたらどんなに楽か……）

だが、実際に動搖しているのはバルバナ。

こういうバルバナみたいなステレオタイプな人間は緊急事の行動が出来ず、マニュアルに書いてある事しか実行出来ないのが難点であつた。

ちなみにマニュアルいや国法では、基本的には中から開けるのを待つと書かれていた。だが、緊急事態までそれは適用されない。

「よし、決まつたわ。開けるわよ

マナセはこれを緊急事態だと、即決する。

兵士に連れられた時からこれは決定していた。

母の心配をしているから、中の状況が知りたいからこそ、扉を開けるのだと……。

「はっ、了解しましたであります。扉は内側から鍵が掛かっております。なので、鍵を持ってくるため、少々お待ち下さい」

もし、マナセがないのであれば的確な判断。だが、マナセはここにいる。

「そんなの分けるわけないでしょ。全員扉から離れなさい。珍しい物が見えるわよ」

彼女はニヒルに笑う。

それに対しても、兵士は青ざめた顔だった。

『黒暴の魔女』そんな彼女の最大の特徴は、黒いロープを好んで着る事と魔力量に任せて膨大な質量の魔法をよく使うので、そう呼ばれるのだ。

「『希^ヒつ^チは暴風、一^ヒつ^チは烈風』」

そして詠唱が始まる。

既に扉の前にいるは、彼女一人。

兵士は全員彼女から数メートル離れて、固唾を飲んで見守っていた。

「『希^ヒつ^チは嵐、希^ヒつ^チは竜巻』」

それは詠つよつた綺麗な声だった。

「『私が本当に希つは、全てを吹き飛ばす風』」

轟音と共に、部屋の中へと扉が吹き飛んだ。

これは、消費魔力が多いほど威力が高くなる。故に魔力量の多い彼女しかここまで威力は出ない魔法。

魔法属性、風　　『強風』^{パワー・ウインド}

「さあ、入るわよ」

激しい音の後に続くは静寂。

そんな中、彼女の声がやけに響いて、恐怖にしかめる兵士達が続々と部屋の中に入ろうとする。

「はっ、では私も……！」

「私も中に……！」

扉があつた前で立ち止まる彼等。

その理由はすぐに分かった。

夥しい程の血液の臭い。それに部屋に広がるは紅の惨劇。

「嘘でしょう……？　お母さん……？」

立ち尽くした部屋の前で、広がっていたのは常人では耐えられないほどの残酷な光景だった。

その証拠にすぐに目を逸らし、暗い表情になる兵士が何人もいる。

「お母さん……お母さん……」

その中でもマナセだけは違った。

母だったであつたときわ小さく老いた者に近付く、縋りつくようになる。

実の親子であり、魔法の師匠だった母。そんな母に彼女は敬意さえ抱いていた。話したい事も沢山ある。なのに……死んでしまった。

「……いつたい誰がこんな酷いのを？」

マナセはすぐに冷静さを取り戻し、母の死因を調べた。
酷い悲しみにくれながらも必ず仇は取ると、この時決めたのだ。
それが自分を生んでくれた母に、育ててくれた母に対する恩返
しなのだと。

「はつ、これは剣で貫かれたでござりますね……」

いつの間にか横にいたバルバナが死因を答えていた。
だが、彼がいうのはあり得ない現象だつた。
以前に召喚された者がこの城にはいた。
その人物が言つには、向こうは武器も持つていらない平和な世界だ
とか。

「でも……それは考えられないわ」

召喚された人間が都合よく剣を持つてゐる時に召喚されたなど……。

「マナセ様っ！」「ちぢりに裸の男と、手に血がついた剣を持つてる
兵士がつ！！」

「ちょっと見せてー！」

見るがこれもあり得ない状況。

魔法人の近くに倒れていたのは、下着しか着けてない屈強な男に、
首がない兵士。

だが、守るべきの兵士がネヒニアを殺すなど常識では考えられない。それにもし殺したのなら、何故その兵士が死んでるのかが分からぬ。

「でも、少しおかしいでおかしいでござります」

「なにが？」

バルバナの疑問をすぐにマナセが聞き返す。

「はつこの部屋にはネヘミア様と兵士二人しか入らなかつたんです。召喚者はどこに行つたのか？ が、分からないのでござります」

この言葉にすぐに現状を理解した。

異世界人は兵士に化けてこの部屋を出たのだ。

そして辺りに散らばる黒い服と鞄は、異世界人の持ち主だと。

「バルバナ、すぐに兵士を集めて逃げ出そうとする兵士を誘索します！」

「はつ、分かりましたであります。兵士に化けた怪しい召喚者を探すのですね！」

「そうよ。さつさとしなさい！」

そうマナセが激励すると、この部屋の片付けをさせる為に数人を残して、彼方へと走り去つていった。

彼は有能だから兵士を探すのに、おそらく手間は取らないだろう。

(でも、どうやって？)

だが、異世界人が彼等を殺して逃げ去つたとしても彼女には疑問が残る。

その洗礼の儀さえやつていらない異世界人は、この国最高峰の宮廷魔術師と兵士二人を同時に倒したとは、一体どれ程の強さなのか？簡単な疑問だが、想像すると身ぶるいをするほどだ。

（油断しない方がいいわね）

そう思いながらマナセも、母に別れを告げてからうその部屋を出たのだった。

第九話 脱出

マナセとバルバナが部屋に入る15分前、もう露と凜は城内の廊下を歩いていた。

「これで本当に大丈夫なのか？」

袴のままの凜は不安な表情であった。
彼女が変わった所と言えば、先ほどとは明らかに胸をまな板にしたぐらい。

「大丈夫に決まってんだろ。この完璧な変装のじこに心配があるんだ？」

一方、その横にいる余裕そうな露は、堂々と兵士の鎧を着て歩いている。

「つづ、お前が完璧でも私が変装も何もしてないから不安なのだ……」

「お前だって変わってるじゃねえか。胸を小さくしただろ？」

そう彼女が変わった所と言えば、先ほどとは明らかに胸をまな板にしたぐらいだった。

「何故？ 私は胸だけなのだ……」

こんな変な状況になつたのは、時を更に数分前に戻さなければならない。

あの言い争いの後、露は安全にここから脱出するため行動を始めた。

兵士の鎧を急いで脱がして、彼が着込む。脱がすのは大変だったが、体躯の細い彼にとつてきつめに作られてある鎧を着るの、は簡単であった。一つ何点を擧げるとするならば、服には血が付いているのが多いので、両方の兵士から服を脱がしたことだらう。だが、それを見ていた凛が怒りを表わした。

「……死体を漁るとは何様のつもりだ！――」

彼女はいくら死んだ者でも、泥棒紛いのことをしてはならないと考えている。

「おいおい、いつまでもここにいると誰かに見つかって殺されるぜ？ だったら逃げた方がいいだろ」

「そのままここにいたら、いずれ異常に気付いた誰かに見つかるだろ」。

「そうなつたら逃亡は見つかる前より困難をきわめる。だったら見つかる前に逃げる、が彼の言い分であった。

「ふん、逃げなくとも話しあえば分かる筈だ。ここにくるのはあくまで人間であるうが？ だったら話は通じるはずだ」

しかし、彼女は違った。

どんな人間にも良心はある、が彼女の持論である。別に逃げなくても助力はしてくれるだらうと考えた。

「この現状を見ても、か？」

だが、聰明な彼女は彼の言つてゐる意味がすぐに分かつた。これまでこの異常な部屋の現状をに慣れてしまつた彼女は、これまでこの部屋を異質だとは思わなかつたのだ。

しかし、あらためて考えると、血が飛びまくつたこの部屋に入つた人間が、大人しく自分の話を聞くとは限らない。むしろ間髪も入らず襲つて来る可能性が高いだろう。

「……私も一緒に行つていいか？」

つまり結論は、当分の間は嫌いな露と共に行動するになつた。おそらく、この段階で行動を始めている彼には、ここから安全に脱出する算段がついていると思ったからだ。

「ああ、いいぜ」

彼は凛の言葉に鎧をつけたまま即答した。

「では、私はどうすればいい？　お前が着た以外の鎧は血だらけだ」

露は凛を頭から足の先まで観察した。

高い背。整つた顔立ち。透き通るような白い肌。

素質は十分。

邪魔なのは大きい胸部だけ。

「よし、胸を小さくしてくれ」

露のセクハラ紛いの言葉に、凛は怪訝そうな顔をした。

一瞬、拳を固め殴りそつになつたのは、彼女だけの秘密だ。もし殴つていれば……あんな方法で三人を退けた彼に、どんな囮にされ

るか想像もつかないからである。

「……それだけでいいのか？」

そして彼女は、苦汁を噛み締める思いで聞き返したのだった。

「ああ、それだけでいい。むしろそれ以外なにかされては困る」

こうして、現在二人は廊下を一人は鎧で、一人は袴で歩いているのだった。

コトツ！ コトツ！

そんな彼女の心配が現実になった。

靴の音を鳴らしながら、前から兵士らしき者があるいてきたのだ。このまま行けば、凛の恰好では必ず目に止まるだろう。

「おい、本当に大丈夫なのか？」

それが心配な彼女はまた小声で聞く。

「伊吹が声を出さずに震えていたら、なんとかする」

露は相変わらず自信満々だ。

それが不安なのだと彼女は溜息をつきくなる。
やがて、前から来た兵士は露達の前で立ち止まつた。

「おい、お前何をしている？」

その兵士が尋ねたは露。

「はい、城内で怪しい者を見つけたので」「いやって連行しています！」

ビシッ！

と、露は敬礼をした。

「本当か？ もし嘘だったら……分かつているだろ？ な？」

その男のあまりの気迫に露は狼狽した。
もしされたら……殺されるかもしれないという未来を描いて、体の心から震えたのだ。

「はい、勿論です！ ところで自分、まだ警護に配属されたばかりで、どこにこの男を連れていったらいいか分かりません。大隊長様、教えてはくれませんか？」

その点、露は完ぺきだったといえる。

動搖を表に全く出さない演技力。主演アカデミー賞ものだらう。

「試すような真似をしてすまんかった。今はネヘミア様の召喚の議の最中だから俺も気が立ってるんだ」

「いえ、大丈夫です。そのお心遣いとても嬉しく思います

謝る兵士に平然と露は、まるで一介の兵士になつたかのような答えを返した。

「あつちに行つて左に曲がつたら独房だ。それより俺は大隊長じゃねえ、第六騎士団団長のジャックだ！ よーく覚えとけ」

ジャックは露から視線を外し、少し凛を観察した後、そう通路の一つに指を差した。

「ありがとうございます！ ジャック団長、しかと心に刻んでおきます！」

また、露は敬礼をした。

ジャックは変な格好の凛を当然怪しく思う。

だが、名も知らぬ彼に任せたら大丈夫とも思った。

それは、自分の殺氣にも耐えられるほどの実力。そんな実力を持つていてるのに、謙虚な態度。

それらを総合して考えると、彼にあの男を任して大丈夫だという結論に達した。

「気持ちのいい奴じやねえか！」

そして露は、ジャックに好印象を与えたがら去つて行くのだった。もし、露がちょっとでも動搖していたら、ジャック自身が凛を独房まで連れて行く予定であった。あの変な格好をした凛の何気ない行動の一つに、武道をやつている動きが見えたからである。

ジャックは凛が何の武道をやつているかは分からなかつたが、気にはしなかつた。

それほどまでに露を気にいったのだ。

こうして、露はこの危機を脱したのだった。

もし、ちょっとでも動搖すれば危ない崖っぷちの状況で、全く動

揺しないこの演技力。

彼にはやはり、騙す才能は人一倍あるようであった。

第九話 脱出（後書き）

これから学業の方が忙しくなるので、しばらく休日更新となると思います。

第十話 それから

あれからも露と凜は、少しも焦らず兵士と犯罪者の一人になりますまし歩いていた。

ジャックの指示どおりに進むと、やがて綺麗に掃除された通路から無骨な石の壁へ変わっていく。

露はその中でも、石の壁とこの境田を通つた最初の部屋のドアノブを捻つた。

「おっ、もう、交代の時間か？」

その部屋にいたのは、露と同じ鎧に身を包み、椅子に座つた一人の兵士。

壁には服やロープなど、様々な物が掛かっていた。

彼がこの部屋を選んだのには理由があった。通路の先には、格子のある部屋しか見えなかつたからである。もし、ジャックの言うとおりここが独房ならこの部屋から先は牢屋。つまり、この扉がついた格子から比べると豪華な部屋に兵士がいると踏んだのだ。

「はつ、私は今日から城内の警護の配属になつた者です。宜しくお願いします。ですが、まだ新人なのでやる事がなく……大きなお世話かと思いますが、ここから先は少しの間ならば私が変わりますので、どうぞ休憩してください」

露はまた敬礼をして男に返した。

「新人つていいねえ～元気が良くて。じゃ、お言葉に甘えて俺は休息に入るか」

そんな彼に、兵士は氣さくな雰囲気で言つ。

「すいません、さつき任せられた囚人をどうしたらいいかお尋ねしたいと思いまーす」

前に出したは何も縛っていない凜だった。

「おい！ 囚人を縄で繋がなくてどうする…。 抵抗されると厄介なんだぞ…！」

これに対し、兵士は顔面蒼白になり、慌てて口に咥えた煙草を落としそうになりながらも露に怒鳴る。

露は怒られるとは思つてなかつたので、動搖しながらも急いで頭を下げた。

「すいません！ 縄が手持ちになかった物で…。 よければお貸していただけませんか？」

「……そつだつたのか。 だつたら仕方がねえな。 それに警護の連中は、こんな基本事項も結び方さえ知らないのが多いのはこれまでと一緒に…」

そう落胆しながらも男は壁にかけてあつた縄を凜の腕に結んだ。だが、縄を結びながらふと凜の顔を見ると、眼つきが変わった。

「これは女じやねえか。 女囚なんて久しぶりじやねえか

そんな男のいやらしい目つきに凜は露に視線で助けを求める。だが、露はあえてその目を見ない。

「いえ、それは男です。胸も無いですし、顔つわわヒトなへ黙つぽいとは思いませんか？」

「それも……そうだな……」

改めて男は凛を見る。

するとだんだんと男に見えてきたのが不思議である。数秒経つともう男にしか見えなくなつていた。

「それにもしたまつているのであれば、急がなくとも十分に休憩をとつてからではどうですか？ 男にしては綺麗な顔をしていますし」
「やつだな。お前の言ひとおりだな。鍵はその壁にあるから勝手に使え」

男は快く露の提案を飲み、繩で凛を完全に縛つた後、

「じゃあな」

パタン

部屋から出て行った。

「どうして、どうして、私を売るような真似をした……」

扉が閉まると即急に凛は縛られたまま露に抗議した。

勿論、中身は先程の露の言葉である。

「ああするしかなかつただろ？　いいじゃねえか。どうせここにいる少しあしか居ないんだから」

凛は彼の言葉に理解はできた。
だが、心が納得しない。

「だが、あんな言い方は無いと思わんのか！－」

「おー、その辺にある服で早く着替える。さつさとしないで来ていいいのか？」

「この攻め立てるよ^うな凛の口調が面倒になつたのか、

彼は腰の剣を抜き、彼女の縄を切つた。
そこからの凛は早い。

壁にかかつてある服を急いで手に取り「見るな！」と露が背を向けてから着替える。着替えたのは、なんの模様も無いシンプルな布地の長いシャツとズボン。彼女が着ると一段と上品に見えるのは、その姿のおかげだらう。

その間に、露も鎧の部分だけ脱いでいた。

布の服の部分は、凛と一緒に型。おそらくここでは広く普及した服なのだろう。彼等の価値観から言えば、外で歩いても大丈夫なレベルだ。

「うう、臭い……」

そんな服を着た彼女の感想は、おそらく何日も洗つていないのであらうその服も。つんと鼻に刺さる臭い。

「金目の物は無いかな」

次に探したのは金。

生きていくには必要不可欠な物だ。

当然、あの部屋にいた時の様に、凜は「泥棒とは何事か!」と言つたが、「金が無いと宿に泊まれず路上で寝て、襲われても知らねえぞ?」との露の返答によつて心を揺さぶられた。

そして彼女は最初は渋つたが、段々と彼の言う事が正統の様な気がしていいように言い包められたのだった。

探した結果あつたのは、銀貨と思える物が数枚と銅貨と思えるのが数枚であつた。

「さて、仕上げをするか

「仕上げ?」

そして、露は聞き返す凜に笑顔を向け最後に……。

現在、二人は街中を闊歩として歩き、町人に安い宿を聞いてその宿の部屋の中のそれぞれのベットに腰かけていた。

狭いベットが二つあるだけの部屋。彼女は一緒の部屋なのを最初は露に抗議したが、またしても言い包められた。どれだけ彼は口が立つのやら……。

ところで、街中はといふと、黒、白、赤、青、その他大小と色々な髪の人物。服は色々と種類があつたが、流石に凜の禪や露の学生服に似たのは無かつたので、そこで脱いで正解だと彼は思った。

夕食を軽く食べてお腹も膨れた今しがた、

「で、どうして顔をさらけ出した私が大丈夫なのか説明してもらおうか？」

彼女は彼の策の全貌を聞いたのだった。

第十話 それから（後書き）

またしてもぎりぎり間に合いました。
明日は昼頃に更新出来たらな、と思います。

第十一話 国王

城内の一 角、マナセは綺麗な彩色をされた扉の前にいた。

「マナセ様、国王に何のご用ですか?」

その部屋の両脇を守っている一人の兵士。

マナセの顔は城内の兵士たちにも、その通り名と共に広く知れ渡つており、彼らが聞いたのは彼女が何故ここに来たかである。

「無言で通しなさい」

だが、彼女は兵士達に事情を話す余裕など無い。

彼女は冷静を表面上に見えるが、時が経つに連れ怒りは増し、はらわたは煮え返っていた。もし、目の前に異世界人がいれば、問答無用で殺したいぐらいだ。

しかし、その怒りが逆に彼女を冷静にしていた。異世界人を捕まえる、ただこの一点において。

「いえ、ですが……国法で決まっておりま……」

「吹き飛ばすわよ?」

兵士は戸惑いが隠せなかつたが、すぐに扉から退いた。

彼らだって命は惜しい。マナセの魔術を本気で受けたならば、壁に吊しつけられて全身骨折もありえるからである。

バタンッ!

そして、彼女は兵士には目もくれず勢いよく扉を開けた。

「ノックもせずとは何事だつ！――」

最初に彼女に飛び交つたは殺氣の籠つた怒声だった。

(あいつは厄介ね……)

その人物は国王の前で片膝を着いている國務大臣ダーテイン。彼は頭が固く、異例を認めない。

マナセにとつてバルバナ異常のステレオタイプだと思う人間である。

彼は事実上この国では王に次ぐ権力を持つので、いくら富廷魔術師の彼女といえど逆らえない存在だ。

「よい。富廷魔術師もその辺りは分かつての行動だろ？」

しかし、そんな彼女に鶴の一聲が入る。

グラトウェル王国第三代国王カナトミア・グラトウェル・アンティパス。この国で唯一国名グラトウェルのハンドルネームを持つ者だ。

「しかし陛下、貴方が国法を守らないと部下に対する威言が……」

「國務大臣、お主は誰に意見しておる？」

これには國務大臣のダーテインも国王には逆らえなかつた。彼、カナトミアはこの国ではいわゆる英雄なのだ。

そんな彼の武勲はこの国以外の諸国にも伝わつてゐる。

グラトウェル王国に第4王子、しかも妾の子、と国王になるには

様々な障害があつた。

だが、彼は隣のヴェーツエル帝国に攻められた際、50代の今でも若々しく思える引き締まつたその肉体と、研ぎ澄まされた知性によって、一つの騎士団をわずか10人で撃破する。

その後、先代国王の父から大隊を任せられ、艦登りに次々とヴェーツエル王国の騎士団撃破して行き、ついには攻められたのにヴェーツエル王国を征服した。

それ以来、父にも他の兄弟を差し置き認められ、兄弟からの確執や内乱や霸権争いに身を通じてきたのである。

「くっ、失礼しました。陛下」

「よい。で、宫廷魔術師何だ？」

国王は謝るダーテインをすぐさま許した。

「陛下、兵士を一角に集める許可を頂きたいのです

「これには二人とも目を見開いて驚いた。

彼女がこれをしたいのには理由がある。

あのバルバナだけでは不安なのだ。彼は優秀だが小さなミスを犯す。だからこそ、それを防ぐため兵を集めたいのだ。

「ふん、陛下が宫廷魔術師の命におおじるわけなかろう。その間の警備はどうするのだ？」

ダーテインはマナセを鼻で笑つたが、国王は違つた。

「何故、兵を集めなのだ？」

彼女に理由を聞いたのだ。

「母が……死にました」

これには一人とも驚いた。

その驚きのあまり声も出ず、微動だにさえ動かない。

「う……嘘だ！ 国王、彼女は嘘をついておる」

ダーテインはこれを信じたくなかった。

「ダーテイン、母を失った彼女のあの顔が嘘だと思つか？」

だが、国王は違った。

彼女の言い分を信じたのだ。

ダーテインも国王に従つてマナセの顔を見ると、なんとも覚悟に染まった表情に彼も信じたのだった。

「詳しく説明をしている暇はありませんが、その異世界人は兵士の恰好をしていると思います。だからこそ、兵を集めたいのです」

この言葉で王はすぐさま決断をした。

「よい、ではこれを……」

国王は即刻、その証を渡そうとしたが、

「嬢ちゃん、それは無駄だぜ」

一人の兵士がそれを止めた。
彼は、奇しくも前回に露と凜に会ったジャックであった。

第十一話 全貌

部屋を照らす唯一の月光。

その月明かりを頼りに露と凜はベットに座つて向かい合つていた。

「話なんだが、おやおや、今日は一人もいるんじゃないの、を前提に置いてくれ」

それに凜はすぐに頷く。

「うむ、分かつた。でも、だ。それと私の素顔がばれたのが何の関係がある？」

だが、彼女は疑問に思つ。

「この言葉と自分の顔とが繋がらないのだ。

「そして、これが“最も重要”なんだよ」

そして、彼の話は続くのだった。

一方、太陽が城の一角を照らすは、オレンジ色の王の御前。
こちらはジャックが急に現れた事により、場面は揺れ動き始めていた。

「ふん、誰が嬢ちゃんよ。あんたも同じ歳じゃない。それに私の行動が無駄なわけないでしょ？」

マナセは、無精ひげが生え、右頬に一本の線のよつた傷があるジャックに負けずと言い返す。

「けつ、無駄は無駄なんだ。お前の思つてる以上にバルバナは動いてたんだぜ。一番最初に門番へと向かい騎士の通行を止め、その人の出入り状況を聞いてた。全くこの手際の良さ、俺の部下に欲しいぐらいだぜ」

ジャックは悪態をつきながらマナセに近付く。
慌てず、焦らず、ゆっくりと。

「あんたがこの事件を知つてる理由は……聞いても無駄でしょうね。どうせ、いつも通りに城をうろついてたあんたが、慌ただしく動いている騎士を捕まえて、事情を聞いたんでしょうから。それより早く私の行動が無駄な理由を教えなさい」

残り数センチという所まで顔を近づけ、火花を飛ばし合っているこの二人。

見ての通りこの二人は年も近い事もあって、犬猿の仲である。
二人は事あるごとに対立して争い、そして不思議な事に事件を解決の糸口を見つけるのである。

「いいぜ、たっぷりと教えてやるよ」

マナセは当時の事件の状況を知つていた。
ジャックは現在の事件を状況を知つている。
この違いにより、一人の振子はさらに揺れを大きくするのであった。

「婆さんの言葉の意味はつまり、『俺達が一人いるのは異常』で“本来なら一人だつたんだ”という事だ。」

自信満々に語り始める彼を見て不思議に思う。

それは凛自身も分かっているのだ。

だが、それと自分の安全に繋がるとは到底思えないのだ。

「つむ、私だつてそれ位の意味は分かる。だが、それが私の安全とどう繋がるのだ？　いや、待て。あつー？」

凛は少し頭を回し気がついた。

あの部屋で彼が自分が鎧に着替えた理由が分かったのだ。

そして場面は移り、こちらは城内。
国王と国務大臣が一言も発さないのをいい事に二人の争いは熾烈を増していく。

「バルバナの話によるとだな。門番は城門を一人で通つた騎士は見ていないんだ」

マナセに、彼女が知らない情報が与えられた。
だが、彼女の顔色は変わらない。

それだけだと、まだ騎士を集める事が無駄な理由にならないのだ。

「へえーそう。だとしたら余計に騎士を集めなくちゃならないわね。異世界人がこの城内にいるのなら炎り出さなくちゃいけないでしょ？」

マナセとジャックは異世界人が複数いる、という可能性は考えない。

それは思考するだけ無駄だ。

前例はある。

だが、召喚の議が始まって数百年。異世界人が複数召喚された事は、一度しかないのだ。

ならばそんな天文学的数字、ある筈がない。

「本当にそう思うのか？ 僕だったら召喚されて人を殺したのなら、そんな忌々しい場所にはいたくないぜ」

「うつ、これにマナセは唸る。
これについては同感だ。」

もし、人を殺したならそんな場所一刻も早く逃げ出したいからだ。
それにおそらく異世界人は、人を殺したのは初めてだろう。
彼女自身も最初に人を殺した時は、少し気分が悪くなつた。その
当時もその場所からすぐに逃げ出したぐらいだ。

「でも、だつたらどうやってこの城から逃げたの？ あんたは知らないでしきうけど、あの部屋では見た事もない服は脱ぎ散らかし、
“一人”の兵士の鎧と服が無くなつていたのよ？ それに異世界人が異常な精神の持ち主かもしれないじゃない」

後者についてはジャックも肯定した。
でも、前者については否定する。

「だがな、あの場所には簡だけ入つている鞆らしき物があつた。もし、あの中に服が入つてたら、鎧と服をどこかに脱ぎ捨て、持つてた服に着替えた可能性もあるだろ？」

それも、それも考えられる。

だが、それは確かな証言や証拠がなければ、無限にある可能性のほんの一部なのだ。

「実は俺はな。この城で怪しい男を見ているんだよ。それにそいつは異国の装束を着ていた」

だが、マナセの考えは覆つた。

彼がずっと不敵に笑っている理由はこれなのだ。

一方、こちらは宿。

凛は別の事に気がついた。

「でも、ちょっと待て。もし、城の連中に私達は一人ではなく、一人として。そして、その一人は兵士になつて逃げたとして。それでも、私の顔は侵入者としてばれていんのだぞ！ あの三人を殺した罪は問われないとしても、城に違法に侵入しそこから逃げ出したのだから、これから先追われるかも知れないのだぞ？ それを分かつていて、私を犠牲にしたのか！！」

これに対しても露はまだ笑っていたので、彼女は彼の襟首を掴み揺らぐ。

怒りをどう発散したらいいか分からないのだ。

「まつ、待て。俺はお前に胸を小さくするように言ったよな？」

それに凛はあー、と顔が赤くなる。

「死ね！　この変態！　あれがどれだけ苦しいか分からぬくせに……！」

「」

そして、凛が手を大きく振りかぶり、露を殴りつけとするが……。

「あれがお前を救ったんだぜ」

これによつて手を止めた。

あの意図が彼女には、まだよく分かつていなかつたである。
だから制裁の前に理由が聞きたかつた。
彼が無駄な事はしないと少し信頼していたのもある。

「あれはな。お前を美男子にする為に、ビーナスでも必要だつたんだ。
だから、あのジャックにお前を説明する時、“男”と言つただろう？
？」

これで、ようやく彼女の疑問が解けた。
すぐに考えは、答へと向かつ。

「つまり、あいつらは居もしない長い黒髪の男を追つてゐるといふ
わけだな……」

「ああ、そういう事だ」

彼女は、何十分もかけて知恵の輪を解いた時のよひな、すつきりした表情を見ていた。

そして、こちらも場面は終焉へと向かう。

「でも、その男が本当に異世界人だという確証はあるの？ 私にはあくまで想像としか思えないわ」

マナセはジャックの考えを否定もしないが、肯定もしない。もし、それが異世人を見つける

「ああ、だと思って、一人の騎士に命じてきた。そろそろ来る筈だ
「ぜ」

扉の外で走っている足音が聞こえる。
そして、ノックをすると王の許しが入り、扉が開く。

「すいません。遅れました」

「いいぜ、別に。では、報告を頼む」

その騎士は額に汗をかきながら、報告を話し始めた。

「牢獄の一歩手前の部屋では、その場に合った服が無くなり、異国の装束があり、そして……血のついた鎧がありました……」

これに当然マナセは驚いたが、何故かジャックも驚いていた。
血のついた鎧。これから導き出されるのは一つ。

「そうか……あいつ……死んだのか……」

悲しそうな表情をするジャック。

反対にマナセは、まだ諦めてなかつた。

「でも、待ちなさいよ。まだ、その男が怪しい人間だとしても、異世界人だという証拠にはならないわ。もしかしたら他の国の間者かも知れないわよ？」

「ここでいう間者とはスパイの事である。

これにより、異世界人の逃亡の可能性は一つ浮かんだ。

異世界人はまだ鎧を着て、この城にいるか。それとも、ジャックの言う男が異世界人なのか。

ここで一言も出していない国王から鶴の一聲が王から発せられた。

「もう、よい。両方とも追えばいいだろう。第六騎士団団長はその顔が分かっている男を、宫廷魔術師は城内の探索を、同時に行なえば問題はない筈であるわ~」

これによつて場は閉会した。

一人とも己の信ずる手がかりを追つたのだ。
国務大臣の用が済んだので、居なくなる。

「そつか……ネヘミアは死んだのか……」

王の胸に残るは空しさだけであった。

「これでいいだろう。俺は寝るぞ

」ちらりと露は布団に入り、目を瞑つていた。
凛の疑問も全て消え、後は寝るしかないのだ。

「それにしてもお前は凄いな。あんな短時間にこれだけの事を成し遂げるとは……」

凛も布団に入り、彼を関心していた。
もし、自分ならあれだけの事は出来ない。
精々、鎧に着替えて逃げるぐらいだろう。

「学校の成績が真ん中より下の俺が、そんなに考えられるわけねえだろ」

「むー？ なんだとーー！」

凛はこれに驚きの声を挙げた。

「俺はただ単に嘘の証拠を沢山残しただけ。後は誰かが勝手に想像してくれると言んでな。そして、さっきも凛が分かりやすく俺に想像して説明してくれた。いやー人間の想像力って凄いなあ。ここまで考えられるんだから……」

そして、この日最後に凛が耳に残ったのは、

「いいか？ 人間の想像力は無限大なんだぜ」

露のこの言葉だった。

第十一話 全貌（後書き）

すいません、また遅れました。
今日の晩にももう一話更新するので、楽しみにしていただけたら
嬉しいです。

次の日の事。

太陽は真上を少し通り過ぎた時、服装は相も変わらずのままの露と凜は、剥き出しにされた土の上を一人並んで歩いていた。一人にとつて看板のついた店が立ち並ぶ街並みは、昨日薄暗い時に見た光景とは違うように感じる。

「活氣いいなあ」

露の感想だ。

やはり、夕方よりか昼間の方が人が多いので、彼はそこに注目した。

道際には露店もあり、元気よく客寄せをしている人もいる。彼の住んでいた日本ではあまり見られない。

「……武器を持つた者が平然と街中で歩いているのか……。私達の世界とはやはり仕組みが違うようだな」

だが、こちらは露の片方にいる凜の視点は違った。

彼女は、帶剣した人が大勢街中を歩いている事に注目したのだ。剣といつても様々である。曲刀、細剣、直剣、大剣、中には槍や斧を持っている人など、武器の種類は様々だ。それにそんな武器を持つている人の服装も多彩である。外套、鎧などがあつた。細かく分類するともっと増えるだろう。

「すいません、安い服屋って知りませんか？」

そんな風に武器を持つてる者たちを凜が警戒していると、露が目

を放した隙に少し離れた所で腰の曲がった老婆に服屋を訪ねていた。彼が聞いた理由は至極簡単だ。探すのが面倒だからである。

「あつちの赤い看板がオススメじゃ。あそこは古着も屋でも綺麗な品物が多いんじや」

露は、さうやって一方を指差す老婆に丁寧に感謝の言葉を告げてから、

「凛、最初は服屋に行くぞ」

凛の近くまで戻ってきた。

「お、お、お前には警戒心といつのがないのか?」

凛は彼に即座に注意する。

彼女は武装した者が沢山歩いているという現実に、いつも以上に気が立っているのである。

これまでの日本の常識と、新しいこの世界の常識。その最中にいる彼女は、どうしても新しい常識が受け入れられないのであった。それはこの世界はこうこうものなのだ。と、頭で理解は出来ても心は納得しないものもある。

「そう神経尖らすな。疲れるだけだぞ」

なのに、どうして彼は、非現実的なこの状況を受け入れられるのか疑問に思つ。

自分自身は全然受け入れられてないのに……。

(ちつ、しかしあ先真つ暗だな。一応金はある幾何学模様が描かれ

た兵士達からも盗っていたが、昨日の宿で10分の1ほど無くなつた。買い物したら、持つてもあと三日。下手すると一日も持たないかもしれない（）

一方の彼は、この世界に着た不安より、今後の生活の方が心配であつた。

「「はあ」」

と、服屋に着くまで二人は憂鬱な雰囲気を漂わせながら歩くのだった。

カラソカラーン

木製の扉を開けた事により、ベルの音が響いた。

「いらっしゃーい！ おや、珍しいね。恋人かい？」

大通りにある沢山の店の一つ。
ヴェトモンという名の店はあった。

「いや、違……」

「ああ、そうだ。で、女の服選びは長いだろ？ だから俺の服を先に見立ててくれ」

焦っている凛はその店主の言葉に否定しようとしたが、それを遮つて特に呼吸も乱れていない露が肯定した。

その事について凜は小声で講義する。

(おー、どうして私を彼女だと言つんだ?)

(大した意味はない。強いて言えば、その方が余計な詮索をされずに済むだろ?)

これによつて彼女は露の言う事に従うしかなかつた。
今の自分たちは詮索されてもその殆どに答えられないからだ。
現に店主は特に疑問を持たなかつた。只の客だと判断したからである。

「あいよー、で、どんな服がいいんだい?」

「上下一式と灰色のローブ。ローブは出来るだけゆつたりめで、袖口が大きいのがいい」

これに店主はちょっと待つてくれ、という言葉と共にすぐ頷いた。
この店内、服はところ狭しに仕舞つているが、日本のように飾つてる様子はない。おそらく余程の上にいかない限り市民はおしゃれさえ出来ないのである。

「これでいいのかい? サイズはどうする?」

店主が出したのは今着てゐるような無地の上下一式が三組と、灰色のフード付きローブが三つ。大きさから判断するにそれぞれサイズが違つ。

「着て判断するから試着していいか?」

「あつちだよ。彼女さんが待ってるから早く決めな

露は店主に指示された所に入り、数分後やつと出てきた。その顔から察するに決まった様である。

「これとこれ頂戴。代金は二つのと一緒に払つから後にし

「あいよ！ で、次は彼女さんだね！ お好みはあるかい？」

田を輝かせ、喜々と迫る店主に凛はどうい反応していいか分からない状態だ。

いや、あの、とあやふやな言語しか発せられない。
そうすると、凛は田で露に助けを求めた。

彼はそれを快く引き受けた。

「おばちゃん、うんと可愛く頼む」

だが、彼から出たのは鶴の一聲ではなく、悪魔の囁きであった。
これから數十分凛は店主の着せ替え人形となるのだった。

「それにしてもおかしな子だつたよ。あの子は……」

露と凛の買い物が済み、店から出て行つた頃、店主は不思議と彼の事を思い返していた。

あんな事を言う男がいるとは思わなかつたのである。
あれは本来なら女性がいう言葉だ。

彼のプロデュースのもと凛が着替え終わり、その格好は白いワンピースにツインテール。これまでの凛々しい彼女の雰囲気とは一転

して、幼いような可愛い雰囲気。

彼女が着る前は似合わないと高を括っていたが、着てみるとそのアンバランスが逆に似合っていた。

『あやははは、似合ひ合ひ』

『笑うな…』

彼女は顔を真っ赤にして、彼は笑っている。

そんな状況で、自分は彼にどうしてこんな格好を彼女にさせたのか聞いた。

すると返ってきたのは驚きの言葉だ。

『おばけやん、女の可憐な武器なんだぜ』

(本当におかしな子だったよ)

店主は今でも彼のあの時の真面目やつな顔を思い出すと、笑みが零れるのであった。

第十二話 買い物（後書き）

すいません、また遅れてしまいました。
次回はおそらく金曜日か土曜日になると思います。

第十四話 酒屋

服屋から出ると、露と凜は再び町の中に戻っていた。

ただ、先程と違うのは服装。露は灰色のゆつたりとしたロープに、凜は白いワンピースにふわりとしたツインテール。

露は別段周囲から注目も集めてなかつたが、凜は違う。

大人びた彼女が醸し出す少女らしさに、老若男女を問わずに視線を集めていた。

「うう……こんなに人目が集まるとは……」

だが、彼女は注目されているという羞恥に、顔を赤くする。これまで羨望や憧れといった視線には慣れている彼女も、親近感に満ち溢れた目線に慣れていないのだ。

「酒場はあっちか」

一方の彼は、そんな彼女を視界に入れない。今後、という大事な瀬戸際を前に、彼は情報を求めていた。そこで向かうのは酒場。彼の独断と偏見により、酒場には無法者が集まり、情報が集まると思っているのだ。

「……露、覚えておくんだぞ……」

彼女はこの恨みの為にしつかりと釘を刺すが、

「初体験の酒場か。さて、どうなる事やら……！」

彼は全然聞いてなく、これから訪れる事を楽しみにしていた。

ギーバツタン

古い木製の扉を開けると、鈍い音が聞こえた。

店中に入るとまず最初に、きついアルコール臭が鼻につく。こんな昼間でも酒を呑んでいる輩は、どの時代でもいるようだつた。店内は意外と狭く、長いカウンター席が一つと四角い机と四つの椅子のセットが数組あるぐらいで、お世辞にも広いとはいえない。

「子どもが酒場に来るんじゃねえよ！」

現在の店内に唯一いる三人組のグループ。その中でも特に体格のいい男が、露を貶した。

そんな男の顔は赤く、酔っ払っているようだ。

しかし、腰には剣があり、胸当てなどの鎧も着けている。

「ギャッハッハ、その通りだ！」

二人を嘲笑つたのは、先程の男と同じテーブルに座る男。服装も大して変わらず、大笑いしながら酒を煽る。

だが露はそんな彼らを無視して、凛の手を引いて突き進む。目指しているのはカウンターにいるこの店の主人であった。

「アルコールが入つてない飲み物を一杯くれ」

露はカウンター席の一つに座り、凛を隣に座らせる。

そしてダンディーな髪を生やした主人に、飲み物を一杯注文した。

「畏まりました。少々お待ち下さい。お連れの女性はどうなさいますか？」

主人は酒を注文しない露達に、紳士な対応をする。

「かつ、彼と同じのを頼む」

凛は自分にも聞かれると思ってなかつたので、慌てながら返した。主人はそれを特に気にはせず、お辞儀をして返して、後ろの棚にある一本の瓶を開け木製のコップに注いだ。

「アルコール無しつて、そんなんなら酒場に来るなよ！ 何しに来たんだよ？」

「ギャッハッハ、全くだ！ こんな事始めてだぜ！－！」

男たちは一人の滑稽さを肴にしながら、また酒を煽る。凛は男達を注意しようと席を立つが、露に腕を掴まれ止められた。そのせいで余計に彼女の苛々は募っていく。

（なんなのだ、あいつ等は！ そして露は何故止める？）

凛は心の中で悪態づいていたが、露は違う。

（飲み物が来たら話を聞くか）

と、三人組を氣にもしていなかつた。

「なあなあ、といひで気付いたんだが、あの子ども《ガキ》可愛くねえか？」

「俺も俺も、そう思つてたところだぜー！」

三人組はこの店内でも異彩な空氣を出す凛に目をつけた。凛はこれに嫌な予感をするが、両手を膝の上に置いて体を小さくするだけ。そして、露を強く睨んだ。

「おい、嬢ちゃん、そんな坊主に付き合つてないで、二つちで酌をやつてくれよ。お礼に色々とサービスしてやるぜ?」

男たちはにやけついた面で凛を呼ぶ。
この時、同時に当たつた、とも思った。

「そりだせ。金は無理でも色々と……な

そして、その中の一人が彼女に下卑た笑みを浮かべながら、彼女の肩を叩いた。

(うう、何故露は私がこんな状況になつても助けない？　何を考えているのだ？)

そんな彼女には、心中で様々な感情が廻った。

それはもし、このまま連れていかれたらという予想。それは最悪の想像だ。しかもこの状況を助け出してくれる王子様は、腕を組み考え方をしている。

もし、自分が抵抗しても、剣を持つてる状況なら話は違つが、今の自分は素手。三人も相手になれば勝てるかどうかわからない。

「嬢ちゃん、やつやけどこちに来いよー！」

「嫌……だ」

「いいから来い！」

言葉で反抗しても無駄だつた。

細い腕を掴まれ、引っ張られても、椅子に座りうと最後まで彼女は抵抗をし続ける。

だが、ついには男が勢いをつけ、背もたれのない四角い椅子から立たされた。

「クククク……」

そんな店内で、露はじょじょに笑い出した。

それははつきり言って不気味だ。

「な、何がおかしい？」

三人を小馬鹿にしたような彼の笑い声。

勿論、男たちはこれを無視できなかつた。次の言葉を息を飲むほど注目している。

「クククク、あんた等が可哀想だと思つてな」

笑いながらの内容は衝撃だった。彼等を心配している言葉なのに、声質は然程も気にしてない。むしろ、楽しみにしている。

これに、男たちは思わず目を点にした。

「ギャハハハ、俺達が可哀想? 何がだ? 言つてみろよ」

男達は酔いながらも、武器を持つてゐる自分達の方が有利だと判断する。

だが、次の言葉で顔から余裕は消えた。

「だつてさ、こんな可愛い子が普通の生まれなわけないだろ?」

普通の生まれじゃない。つまり、上流階級の生まれだと二人は思つた。

普通より下の奴隸や浮浪者とは考えない。

何故なら、上の者でなければ、こんな純白の綺麗な服など着れず、肌の血色もいいわけがない。

思えば、こんな上物に会つた事は久々だ。遊郭でもここまで高い値がつく。

嫌な想像が頭を廻つた。

そして次の言葉で、想像は加速する。

「こんな可愛い子の親なら、田に入れても痛くは無いんだろうな」

つまりは親馬鹿なのだと、彼は言いたかった。

これによつて、三人はもし自分たちが手を出すとどんな目に会つか分からぬ。

「ふん、どうせ嘘だろ？　これは全部演技なんだ！　騙されるな！」

だが、これに異を唱える者がいた。
すつかり酔いも覚めた男の一人だ。
他の二人も酔いが覚め、顔も蒼白である。

「別に俺は独り言を言つてるだけだぜ？　例えば、俺はこの子の護衛だとか、父親は切れ味の悪いナイフを常に持つてるとか、全然気にしなくていいんだぜ」

切れ味の悪い刃物は切れにくく、切る時に激しい苦痛を伴う。それは切れ味のいい刃物の比ではない。

そして、護衛。

(ゆつたりした服なら、隠し武器か？　それとも魔術師？)

その内の一人が露をゆつくりと観察する。

武器は見る限り持つてない。だが、ゆつたりした服装だと裏に何かを隠していたりする事が多いかつたり、魔術で戦う者が多いと聞く

く。

「この男はその類いか?」と、想像した。

だが、あくまで想像。

確信には至らない。

「……おい、帰るぞ。危ない道をわざわざ歩く必要はねえ。もし、子ども『ガキ』の言う事が嘘でも俺達に損失はねえ筈だ」

しかし三人の中の一人、他の二人とは違う武器である背丈ほどの大剣を持った男がこの一人には関わるな、と決断した。
どうやら、この三人の中でもリーダー格の様だ。

「ああ、そうだな……」

男は手を放し、腕を放された彼女は安堵した。

「マスター、金はここに置いてくぜ」

そして三人は、主人が頷く暇も無く、机に勘定を置いて帰つていつた。

彼等は弱くとも戦闘のプロだ。

プロならやられずにやる、が基本。

もし、それを守らなければ明日の保証が出来ないからである。
常に死地へと向かい、戦う傭兵の彼らが下した決断だった。

「まつ、全部嘘だけどな……」

彼らが帰った後、彼が呟いた。
これに凛は呆れて、主人は驚いたのだった。

第十四話 酒屋（後書き）

また、遅れてしまいました。

昨日は用事があり、更新できませんでした。

GWの間は更新出来ると思いますが、もしかしたら出来ないかも

知れません。

第十五話 準備

「俺は今まで田舎から來たせいで、この町の常識に疎いんだけど……簡単に働ける仕事つてあるりますか？」

露は酒屋の主人から出された橙色の飲み物を、一杯口に含んでから聞いた。味は濃厚なリンクゴジュースに似ている。だが、甘味よりも酸味の方が強い。

彼の隣に座り直した凜も、露が飲み物を飲むのを見てから飲んだ。勿論、彼女は美味しかったと述べた。

店の主人は、その感想に満足してから露の質問に答えるのだった。

「ええ、かしこまりました。簡単に……言いますと命の危険に関わる物が多いですね。有名どころで言つと、さつきの三人組のような“傭兵”。あとは“冒険者”や今の時期なら“騎士”でしょうか？」

主人はどういう仕事がやりたいのかが分からなかつた為、この酒場に来る最も多い職業である“傭兵”と、傭兵である彼等が憧れる“騎士”を言つてみた。

主人が聞いた話では、その他の仕事である商人は就職口が少なく、簡単に就労出来る訳ではないし、起業しようとしても元手がかかるので簡単とは言えない、

他の職人も鍛冶なら鍛冶といった能力が必要だ。もし、それが全く無いなら知人の紹介でも無い限り就職は難しいだろう。

「うーん、どれにしようかな？ この三つについて詳しい事を教えてくれませんか」

頭を抱え悩むふりをする彼。

内心はこのいづれかになれば、生活の不安は解消される。いつの時代もお金は必要な物だ。

だが、危ない予感もしていた。

“傭兵”“冒険者”“騎士”、どれも命を賭ける戦いに関する言葉である。冒険者は少し意味が違うが、命の危険があるのは確かだろつ。

もし、これらに就職したとしても、武術をかじったこともない彼の致死率は、剣道の有段者である凛と比べると遙かに高いからであった。

「ええ、それでは傭兵と冒険者についてですが、この二つの違いは特にありません。書いてありません。ギルドに登録すれば、受けた依頼に応じて報酬が貰えます」

「依頼ってどんなのがありますか？」

「やはり、魔物討伐が多いですかね。魔物……は勿論知っているでしそうから、詳しく説明する必要はないでしょう。他にも護衛系や採取が目的の仕事。まあ、どれもそれなりの戦いの腕がないと、これ一本で食べていくのは、大変でしょうけど……」

主人は先程の露の言葉を嘘だと知つてはいるが、傭兵に平氣で立ち向かう態度。

これにより、ある程度の実力者だと判断している。だ

(傭兵と冒険者は、却下だな)

だが、彼は却下とすぐさま判断した。
魔物討伐、詳しく述べなくて分かる。
おそらく、魔物と戦つて殺すのだろう。

しかしながら魔物討伐なんて前述通り、命が幾つあっても足りないからだ。

だとすると彼は残る騎士に賭けるしかない。

出来るなら命の危険が少ない事を祈るばかりであった。

「騎士は……就職出来れば生活は安定しますよ。依頼を受けなくても決まつた給料を毎月貰えますから、命の危険も少ないですしだけで」

渡りに船とはこの事だ。

命の危険が少ないとは、今の彼にとつては嬉しいことだ。

だが、上手い話には裏があるが基本だ。

「騎士についてもう少し詳しい事を聞かせてくれませんか？」

だから深く突っ込んでみた。

「はい。では、騎士とはこの国の軍の兵士の事を指します。やはり軍だけあって、ギルドとは違ひ試験があります。その試験に合格すると、例え浮浪者でも、孤児でも、騎士になる事は出来ます」

これによりこれまで大人しく話を聞いていた凜も、空になつた口ツブを見ながら動搖した。

この国の軍とはつまり、昨日まで自分達がいた所の本拠地。敵のど真ん中に入るのもいい所だ。

普通の精神の者なら選択肢から、当然外すだろ？

「試験つてどんな感じですか？」

(何故、そこを聞くんだ！?)

だが、露は聞いた。

もし、ここで自分が露に問いただしてもこのお店の主人に、怪しく思われるだけだ。

それがきつかけで見つかるなんて事は……無いだろうが、出来るだけ不安要素は避けたい彼女は行動に起こさないのであった。

「試験は……そうですねえ。この国の騎士と一対一で戦って、勝つたら即合格。もし実力が認められても合格です。それに丁度試験は明日行われるんですよ」

これに露はうんうんと頷き、満足したように主人にお礼を言った。

「お代はこの机の上でいいですか？」

「いや、お代はいいです。あの三人組のせいでの掃除も出来ませんでしたから……そのおかげでという事で……」

これにより再度露はお礼を言い、店から出て行つた。

露は満足したようにしていたが、凛の胸の中にはざわめきだけが残つたのだった。

第十六話 武器

あれから数十分経つた今、露と凜は独特の油の匂いがする店に居た。

それは武器屋。

これからどういう職に就いて、どんな風に生きて行くとしても、危険が多いこの世界に武器は必要だと彼が考えたからである。外見は薄汚れていて、中も狭く店自体は小さい。しかも、大通りとは少し外れた道にあるので、見つけるのも困難である。だが、彼がこの武器屋を見つけ、勝手に決めたのは、とても簡単な話で、道行く人々に安い武器屋を聞いて回つたらほぼ全員がこの店を差したである。

守銭奴の露らしい考え方であった。

「本当にこの店で大丈夫なのか？」

露にわだかまりを持ちながらの彼女が心配するは、沢山ある棚や丸い入れ物に乱雑に入れた武器の数々。彼女の祖父の知り合いに武器の専門家がいた為、武器の簡単な手入れ方法や目利きを教わっていた。

それからすると、この保管方法は凄く間違っている。

武器屋としては最低と彼女は考えた。

「ふん、大きなお世話だ。俺の店にケチ付けるんなら出てつてくれい！」

カウンターに座る片足の失くした白髪の老人が、凜に怒声を飛ばした。
彼女の意見が気に触つたらしい。

「その通りだぜ、凜。つべこべ言わずを選べよ。おつ、これ、面白そうだな！」

老人に意見を合わせる彼は、陳列された丸い玉を手に取った。その玉は4センチ台で赤白など様々な色に分かれている。こんな多種多様な武器を見るうちに、露は少し興奮してゐる様である。

「おっ！ それに目をつけたか！ お前さんは嬢ちゃんとは違い、目の付けどころがいいねえ。それは、割ると様々な効能を發揮する物なんだ！」

老人は露の全然ない目利きに感動したようであった。なので、彼が聞かずとも説明し始めた。

「それはだな。色によつて効能が違うんだが、例えば赤だと小さな火を出したり、黄色だと強い光を出す。白は……強烈な爆発音だな」

それは、現在老人が最も力を入れてゐる商品で、この店の目玉商品。

だが、卖れた試しは殆どなく、使い方も散々である。

これは、子どもの遊び道具に売られ、使われる事が殆どであるのだった。

「へえーそれは面白そうだなあ！ 色々と使えそうじゃねえか！」

老人と同じく目を輝かせる露。

この玉、悪戯に使うには持つて来いの性能であった。だが、買おうとは思わない。

彼にとつて興味をそそられる品ではあるが、金欠の状態であつては買いたいにも買えないものである。

「そうだらう！ そうだらう！ 目の付けどいろがいにお前さんを気にいった。その玉幾つか持つて帰つていいぞ！ 好きに使つてくれ！！ どうせ碌に売れねえし、原価も高くねえんだよ！」

仲良く賛同した二人。

類は友を呼ぶとはこの事なのだらう。

「ありがとな。おっさん！ これは上手に使つぜ！」

露と老人は手を組んでいる。

会つて数分の一人が仲良くしている様子を見ると、それが気になり武器選びなど満足にできない凛であった。

「さ、気を取り直して武器選ぶぞ～」

老人から許しも貰つた玉を、幾つか服の中に入れた露も、武器選びを再開し始めた。

今度は玉なんぞには目もくれず、真剣に武器選びを再開する。だが、刃物など包丁やはさみ等しか見た事がない彼にとつては、どれがいいか分からない。

一本一本じっくりと手に取り見るのであった。

「やはり“あれ”は無いのか……」

一方の凛は、使い慣れた刀を片つ端から探すが見つからない。

彼女は、街並みや道に行き交う人を見る限りいつの時代かは分からぬが、ヨーロッパの文化圏に似ていると思っていた。
ならば、日本や中国独特の刀はない。

分かつていた事だが、地味に堪える。

（やはり剣を選ぼうか？ しかし刀とは使い方が違うと聞く。はたして私が持った所で使いこなせるのだろうか？）

悩む。彼女は凄く悩む。

薙刀の心得もあるので、それに近い槍も選ぶ事はできるが、一番の刀には敵わない。

「片刃の剣ってここに置いてるのか？」

「そんなのは無えど。ここは中古品が多いからな」

凛は直刀でもいいと、意を決して聞いてみたが、結果は不発。空振りもいいところだ。

（つむ、だつたら仕方ない。槍と剣で悩むところだが、凡庸性の高い剣にするところだ。

凛は自分が見定めた一本の剣に決めた。

長さは70センチぐらいので、片手でも両手でも扱える重さの剣。装飾は全くなく無骨で綺麗な両刃であった。

「露、私は決まつたぞ。お前はどうあるんだ？」

露は頭を抱えた。

凛の買った剣の代金を払うと、自分の買える武器は安い物ばかり。

(仕方ねえか……)

彼は一つの刃物を取り、老人に聞いた。

「お前さん、それでいいのか?」

「どうせ、何を使っても変わんねえだろ」

結局、彼が選んだ武器は一振りのナイフだった。
包丁よりも少し短い両刃のナイフ。

殺傷能力は少なく、リーチも短い使い捨てのようなナイフであった。

そして、空には月がなく綺麗に星が輝く時。
晩飯も食べ終わった二人は、宿屋で昨日と同じようにベットに腰
かけ向かい合っていた。

討議の内容は当然昼間のことである。

「露、今後の言葉なんだが、この国を出た方がいいと思わんか?」

いきなりこの国の兵士になるとは本気か。とは聞けない為、オブ
ラートに包んで聞いた。

「それは無理だ。旅をするには金がない。今日のこの宿で終わりだ
な」

これはある程度凛は予想していた。

金をあの部屋で奪つたといつても、長い間満足に暮りやるまでは無い。

「 それでなんだが……明日はギルドに行くんだが? 」

「いや、騎士」

一呼吸入れた凜の質問に露は聞鬱も入れず答えた。

今日、彼は酒屋の主人の話を聞いて、騎士になつた時のメリットは大きいと思つたからだ。

それは当然自分たちが、あの部屋から抜け出したとばれたとしても、だ。

この世界の常識を学び、それでいて訓練もでき、給料までも貰える。全ては合格してからの話だが、これはどう考へてもでかい。

特に戦う術を持つてない露にとつては、今ギルドに入つたとしてもそれだけで食えるとは限らない。

「お前は! お前はリスクを減らそつとは思わんのか!? 敵の本拠地に行くとは自殺行為だぞ!! それにギルドに行つて傭兵や冒険者になつても稼げるんだ! わざわざ騎士になる事はないだろう……！」

「当然、それは分かつてゐる。でもな、あいつらもまさか逃げ出した奴が、騎士になりに戻つてくるなんて思はないだろ? 」

そうこれが露の考え方。

普通ならしない事を、常人ならば選ばない選択肢を選ぶ。

馬鹿ではなく、狂人。

もしくは頭のねじが一本外れているのだろう。

それほどまでに異質である。

「……本気なのか？」

凛には、彼がばれないと高を括つてゐるか、それともばれる」とを前提に考へてるかは分からぬ。

だが、明日騎士の試験に行く事は事実だらう。

そして、それにはおそらく自分も行く。

「ああ、本気だ。来たくなかったら来なくていい。試験に通るとも限らないしな」

彼はぶつときりまつに続きを語る。

「だがな、もし騎士で俺達の事情が表立たないほど強運だつたら、俺達はこの先死ぬ事は無い。なら、一回運に任せてみようぜ。どうせ、この世界で生き残るのに運は必要だしな」

露はこれ以降口を閉じ、布団の中に潜つていった。

(運……か。それはお前に必要なのか?)

露は勘違いしているが、彼女が心配しているのは“露”が原因であれが発覚するからなのではない。

彼女自身のせいであれが露見するのを、恐れているのだ。

彼は嘘が上手い。

それも自分よりか数段。

それさえあれば、彼はこの世界で生きていくと囁く。

(だが、私は……)

凛はこれまで祖父から武術を習っていた。それは日本では、人並み以上だと自負している。

だが、この世界ではどれだけ通用するか分からない。

もしかしたら、全然通用しないかもしない。

そんな不安が心を埋め尽くす。

彼と違つて自分はもしかしたら生きる術がないかもしれないのだ。

（私も覚悟を決めるか……）

つまり、今、運が必要なのは自分。

今一度、嫌いな彼を信じてみようと思う。

（この苦難を超えるれば、まだ見ぬ恐怖が待つこの世界で生き残れる……と。

しかし、一方の彼の魂胆は全然違つた。

（なんとか誤魔化せたな。敵ばかりの所で信頼できる味方は必要。特にあいつのような純粋で、同じような境遇を持つ人間はな……）

自分が生き残る上で、彼女という存在が必要なのだ。

この先、何があるか分からない。

ならば、味方は多い方がいいと思つのであった。

第十七話 騎士試験

異世界に来て二日目、口差しが燐々と降り注ぐ広い広場に露と凜はいた。

その城の横にある広場は、とてもとても広く、やぐらしかない。この騎士の訓練場である広場の隣には、騎士の宿泊施設である寮もある。

「へえー、こんなにもいるのか」

そんな中で、ふわりとしたローブを着た露は歓喜の表情に満ちる。この広い広場に数百人はいるかと思われる兵達を全て退け、自分が騎士になるのだと思うと、自然とそういつた顔つきになる。

ただ、そんな策はまだ思いついてはおらず、あくまで予定なのであつた。

「私は本当に合格するのでありますか？」

周囲にこじる目が血走っている男を見て、凜は不安を拭いきれなかつた。

彼女の今の恰好はワンピースではなく、先日騎士から奪った動きやすい服装。腰には昨日買った剣である。それに剣道で何回も全国に行つた事もあるし、毎日祖父と古武術の鍛錬を積んでいた。

だが、それでも不安を拭いきれない。

周りに居る者たちと比べると、鎧の無い自分は些か装備で劣るし、いくら剣道で全国に行つたとしても、所詮スポーツなので実践とはまるで違つ。それに凜自身祖父には勝つた事がないのだ。いつももう少しの所で負けるからであつた。

そして今の、がやがやとうるさい音が飛び交うこの広場には、殺氣立つ者、武器を念入りに点検する者、体を温める為に素振りをする者など、様々な人物がいるが、その殆どの人間の目的はこの試験で“騎士”になる事である。

だが、その道のりは酷く険しい。

新月の次の日に行われるこの試験での合格率は、僅か一回につき一人と言われるほどの最難関で、中には何回も合格者が現れなかつた事もある。

その試験も騎士と一対一で戦つて勝つた者は皆無で、実力が認められて合格した者が殆どだ。

それは騎士に勝てる可能性のある名声を重ねた傭兵や、とある地方で有名な戦士ならば、国自らがスカウトするからである。勿論、例外もいて、この試験で勝つた者も過去に数名いる。しかし、その者たちは全員國自らにスカウトされたのを蹴つて、わざわざこの試験で勝つて合格した変人だ。

その変人を除くと、やはりこの試験で勝つて合格した者は〇となる。いくら新人で名声を持たぬ強き者でも、精銳だらけの騎士達には経験で勝てないのだった。

と、そんな時、この場にいる全員によく通る声が聞こえた。

「『姫さん、今回は人数が多いようなので、いくつかに分かれて試験を行います。お好きな騎士の下に集まってお座りください』」

一人は急いで声の持ち主に目が行き、その後同時に露と凜の驚きの目が合つた。

それはやぐらの上に立つてゐる女性の声が、拡声器も何も使ってないのに、よく聞こえるほど大きな声だったからだ。

だが、これに周りは驚いている様子は無い。

おそらく、この世界ではこれが常識なのだろうと二人は判断した。

「露、私はどの騎士にするかお前の判断に任せるぞ」

凛は様々な人間が、7人いるそれぞれの騎士に向かう時、どの騎士にするかの判断を露にゆだねた。

彼ならば、一番合格できそうな者を選ぶと思つたからだ。

「分かった。まあ、ちょっと待て」

そんな彼は、じっくりと人の動きを観察する。

例えば、一番大勢の人数が集まる女騎士や、数十人しか集まらない厳格な騎士。はたまた、数人しか集まらない騎士さえいた。

彼は焦らず慌てず、7人いる騎士もしっかりと観察するのであつた。

（私ならば誰にするだろう？）

凛は露に騎士の選択権を譲りながらも、独自の考察を広げる。

彼女は集まっている人数が一番多い騎士だからといって、それだけその者と戦つた方が合格率が高いとは思わない。

先程から周りで聞こえる話から想像すると、この試験で勝つた者はほぼいないと知った彼女は、ここにいる騎士達は七人とも一騎当千に値する実力者だろうと考えた。

すると、後半に疲労からくる敗北はあり得ない。

ならば何故、あの騎士を選んだ人間が多いのかと考えた。どの騎士を選んでもあまり大差はないと思えるからだ。

（……サクラしか思いつかんな）

つまりこの内の何人かの間に、サクラがいて彼等が真っ先に動いた事によって、他の者が釣られた。

あくまで想像の範囲内だが、こう考えるのが最も正解率が高いだろうと思う。

もしかしたら、あの女騎士を選んだだけで、勝つ以外に合格方法はないかもしない。

(だとすれば……私なら誰にする?)

一番人数が多い女騎士は当然却下。

次に、二人しか集まつていらない杖のみの青髪のローブ姿の女性もいるが、彼女もネヘミアの件があるので却下。

鎧の上からでもわかる筋肉を持つてゐる騎士が三人もいるが、彼等も勝て無さそうなので却下。

残るは剣を持った優男と、同じく剣を持った特に特徴の無い男。どちらも一人しか受験者がいないので、どちらを選んでもおそらく万夫不当で、違ひがない様にも思える。

(結局は昨晩あいつが言つた運……か……)

おそらく、このどちらかが合格しやすいと彼女は踏み、露もこの二人の内のどちらかを選ぶだろうと思う。

だが、見た限りこれ以上の推察は望めない。

自分では判断しかねるので、凛は露の判断を待つた。

そして彼は、大多数の人間が自分と戦う騎士を選んだ頃に決めた。

「よし、あの人数が一番多い女騎士にするぞ」

本気か！？、と凛は叫びたくなった。

彼の判断に任した事を後悔した時だつた。

こうして、二人の命運を分ける騎士試験が始まつた。

第十八話 魔術

あれから全ての受験者が騎士を選ぶと、この広場にはそれぞれの場所で自然と騎士を中心に空間ができる、即席の闘技場が七つ出来上がった。

「軽い皿口紹介をしておきますと、私はシャロンと申します。では、最初はそこわたくしの貴方どうぞ」

太陽の光で綺麗に輝く白銀の鎧に、ブロンドの髪をなびかせた女性が、露と凜の試験官。剣は90センチ程度の鎧と同じ色で、威風堂々と闘技場の中心に立っている。

そんなシャロンに名指しされた男は立ち上がり、自らの愛剣を構える。男は、騎士に受かるうと険しい表情をしながら、女騎士を見据えた。

「どうで一つお聞きしたいんですが、貴方は剣士ですか？」

シャロンは、まるで決死の姿の男を全く気にしていないように問う。

「見ての通りそれ以外に何があるんだ？ 早く始めよせ」

この返答を聞き、シャロンは懐から一枚のコインを出して男に投げ渡す。

「分かりました。では、このコインが地面に落ちるのが試合の合図ですわ。お好きなときごじ」

「……くわつたれ！…」

「のいかにも余裕そうなシャロンの様子が気にいらなかつたのか、男はコインを下に投げつけ、剣を横に持ちながら彼女に向かつて走る。

そして、袈裟切り。

カキイン！ カキイン！

男の一方的な猛攻により、一撃、二撃、と男とシャロンの剣は幾度も交わる。

これにより男はシャロンに善戦するかと思われた。

シュン！

だが、勝負は一瞬でついた。

「負けを……認めますわね」

シャロンの動きは打ち合ひていた時とは違い、急に冴えて男の首元に剣を突きつけた。

この圧倒的な実力差により、男は負けを認めるしかなかつた。

「……参り……ました……」

男は今度は怒りとは違つ嘆きの声が口から洩れ、その場を静かに去り、また騎士の周りに出来た円陣に座つたのだった。

その男が座つた一定の距離の空間に隙間が出来る。

どうやらここでの暗黙のルールで、試験を終えた者はまだ受けでない者との間には、距離ができるようつだ。

「では、次はそこの方どうぞ」

シャロンの声が、この闘技場に響いたのだった。

「では、次はそこの方で」

あれから40人、シャロンは息も切らさず受験者を何回か剣を合させた後に圧勝している。

負けた受験者はどれも負けた後に、苦い顔をする。

多分だが、合格も何も言われなかつたので、騎士になる望みはないと思つたのだろう。

中には、怒つて帰る者もいたが、それを除いた殆どの敗者は一か所に集まり他の試合を見守る。

おそらく試合を見て、この後己の技術の向上のために、何かを得ようとしているのだ。

「貴方は……剣士ですか？ それとも“魔術師”ですか？」

ここにシャロンは、始めて魔術師という言葉を発した。

この言葉に引っ掛かった露は、今まで以上にこの試合を凝視する羽田となる。

「魔術師です。では……」

魔術師と名乗った男は、足元に落ちていたコインを拾い、親指で上に弾く。

そして、地面にコインが着いた瞬間であった。

「『流れ』」

前に出した男の右手から発した水の玉がシャロンに向かつて飛ぶ。露と凛はこれに似た現象をあの部屋で見た事はあったが、詳しい原理などは知らない。あの時は手品だとでも思っていた。だが、この日本では考えられない現象を前に再確認した。やはりここは夢ではなく“異世界”なんだと。

「『奔れ』」

ところで、水を放たれたシャロンは、前述の通り魔術師だと知っていたので、冷静に剣を仕舞い対処する。

同じく右手を前に出した彼女から出たのは電撃。バチっという音的同时に、水玉と電撃はぶつかり、その両方が消えた。

続いて男は、長い長い詠唱を唱え始めて、龍の姿をした水をシャロンに放つ。

「『奔れ、稻妻よ。それは神の如き一撃』」

だが、その水龍は三言しか喋らなかつたシャロンから放たれた電撃に破れた。

大きさは先程と同じ。

「……参りました。僕の負けです」

基本的に詠唱が長い方が威力の強い魔術だ。

だがこの男は、シャロンの明らかに短い詠唱で、一番自信のある魔術を破られた事により自信喪失して自ら降参した。

「おつかねえ。魔術と剣術両方使えんのか！？」

凛の横にいた男は、シャロンの所業に驚きの声を挙げた。

「すまないが、そこを詳しく教えてもらつてもいいか？」

凛はこの世界の仕組みをやはりよく分かつてないので、よく分かつてそうな驚愕の男に尋ねた。

その鎧を着た受験者はとても親切な様で、分かり易く説明してくれた。

「ああ、お前さんは知らないのか。珍しいがそういう人もいるか……。ちょっと分かりにくいかも知れんが、説明してやる。お前さんも知つてるとと思うが、この世界の人間はな、大体が魔法か武術どちらかの才能を持っている。」

「うむ、それで……」

凛は全然知らなかつたが、適当に合槌を打つた。

ここで怪しまれて、貴重な情報を聞けないのは残念だと思ったからだ。

「だがな、どんな世界にも“例外”はいる。例えば、あの騎士の様に両方の才能を持つてる者や、そのどちらも持つてない者。まあ、それは置いとくとして、一番の問題はあの騎士が両方持つてる事なんだ。ああいうのは魔法戦士や魔法剣士と呼ばれて純粹な剣士と比べて、魔法で体力や筋力の底上げが出来る分強い。これで大体分か

るだろ？」

「……そうだな、助かった。ありがとう」

大体これで分かるだろ、との意味は分からないが、彼女の推測ではこう思つ。

魔術による体力などの底上げ。原理は分からないが、体のポテンシャルを強引に引き上げる方法だと思う。

ならば、同じ剣士であつても圧倒的に体のポテンシャルが高い魔法剣士の方が有利だ。

だが、それには条件があると同時に彼女は思つ。

あの魔術のキーは全て言葉だった。

おそらく底上げにも言葉が必要だと思つ。

（クソッ！ 何故、あいつは隣でこれを聞いても平氣でいられる？ 私達は余計に不利になつたのだぞ！）

露は魔法剣士の説明を頷きながら聞いていたのは、凜も知つている。

だが、それならば何故焦らないのかが分からない。

今、自分たちがいるのは、とても条件的には不利な状況だ。絶体絶命の窮地と言つてもいい。

そんな不安が余計に渦巻く凜とは対照的に、シャロンはルーチンワークの様に作業を進めていた。

時には剣で勝ち、時には魔術で勝ち、はたまた時には戦う前から実力差を感じて降参して勝つ。

様々な方法で全てを蹴散らせ、受験者の残りも半分を切った頃だつた。

「では次は貴女で……」

シャロンは凛を指名したのである。

第十九話 電光石火

(もう私なんか……)

凛はシャロンに指名されたのだが、中々立てないでいた。

理由は不明。

いや、彼女自身その理由は分かつていたのだが、考へないように元氣にしていた。。

(怯えている……のか?)

自分の両手で肩を抱くと、少しだが本当に少しだが震えている。これは決して武者震いではなく、恐怖からくる震え。

魔術に、自分の劣勢に、そして何よりも“負ける”事に対する怯えだ。

思えば、全国大会が懸つた試合でもこんな風に、静かに震えていた事がある。

あの時は近くに先生や友達がいたので、この恐怖をなんとか誤魔化せたが、今はそうはいかない。隣の露を盗み見ると、真顔でシャロンを見ている。こうなると今の自分に助けてくれる者はいなく、支えてくれる者はいないのだ。

「あら、来ないのですか？ では不戦勝でもよろしいですか？」

シャロンから試合の催促が来る。

これにより、この闘技場に居る人間は全員彼女に注目する。

「いや、今行く」

だから凛は、もつ負けてもいい、と震えながらも勢いと気合だけで立つたのだが、

その立つた瞬間に、露によつて右手を急に引っ張られ、地面へと下ろされたのだった。

「なつ、何をするんだ！？」

「なつ、何をしているんですのー？」

「」の唐突な彼の行動に凛と、何故かシャロンまでも驚いた。凛が驚いた理由は簡単で、折角覚悟をして立ち上がったのに彼に止められたからで、シャロンが驚いた理由は、まさかこの大事な試合を妨害されるとは思わなかつたからだ。

だが、露は一人の抗議にも全くもろともせず、堂々と座つたまま言った。

「い・や・だ・ね」

「」の場にいた全員があまりにも唐突すぎて、ぽかん、と呆れたような表情になる。

そして、一斉に笑いだす。

勿論例外として笑わなかつた者もいた。

それは凜とシャロンだ。

凜は試合を止められた事により、最初は戸惑つていたが、今はほつとしたような顔をしている。

だが、シャロンは違つた。

こめかみに青筋を浮かべて露に冷静に聞いた。

「……何が嫌ですか？」

これに露は口角を上げながら。笑う

「俺達はな！ へとへとになつたあんたに勝つて合格するんだよ！ だつたらこんな中途半端な順番で戦えるわけがないだろ？」

この的外れともとれるこの露の一言。

これに周りの人間は余計に大爆笑し始めた。

「ぎやははは、お前何言つてるんだ？ この騎士様が後半ばてるなんて騎士試験が始まつて以来、一度も無いんだぜ。つまりお前が言つてるのは無駄の一言なんだよ！」

この大衆の一人が言つた言葉に他の人間も、そうだそうだ、と合意し始める。

中にはお前なんか無理だ。や、さつさと戦つて負ける。といつた声まで拳がつた。

だが、そんな嘲笑を止めたのは意外な人物だつた。

「分かりました。それは私への挑戦状と受け取つても構いませんわね？」

それはシャロンだった。

「ああ、当然だろ」

この後、露とそれに巻き込まれた凛の順番は後に回された。
反論も当然あつたが、シャロンの意向に逆らえる者はいなかつた
ので、ほどなくしてほとばりは去つた。

「露、どうしてあんな事を言つたのだ？」

だが、凛だけが納得していなかつた。
望まない試合を急に止められたのだ。

それに対して安心もしているが、彼に対する不信感もあつた。
この騎士であるシャロンを選んだのは、自分が彼に任せたのもあ
つてそれなりに納得はしている。

だが、今回急に試合を止めた事には納得していない。

「どうしてつて？ 必要だからだよ。騎士になる為にな」

騎士になる。

言葉にするのは簡単だ。

だが、それを実行するには果てしなく難しい。

凛は、勝手に決めた露に対して、溜まつた鬱憤を晴らすかのよう
に小声で、自分の考えも含め抗議した。

「お前は……お前は知らぬと思つが、もしかしたらこの騎士にこれ
だけの人数が集まつたのは、サクラのおかげかも知れんのだぞ！」

「ほーう、それで？」

彼は凛の予想に目を見開いた。

サクラだなんて考え方思いつかなかつたのである。

「つまり、もし騎士選びも一つの試験ならば、この騎士を選んだ時点で“実力を認められた形での合格”は無いと言いたいのだ！それに先程も誰かが言つていたが、騎士のスタミナ切れはあり得ない。つまりお前がやつたのは無駄だ。そんな状態でどうやって勝つというのだ？」

「この騎士を選んだ時点で八方ふさがりだと、凛は思つている。どう転んでも合格はあり得ない、と。

「あーあ、そういうわけか。凛は俺が騎士に言つたあの言葉を信じて、“スタミナ切れを狙つた策”でこの騎士を選んだと思つたんだな？」

「うむ、そうだ。それ以外に何がある？」

ふむふむと露は顎きながら、ここでまたしても驚愕の言葉を口にした。

「……で残念なお知らせだがな。あれは嘘なんだよ」

「は……？」

口を無様に開き、凛は声を上げられない。

露は「こ」で彼女の反論も許さず、続けた。

「俺があいつを選んだのは凄く簡単で、“試合数が多いほどあいつを観察できる”と思ったからだ。そして、それであいつの弱点を探して勝とうと思つたんだ」

「やりと笑いながらシャロンの試合を見ていた露が「こ」ちに振り返つて言った。

つまり彼は、試合数が多い理由でシャロンに決めたが、試合数の多い方がいいわけは凛等の考えみたいにばてるのを待つていてはなく、ただ試合を沢山見たから彼女に決めた。

だから、例え騎士がこの中からどれだけ強い実力者を選ばなかつたとしても、勝つて合格をするという考え方の彼には関係がない。

「でも！ でも！ それでお前はあいつの弱点を見つけられたのか？」

「こ」が最大の疑問。

もし見つけられなかつたら、彼女に選んだ理由の最大の利点が無くなる。

「一応……な。弱点ではないが、ある特徴は見つかった」

この時、単純に露を凜は尊敬した。

彼は昨日、この世界で生き残るには運が必要なのだと言った。自分はその運を、ある程度人数を絞つてから、というのに使おうとした。これも絶対ではなく、盲点はある。あの一人が両方とも強い場合は

だが、彼は違う。

弱点を見つけられるかどうかに運を使おうとした。ある意味確実で、不安定な策だ。

「ふう、さて、他の方は全て終わりましたわ。後は貴方方どちらかだけですわ」

と、彼女がそこまで考えた所で、電光石火に他の受験者を終わらせたシャロンが、周りに誰もいなくなつた二人を睨んだ。

凜はこれに竦み上がりそうになつたが、何故か先ほどとは違い、震えも起きなかつた。

多分、隣で余裕綽々に座つている彼のおかげだと思つ。

「伊吹、お前が先に行け。アドバイスはこうだ　」

彼の口元に近付けた耳から入つてきたのは、アドバイスとは到底呼ばれないものだった。

「　魔術も、劣勢も、鎧がないのも、どれも気にせず精いっぱい戦つて勝つていい」

第一十話 一人の決着

「ふつ、あれはアドバイスとは呼べんぞ」

彼女は勇ましく歩きながら、闘技場の真ん中へと移動する。そして、これまで何度もこの試験の開始を告げてきた一枚のコインを拾う。

「何を笑つて居るのです？」

彼女は露の言葉を思い出すと、笑みがこぼれる。

「いや、ちよつとな

そう言つて、凛は頭上高く親指でコインを弾いた。コインが中に舞つてゐる間に、凛は剣を正眼に抜き構える。刀と違つてしまくりとこないが、武器も持つてない露に比べると、随分マシだと思ひ。

「ところで貴女は剣士で間違いありえませんわね？」

確認の様にシャロンは聞き、彼女も剣を奇しくも凛と同じ様に構える。

「うむ、そうだ

そして、舞つていたコインが地面へと落ちた。

それと同時に一人は地を思いつきり蹴る。

カキン！

まず、一閃。

上から振り落とした剣が交わり、二人とも後ろに下がる。スピードは両者とも同様で、差はそれほどない。これにシャロンは冷汗をかいだ。

(何故?)

これまで速度で圧勝してきた彼女は、まさか同じスピードだとは思わなかつたのだ。

カキン！

だが、剣で凛の攻撃を防ぎながら、すぐにそのわけに気がつく。
鎧だ。

これまでの者は全員鎧を着けていた為に動きは鈍足だったが、凛は違う。

布切れ一枚の装備しかないので、速度が速いのだ。
だったら何故、鎧を着たシャロンのスピードが鎧を着ていない凛並みに早いのか？

魔法属性、雷 エンチャントマジック
『魔力付加』

それは彼女が使っている魔法に種があつた。

魔法剣士である彼女は、自分の使える魔法を試合が始まる前から少しづつ、これまで永続的に使っていた。

その魔法効果は、自分の速度を上げること。

これで相手を圧倒し、これまでの全戦を勝ってきたのだ。

カキン！

また剣が交わり、二人は後ろへと下がった。

ヒット・アンド・アウエイを忠実に守る両者の剣の実力は、ほぼ同じか些か凛の方が不利。

だが、凛にも有利な点がある。

彼女はまだ剣に使い慣れていないものもあるが、“格上”との戦いは祖父と何百回も試合をやってるおかげで、慣れているのだ。

カキンカキンカキン！

だが、そんな凛にも疲れが見え始めた。
ずっと攻め続けているからだ。

シャロンに魔法の詠唱の暇を与えるようにしている彼女は、攻撃を逸らし続けているシャロンに比べて体力の消耗は激しい。

「はあはあはあ……」

「あら、もう息が切れまして？」

無尽蔵の体力を有しているかのように見える余裕のシャロン。

そんな彼女を見て、凛は苛立つてくる。

強さは、速度は、同じはずなのに、どうしてここまで差が出るのか、と。

ここで凛は一旦離れて息を整えた。

本来ならまだ攻め続けなければいけないが、そんな体力は彼女には無い。

そして、十分に筋肉へと酸素が送られ、同時に脳にまで酸素が送られると、活性化した頭が露の“あの言葉”を蘇らせた。

『 魔術も、劣勢も、鎧がないのも、どれも気にせず精いっぱい戦つて勝つていこう』

魔術を気にしなくてもいい、と彼は言った。
もし、彼の言葉を信じて戦うならば、攻め一辺倒に戦わなくもいい。

(……うむ、どうせなら信じてみるか)

負けてもギルドに入ればいい。
今はそう、気楽に考えられる。

凛は、剣を右手でしつかりと持ち、鞘にも納めず、片刃の刀ではなく両刃の剣なのに、足は大きくスタンスを取り、左手を剣の刃へと添え、左から右へと一直線する居合いのよつな構えをとった。これは彼女が最も自身のある一撃だ。

「何なんですか？ その構えは」

当然、異世界の技術である居合い抜きをシャロンは知らない。いや、両刃の剣が流通しているこの国で、鞘走りで剣速を上げる居合いなんて技術が生み出されるわけがない。
だが、凛はこの構えから繰り出す一撃が一番自信がある。
だから本来の居合い抜きとは違い、鞘走りで剣速は上げず、居合い抜きとしての利点は全くない居合い抜きもどきでも使おうとしていた。

凛は目を少しだけ閉じ、息を大きく吐いて、覚悟に染まつた目を開けた。

ビクッ！

これまでとは違う捕食者の目となつた凛に、シャロンは驚異した。この目をした獣や人は例外に洩れず、強いからだ。シャロンも一度だけこの目をした人間を見た事があるが、やはりその者は強かつた。

（こんな所で見れるなんて……）

こんな“たかが”試験で本気になれるなんて称賛に値する。そう思つたシャロンは、剣をまた正眼に構えて、今度はカウンターをとるよう心がける。

凛は居合いの構えのまま勢いよくシャロンに向かつて駆ける。やがて、シャロンに近付いた彼女は剣を薙ぎ払つた。

でも、残念ながらそれはシャロンの剣に防がれる結果となつてしまつた。

「つおおおおーーーー！」

だが、凛はそれでも諦めない。防がれたとしても、そこで両手持ちに変え、零距離から力を発し、最後には……。

シャロンが剣を手放す結果となつた。

そして凛は勢いよく剣をシャロンの首に突き付け、

「私の勝ちだな」

「ええ、そうですね」

そして、^{つい}終に彼女は“騎士”へとなつたのだった。

第一十一話 露の場合

卷之三

シャロンの宣言とともに、闘技場では拍手喝采が起つた。

負けた挑戦者も試験が終わって騎士もそして負けたシャロンでさえも、彼女の“騎士に勝利”という偉業に誰もが称賛を贈つたのだ。

「おいおー、マジかよ……」「

いつの世にも例外はある。

今回の例外は露

彼は驚きのあまり、勝者に拍手も送らず予想外の声を出して いた。
露は勝て、とは言つたが、本当に勝つなんて夢にも思つていなか
つたのだ。

本来なら、長い時間を与えられ、策を思いつかなかつた時点で、白旗を挙げるつもりだつた。

(これは……俺も勝たなきや いけない空気だよな?)

「」の凛一色に染まる闘技場いや広場を一線引いた所から見て、彼は“降参”をできない空気を感じとつたのだ。

そんな彼の今回の最大の誤算は、凛の実力を、才を、努力を知らなかつた事である。それは異世界に来る前、彼女が学校で賞を贈られたり、校長から模範的な生徒と言われっていても、大して興味は無

かつたから聞いてなかつたのもある。

だが、彼は未だ勝利への道筋はまだ見えていない。

どうしよう、と無限に続くかのような限りの見えない綺麗な青空を見上げながら、彼はあの頂きに佇む騎士の倒す方法を、思い悩むのであつた。

「おいおい、あの黒髪の嬢ちゃんが、俺の秘蔵つ子であるシャロンに勝つだと…？」
「冗談だろ？」

また、試験が終わった騎士の一人である第六騎士団団長のジャックは、拍手を送りながら内心は驚きでいっぱいだ。

第六騎士団に属するシャロンの上司として彼女の才覚を認めていた彼は、まさか負けるだなんて思つていなかつた。むしろ今回のこの試験を楽勝で全員倒すと思っていた。

だが、その一方で、彼は凜の事も認めてはいる。

あの最後の零距離での力の出し方、あれは自分も知らない技術だからであつた。

ところで、彼の目のつけたネヘミア殺しの容疑者である美男子の捜索は、昨日一日かけて探したが何も手がかりが見つからなかつた時点では、心残りではあつたが全ての権限をを部下に任せて、自分は通常業務へと戻つていた。

「ひつ！ それにしても最近は厄日だな……」

ジャックは、国の重鎮であるネヘミアを殺され、お気に入りの騎士を殺してであろうその容疑者を見つけ次第、どんな拷問尋問にかけようかと思案していたが、それも結局は無駄に終わつた。
そんな彼はそれを忘れるかのように、凜に拍手を送る。

半分やけくそのようでもあった。

だが、ジャックは知らない。

彼女が首謀者とは言い難いが、追っている人物は凛だとは。

“容疑者は男”であるという前提が頭の中についた為、“女である凛”をすつかり容疑者から外していた。

だから、いくら彼女を見てもジャックは容疑者だとは思わないのであった。

「へえー彼女勝ったの！」

その一方で、ジャックと同じく驚愕の声を上げるのは、騎士で宮廷魔術師であるマナセ。

だが、彼女は騎士とこれからも、いやこの先も、騎士と呼ばれる事は無いだろう。それは魔術師という役柄、彼女の肩書きは“騎士”ではなく、魔術師なのであるからだ。

(お母さん……)

けれども、マナセは凛の偉業を凄い、と思つていてもどこか心にもあらずであつた。

それは、まだあの事を引き摺つているのもある。

あのネヘミアが殺された事件だ。

それに、自分の予感が外れた事もある。

あれから騎士をほぼ全員集め、顔を騎士達でお互いに見合つたが、知らないという人物は現れなかつたのだ。

こうなると、もう探しようは無い。

念の為、国境などでは全て検問を行つてゐるが、おそらく無駄だらう、と彼女は思う。

証拠を幾つも残し、しかし自分へと続く足跡は残さない人物。

(それはまるで悪魔のよつな狡猾や……)

彼女は、そう血眼の諺を口にして、納得するしかないのであった。

「露、次はお前だぞ！」

熱狂も冷めぬ闘技場を優雅に降り、シャロンの下に向かう彼へと、
すれ違い様にハイタッチをして舞台を譲った凛。
彼女は自分が勝ったので、彼も負けないと疑わない。
現に今も、試験へ向かつた露は自信満々の顔だ。

（はあ、この数日で二度目だぞ）

だが、彼は嘆息をしながらわざと自信満々の顔をしていた。
勝つと信じぬ者に、勝利はやってこないと思つてゐるからだ。

（勝つ覚悟をするのは……）

そして、シャロンのもとへ彼は歩く。

「いいこと？　今回、私を馬鹿にした貴方には、一切の余裕を『え
ません。最初から全力で向かいます』

要するに、遊びはない。

シャロンは凛に負けた悔しさを彼にぶつけて、発散しようと思つ
てゐる。

「 覚悟は、ござりますか？」

そんな勝つ気満々の彼女の言葉を前にして、試合の開始を決めるコインを拾う彼は、顔を変えない。

もう覚悟は決めたのだ。

勝つ覚悟は……。

「あんたも覚悟するんだな。俺はあんたに無様な敗北をくれてやる」

「上等ですか。といひで、貴方は剣士ですか？」

シャロンの試合の開始の決まり文句。
この意味を知っていた彼はこう呟つ。

「いーや、魔術師さ」

そしてコインを指で弾き、そして落ちてくるコインを掴み。
これを繰り返しながらシャロンへと近づく。
その距離、わずか五十センチ。

お互いがお互いにとつて両と鼻の先。
だが、こんな近距離でも試合は始まらない。
露がまだ、コインを地面に落としてないからだ。

「本気ですか！？ それほどまでに自分の魔法の制御に自身がある
と？」

この距離だと少しのミスで起きる魔法の一次災害が、自分へと振
りかかる。

その威力は甚大だ。

もし、自分にその威力が跳ね返れば、自滅もあり得る。別にどの距離から始まるか、は決まっていない。

だが、これまでの受験者はほぼ同じ所で始めていた。それに多少の違いはあっても大きな違いはない。

だから、余計にシャロンは彼に驚く。

「 ああ、本氣だ。だが、ここで一旦ルールの確認をしようぜ。後で無効とか言われたら適わないからな」

だが、残念ながら彼の目は本氣。

一寸の狂いも……無い。

「ふん、ルールの確認ですか？ 分かりました。ですから、貴方も後で無効とは言わないでくださいね？」

シャロンは微笑を浮かべるが、それに慈愛はなくむしろ冷たい笑顔だった。

「 ルールの確認としては、一人で戦うこと。魔獣も仲間も使つた時点で失格とします。それ以外でしたら、どんな魔法も、どんな武技も、どんな道具でさえも使ってはいけない事はありません。これでよろしいですか？」

最後の確認。

覚悟はあるかという彼女の最後の確認だ。

「じゃ、始めようぜ」

そして、彼はコインを宙に弾く。

やがて数秒間の滞空の後、コインは地面へと落ちた。

「『…………』」

「『はし…………』」

この場に居た皆は、これを区切りに激しい魔法戦が始まると心躍る魔法戦が始まると。

ギリギリの魔法戦が始まると。

一人を除いて、この中の誰もがそう思った。

ピカーン――

だが、そんなのは始まらない。

詠唱の最初の言葉と同時に、激しい光がシャロンと露を中心で包んだからだ。

そしてそれによつて一人の詠唱も止まつたからである。

「むっ――？」

「えつー！？」

「なつー！？」

「はつー！？」

やがて、様々な驚きの声と共に光が収まつた。

「降参するよな？」

「えつー？ 何が……！？ なにが、どうなつていいくんですのー！？」

それは、そいつは、ナイフをシャロンへ突きつけた露がいたからである。

第一十一話 露の場合（後書き）

すいません。

更新が又しても遅れました。

明日もいつになるかは分かりませんが、更新は出来ると思います。

第一十一話 騎士

「いいから降参しろよ。どう見ても俺の勝ちだろ?」

露は面倒くさそうにシャロンに語りかける。

このナイフは昨日武器屋で買った物で、簡単に言えば降参をさせ
る為“だけ”に彼が手に入れた物だ。

「あ、貴方……どうして詠唱もなしに魔法が……?」

シャロンの関心は一つだけ。

あの“猛烈な閃光”に関心を示しているのだ。

この世界では、目を塞ぐほどの光を伴った攻撃などそれ程珍しい
ことではない。だから、雷を司る魔法を扱うシャロンは、自らが行
う魔法の練習などでこのような光を何度も目撃してきた。

だが、“全く詠唱がない魔法”つまり、通称無詠唱魔法アンチスペルマジックはこの大

陸では机上の空論とされ、存在しない不可能なものとされている。
その最大の理由を、簡単に説明すると、詠唱というキーがあつて、
始めて魔法というドアが開かれるからである。

なので、鍵なしに扉を開けるのは、ほぼ不可能とされているのだ

「降参したら教えてやるよ」

だから、この甘美とも言える露の言葉に、この場にいた魔術師や
それに関わる人全てが、興味を向けた。

しかし当然ながら、この世界の常識を知らない露はこの事を知ら
ない。

「……分かりました。私わたくしことシャロンは……この試合での……

負けを……認めますわ

「Jの言葉に皮切りに、勝敗に納得した露は、ナイフを捨て、袖口に手を引っ込めた。

これに、シャロンを含めた数十人は、疑問符を頭に浮かべた。
アンチスペルマジック
無詠唱魔法の、原理を説明するだけなら言葉でいいからであった。

「いいぜ。教えてやるよ。答えはこれさ」

そう隠した手の平の上に合ったのは、原理を書いた紙では無い。もっと、以外で、予想外な、“黄色の丸い玉”だ。

「これはな、地面に叩きつけると光が出るんだ。まあ、俗に言つ簡単なスタングレネードだな。知らないのか？」

いや、皆知っている。

スタングレネードといつ言葉に馴染みはないが、シャロンを含めてこの玩具はかなり有名なものだ。

子ども達の遊びである魔法使い、いつこの定番中の定番で、街中でもよく見かける。

「いえ。知っていますわ。でも、まさか、そんな子どもの玩具で、
私が負けたのなんて……屈辱ですわ」

「うん？ そうなのか？」

今度は露の頭に疑問符が浮かんだ。

彼は、武器屋で貰つたこの玉を、子どもの遊びに使われているのだから、有名な物だと思っていた。
だが、違う。

彼のいた地球は現代でこそスタングレーデは敵の無力化等によく使われているが、この異世界では違う。魔法使いにして、遊びに使われているこれを実戦で使う者など一人もいない。目くらましだけなら意味がない。攻撃がなくては。

の考えが主流なこの世界では、この先このスタングレーデが一般的に戦闘に使われるのには、長い年月が必要なのであった。

ここは騎士の食堂。

長い机が何個も置かれ、それに椅子が隙間もなく埋まっている。そこに座つているのは全部で五人。

露、凛、ジャック、シャロン、そして黒いローブに身を包んだ男だ。

「今回の合格者は三人か。さてどうするかな？」

顎に手をやり、面白そうに考え込むジャック。

今回の合格者である騎士は、前々から第六騎士団に全て属することに決まっていた。

だから、どの騎士を、どの小隊に、裁量するかは、この騎士団の団長であるジャックに全ての権限が委ねられている。だが、ジャックにはそれより気になる事があった。

「ところで、お前はこいつに違和感を持ったか？ なんでもいい。気付いていたら教えてくれ

露だ。

彼の勝ち方に興味を持ったのだ。

(「この嬢ちゃんと黒い小僧は聞かなくても大丈夫だな。それより、
この灰色の男だ）

凛は簡単に一言で説明すると、予想外、である。

「このグラトウェル王国が把握できない程の強さを持つ者は偶に居る。その一人が凛であつたと考えれば、すぐさま納得できた。

この黒い男も一言で説明すると、順当。

前々の凛の予想通り、サクラも使ってシャロンにおびき寄せ、頭のいい物を見つける為に、合格を言い渡す騎士は前々から決まっていた。

それに気付いたこの男が合格するのは当然ながら納得できた。

「言つて徳はあるのか？」

だが、問題は露。

この男は悪魔のような狡猾さで、今回の試験を勝利に収めた。その手際の良さが驚くほど鮮麗されているから、興味を抱いたのだ。

「今日はな、お前等ひよつ」をどこの部隊に配属するかは俺が決められる。これで充分な筈だ？」

これにシャロンは立ってジャックに聞いてなかつたと抗議するが、ジャックの一言で口を閉ざす。

(さて、ここつまじづ答えるんだらうな？)

最初、露は魔術師と言つて、武器をシャロンからの注意を外した。次に、ぎりぎりまで彼女に近づき、隠していたナイフが当たる距離にする。

そして、シャロンの詠唱の一瞬で、また隠し持っていたおもちゃを地面に投げた。

最後に、シャロンが田を闊さしている間にナイフを首元に突き付け、ここで王手。

どれもこれも鮮やかな展開。なにか確信が無いと、ここまで隙もなしに行なえるとは思わなかつたからだ。

「違和感……違う。何となく分かつていたんだよ。この騎士が剣士と名乗る者には“剣だけ”で戦い、魔術師と名乗る者には“魔術だけ”で戦うってな」

露は包み隠さず言つた。

これに凛は納得するように頷き、ジャックとシャロンは驚いた。

「へ、へえーそれだけか。坊主？」

ジャックはこの試験前、シャロンの実力のレベルアップの為、剣士には剣で魔術師には魔術で、戦う事を義務づけた。

「ああ、それだけだな。他にはねえよ」

二人は、まさかこれが会場の誰も、同じ騎士で合つても気付かない事に、この男だけが気付いた事に驚き、この男は底が知れないと思つたのだった。

第一二三話 シャロン

「よし、決まつたぞ」

ジャックは数秒考えた後、よつやく三人の配属先が決まった。

「シャロン、お前がこの坊主達を引き取れ」

「本気ですの……」

このジャックの案にすぐさま彼の隣にいたシャロンは反応した。シャロンは試合の結果にあらゆる意味で満足していくなく、その中でも露の評価は最低。

あんな姑息な手で勝つたなど騎士の風上にも置けないと、シャロンは思っている。

その点で言えば彼女の凜に対する評価はましまずだ。剣技においては自分より数段上だと、あの試合で分かつたからであった。

ちなみにもう一人の青年については……どうやって勝ったのか知らないから保留と言つた所であった。

「今回合格者は一人だけだったのに、それ以上に一人も出したお前が、文句あんのか？」

「う言わると、シャロンはぐうの音も出ない。

今回の騎士試験で、不本意ながら余分に一人も合格者を出してしまった事に彼女は負い目を感じている。

「……ええ、でもですわ。もし、それに責任があつたとしても、何故“部隊も持つてない一匹狼”のわたくし私が、どうやって引き取ればいい

と思ひますの…」

でも、これとそれは話は別だ。

シャロンはこれまで騎士団には属していたが、特定の部隊に属した事はない。魔法剣士であるため、遠距離攻撃も近距離攻撃も全て一人で行える。だから、仲間なんて煩わしい物には頼らず、一人で行動することが自然と多くなってしまった。

「じゃあ、作れ。新しいのはそうだな。第六騎士団第二十四小隊か。よし、今からお前はその小隊の隊長を名乗れ。いいか？ これは命令だからな？」

これにシャロンは反論できなかつた。

騎士団では、基本的に上司の命令は絶対。逆らえないような仕組みになつていてる。

例え公爵家の御子息でも、平民での上司には逆らえないのもその為だ。

この騎士という職業は、この国の中でも“力が全て”という極めて異質な部類に入る職業なのであつた。

「……分かりましたわ」

「よし、それじゃ、俺は手続きなんかがあるからお前たちは自口紹介など上手くやつとけよ？ それじゃあな。」

ジャックはそう言って、気まずい四人を残しながら食堂から出て行つたのだった。

そして、ジャックは廊下の真ん中をどかどかと、男らしく歩きながらこう思つ。

(シャロン、お前にもそろそろ仲間は必要だ。それに今回は新人の中でも特に上玉揃い。魔術師の茶髪の坊主は、“あの”宫廷魔術師の秘蔵つ子。嬢ちゃんは若くも魔力付加を使っているシャロンに勝つたほどの剣の腕前)

そして、最後に残った露。

彼は思うに突然変異に近い人間だ。

(そしてあの小僧……は、悪魔に化けるかそれとも魔神に化けるか。まあ、どちらに化けても良くなねえな)

と、ここまで考えてから、未来に思い馳せるジャックなのであつた。

ところで、一いちばんはジャックが去った後の食堂。

依然として冷たい空気は流れ、誰ひとりとして声は出さない。露はぶつきらぼうな目で虚空を見つめ、凛は心配そうな顔で三人を見る。シャロンはどう言いだそうか悩み、茶髪の温和そうな青年もこの空気にどう対処すべきか思い煩う。

「……では、最初に軽く自己紹介と行きましょうか。僕の名前はルカと申します。今後ともよろしくお願ひしますね」

そして、茶髪の青年こと、ルカはこの重い雰囲気を除外する為に引き攀つた笑顔で言った。

「……そこの人一人は知ってると思いますが、私はシャロンと申しますわ。以後お見知りおきください」

次は、暗い表情のシャロンが言つ。

「うむ、では次は私だな。私の名前は凛だ。凛ちゃんとでも、凛とでも、好きに呼んでくれ」

「俺の名は露だ。趣味は嘘と戯言。後は読書かな？　ところでこの名前は偽名ではないから安心してくれ」

そして凛が言い、露は無駄なことまで言つた。

露、凛、ルカ、と三人並んだ対面にシャロンが座っているこの光景。

さつきよりかは、軽くなつたこの場。だが、やはり彼が問題発言を放つ。

「ちなみに俺は武器も魔法も使えない役立たずだから、基本戦力外としてお前ら三人を見守つとくから」

第一十四話 宿

「せ、せ、せ、戦力外って、それでは何の為に騎士になつたのです
の!？」

露の発言に呆れている凛と苦笑いのルカ。そして、怒つたのは、
当然の「」とくシャロンであった。

「えつ、金」

だが、露は悪びれる様子もなかつた。

「金つて……。民を守る使命感等があつて……」

「はあ、そんな奴この騎士団で何人いるんだよ?」

「くつ……」

シャロンは金が目的の露が何となく許せない。

しかし、反論しようとしても露の“正論”に止められた。
軍部特有の権力と金とが巡り合つこの國。

全員が全員民のことなど考えてないのも、シャロンは知ってる。
勿論、金や権力だけではなく、国の為に働いている者もいるのだが、
それは少数派である。

「俺の弱さが知りたければ、明日にしてくれ。それより、俺達はど
こに泊まつたらいいと思う? 宿代がもう無くてな」

これにシャロンは彼の実力を見定めるのを明日に回した。

だが、ふと耳に触れた言葉があった。

「俺達…………ですって？」

そう、宿が無いのは彼一人ではないのだ。

「…………つむ、私だ」

凛が恐れ多いながらも、徐々に手を挙げた。

「あっ、僕の宿は大丈夫ですから安心してください」

今の空気を読んだルカは、シャロンに自分の状況を告げた。

(でも、どうしたらいいですか？)

これにシャロンは考え込む。

騎士の給料は入つてすぐには出ないし、自分がお金渡すのもいいが、今の手持ちは少なく一人が宿に泊まれる分もない。
とすれば……。

「おつじゅましまーす」

「お邪魔するぞ」

「どうしてこうなりますの…………」

その日の午後。

日も沈んだ頃だ。

露と凜はシャロンの家に入っていた。

そこは綺麗に並んだ住宅街に数多くある煉瓦の家の一つ。二階建てで何十人も住めるほどの広さはないが、一人暮らしには十分とうほど広い。

その部屋の中は暖炉とキッチンが一つ。それに机が一つと椅子があり四つあるだけだ。

この家は、貴族であるシャロンの父が騎士となつた祝いに、彼女に与えた物であった。

「夕食は簡単でいいですわよね？」

どんな貴族でも没落貴族で無い限り貴族には、侍女や執事がつるのが普通だ。

だが、この家には一人もいない。

露と凜は不思議には思わなかつたが、この異世界では異質なことである。

「おひ」

「うむ」

「分かりましたわ。少しあ待ちくださいね」

それはシャロン自身が、自分の力だけで、全てを手に入れますわ、と父に宣言したからであつた。

本来ならこれを受諾しないのだが、娘を溺愛しているシャロンの父は別。

何度も説得はしたが、この娘の切な願いを苦汁を飲む思いで受け入れ、そしてせめて家だけは……と彼女の父は譲歩したのだった。

「これだけしか用意できませんでしたが、どうぞお食べになつてください」

机の上に出されたのは、数個のパンと温めなおしたスープ。二人はこの世界に来るまでは、こんな粗食を食べることになるなんて思わなかつた。

「うめえ」

「美味しいな」

しかし、お腹が空いた今となつては、ほんの少しの塩味のスープが絶品にも思える。

机の上に置いたランタンだけで部屋を照らし、シャロンが一人を見つめる中、片時の平穏を味わう露と凜であつた。

時は少し遡る。

食堂から出て行つた後のジャックは、現在王の御前にいた。

そこにいたのは、王であるカナトニア。それにマナセ、國務大臣ダーテイン。そして最後に、王が座つている椅子の後ろで、碧い彩色の施した白いドレスに、赤い扇子を優雅に仰ぎながら立つてゐる赤髪の女性。

議題は、当然異世界人について、だ。

(こいつまで出て來たのかよ……)

ジャックの悪態が心の中に響く。

貴族の嗜みである長い髪も、ルージュで真っ赤に染めた唇も、そしてそれが似合つ白い肌も、全てが全て覚えている。

「クススッ、今回の件、貴方方にしても早計でしたね」

その女性の名は、アンナ。

この国の軍部の最高司令官で、別名グラトウェルの頭脳。ジャックが知る限り、性別以外過去に纏わる詳細は一切不明で、それは王しか知らないと言っていた。

そんな彼女のもう一つの別名は、上策士。

彼女の冴え過ぎる頭脳ゆえか、優れた策略や良策を考えるから、こんな名がついたのであった。

第一十五話 アンナ

「早計つて、なにがだよ?」

ジャックはアンナの嫌味を眉間に皺を寄せながらすぐ言い返した。だが、アンナは特に焦る様子もなく、扇を自分へと優雅に仰いでいる。

「クススツ、なにがつて、わたくしから言わせれば全てです。もし、一つでも貴方方の策が合つていたなら異世界人の痕跡の一つか二つか見つけられたでしょ?」

アンナはジャックを見て、笑みを浮かべる。

その笑みの対象にはマナセも入っており、ジャックとマナセ二人の事を笑っているのだ。

「じゃあ、アンタならその痕跡を見つけられる、とでも言つのかしら?」

マナセも彼女に笑われているのは、アンナの視線から気づいた。だが、マナセはそう安々とアンナを貶したりはできない。王の絶対的な信用をこの中の誰よりもアンナを貶すなど、王を貶すことの同義に当たるからだ。それは、国務大臣のダーテインもマナセと一緒にで、正論を盾としなければアンナに言い返すなどできないのであつた。

「クススツ、当然です。でも、もう遅いです。いくら私わたくしでも見つけるのは無理ですね」

「遅い……じゃと？」

アンナの返答に今度は厳格な王が反応した。

今回、王がアンナをここに呼び寄せたのは、ネヘミアを殺した憎き犯罪者を生き地獄として、永遠に自分たちの奴隸と使役するため、彼女の頭脳を使おうと思つたからだ。

「クススツ、ええ遅いです。凄い遅いです。非常に遅いです。」

もし、それが無理だと分かれば、この会合になんら意味はない。だが、王はこれ以上アンナに根掘り葉掘り聞かなかつた。何故なら、アンナが微笑を浮かべる時はいつも“上策が頭の中にある時”だからであつた。

「ふん、ではどうして無理なのだ？ 詳しく説明してほしいな」

次にアンナに質問したのはダーテインだ。

「クススツ、それは今ある情報ですと、行動の型が分かりません。ですので、彼が何処に行つたか特定不能なのです。もし、他国に行つたとすると、この国に面する国は三つなので、これだけでも三通りあります。これに加えて、町、山、田舎などを考へると、世界は広いので特定不可能ですね」

「では、何のために貴様は来たのだつ……！」

ダーテインは不利な状況であるこちらを笑いに来たのかと、激怒した。

しかし、アンナはまだ、まだ、笑つてゐる。

そして、衝撃的な一言を告げた。

「クススツ、いいえ。私は異世界人を捕まえる策を授けに来たのですよ。いくら私わたしでも、一人で悪魔のようにする賢い異世界人を捕まえるのは無理ですか」

「ほんとなのかしら?」

「クススツ、ええ」

「なら、いいわ」

この発言に最初に反応したは、マナセ。

腕を組み表面上は冷静を保つてゐるが、内心は違う。
母の復讐の為なら死神にでも魂を売り払うような覚悟を決めてる

彼女は、アンナの言葉に注目した。

「やはり……な……」

王も予想通りの展開だが、策の内容までは分からずそれが気になるので、彼女を刮目する。

「どうせ、嘘であろう? 私も、国王も、宫廷魔術師も、第六騎士団騎士団長の四人が知恵を絞つて考えても思いつかなかつたのだ。それを最高司令官がたつた一人で思いついたなんて……」

「クススツ、無能の貴方と一緒にしないでください」

「……ぐ、ぐぬう……」

少しの挑発もアンナを搔くには至らなかつた。
むしろ逆に利用され、ダーティンは王の前で恥をかくはめとなつた。

自業自得とはこのことであらう。

「で、もつたいたいぶるのはこの辺にして、そろそろ策を教えてもらおうか?」

最後はジャックが締め括つた。

ジャックは年自体は上だが、最高司令官のアンナの“部下”として彼女の命令の下、何度も彼女の作戦を実行したことがある。
その時と同様かそれ以上の、アンナの上策を期待しているのだ。

「クススツ、簡単な話ですよ。見つけられないのなら、おびき出せばいいのです」

これに四人はそれぞれ驚いた。

おびき出す。

思いつくのは簡単だが、それを実行して異世界人を吟味するのが難しいから、四人とも口には出さなかつた考え方だ。

まず、おびき出すためのいい香りのした極上の餌が見つからない。

異世界人はほとんど情報を流さずにこの城から出るほど頭がいい。そんな頭のいい異世界人なら、金や権力など生半可な利益では寄つて来ないだろうと四人は思つたからだ。

第二に、もし仮におびき出しても異世界人だと吟味する方法がないからである。いや、あるにはあつて、“精霊の儀”が出来るかどうかで判断するのだが、それは最終的な判断であつて、何百人も集まるとき試験だけで莫大な時間がかかるからだ。

そして最後に、これが最も重要なのが、“異世界人の脱走”は他国に知られてはいけない。

この絶対なる掟があるため、餌も吟味方法も慎重に行わなければいけないからであつた。

「本気……じゃろうな」

「クススツ、ええ……というわけです」

そつと王だけに策の内容を短く耳打ちするアンナに、王はそつと嘆息した。

敵の本拠地であるこの国で、もし罠だと分かっていても食いつくほどの餌。

アンナが用意する餌は一級品だった。
餌 자체を用意するのも大変なほど……。

「おいおい、どうしたことだ？ 僕達にも教えてくれ」

ジャックは呆れ顔の王を見ながらアンナに聞いた。

「クススツ、詳しい」とは言いません。ですので、現時点では貴方が行つてもう事だけお伝えします。その後の指示は私が直接出すので心配はありません」

「でも……」

「クススツ、いいですか？ これは命令です。逆らつと国から追放されますよ？」

反論を言おうとしたマナセは一瞬で、アンナに黙らせられた。ダーティンも本当は言い返したかったのだが、異様な雰囲気を放つアンナに一步後ずさり何も言えないでいる。そしてアンナは扇子をひしゃりと置んで、

「ジャックは、騎士を今そのまま動かしていなさい」

扇子でジャックに命令した。

「了解、司令官」

指差された彼はは、氣だるそうに敬礼した。

「マナセは、餌となる“召喚の儀”的召喚主をお願いします。これは実際に行つので準備もしておいてください」

同じく扇子で指差されたマナセ。

「なつ、本気？」

「はい、当然です。もし、“異世界人が現れなかつた時”は、この国はその“新たな異世界人を勇者”とします”

「でも……」

召喚の儀。

それは露と凜がこの異世界に呼び出された儀式。

アンナは発動するには様々な条件があり、その条件の一いつを伝えられているだろうネヘミアの娘に任せた。

これにマナセは、これまで以上の驚きを見せる。

「心配ありません。貴方は貴方の準備をしていればいいです。お気に入りの騎士も次の次の満月までには用意できるでしょう？ それに異論は認めません」

母が死んだ原因の儀式など本当は行いたくなかったマナセだが、上司の命令には逆らえない。

それに時間はたっぷりとある。

「……分かったわ」

マナセは母の復讐のため、死ぬわけにはいかないとの時に決めるのであった。

「ダーテイン、貴方はこの王都で“召喚の儀”を行うといふ情報を各地に流してください」

最後に指示したのはダーテイン。

「どのくらく、だ？」

「とにかく、他国も国内も出来る限り流しなさい。貴方はどれだけ人が集まるかだけを考えなさい。後の事は私が手配します」

以外にも彼は反抗せず、無言で頷いた。

さつきの後ずさつた感覚がまだ覚えているのか、何も言えない様子でもある。

「 今日のところは以上です。後は隨時連絡します。それでは解散してください」

そして、その一分後、それ以上何の反論もなく会合は終わった。さらに、この一週間後から徐々にこの大陸では、“グラトウェル王国の秘術”が公開されるという噂が広まりつつあるのだった。

第一十六話 騒動

異世界に来て四日目、激動の数日を送っていた露と凜は夜が明け陽が真上に上がる少し前、昨日行われた騎士試験の会場である広場にシャロンと一緒にいた。

昨日と大して変わりはないが、やぐらが無くなつたのが大きな違ひだろう。

第六騎士団の演習場であるここに第六騎士団に所属している騎士が集まるのは、ほぼ義務とされ任務などがない限り、一日の大半をここで過ごすので、既に露等がついた時点で十数人の騎士がいた。ところでそんな騎士たちの服装は、各々違つた。

粗末なローブの者もいれば、鎧の者。

その点だけで言えば、昨日との違いはない。

「たしか貴方はは剣を持つていませんでしわね？ しうがないですね。お古ですが私のをお使いになつてください」

そう自宅にいたころ剣を持つていない露に手渡されたのは、シャロンと同じ型の白銀の剣。

だが、若干シャロンのと比べると短く感じる。

おそらく彼女の幼少期に使われていた剣だと彼は予想した。

そんな剣を腰に携えた露は、この広場に入った時、嫌な視線を感じた。

(やけに俺たち注目されてないか?)

それはこの広場にいる“全ての騎士”的目線が、三人へと向いてるからであった。

その視線の意味は様々だ。

羨望もあれば、嫉妬もあり、好奇心もあれば、嫌悪感もある。

「シャロン殿、」の視線はなんなんだ？」

そのねつとりとした視線に、次は凜が気づいた。

服装は昨日と変わらない彼女。

髪は日に日に伸びたうえで布で一本に縛つており、訓練に邪魔にならないようにしていた。

「おやらく私は昨日の騎士試験の結果が王都に広がったのだと思います」

凜の質問には元気なさげにシャロンが答えた。

昨日と服装が変わらないのはシャロンも同じで、戦闘の邪魔にならない短い髪では紐で括る必要はなさそうである。

「勝つて合格するのは極稀ですからね……」

異例の結果。

受験者が試験官に勝つといつ過去に数例しかない事例に、この場にいる者は注目しているのだ。

そんな結果に、シャロンは少し後ろめたさを感じていた。

受験者に負ける。

弱いはずの受験者に負けるといつことで、自分の強さに自信をなくし、ほかの騎士に舐められるのではないかと心配していた。

「おい、雑魚の騎士様が来たぞお～～

「本當だ。成金騎士の」到着だあ～～

その心配が現実となる。

いかにも小物な騎士二人が三人へと近づいてきた。

彼らにとつてシャロンはある意味邪魔な存在だ。

団長に気に入られ、次々と功績を上げ、おまけに魔法剣士。逆立ちしたつて実力的に弱い彼らでは勝てる相手ではなく、だがその一方で彼女への不満は募つていく。

「またあいつらやつてるぜ……」

そんな声が周りから響くほど、彼らはシャロンが小さい失敗をすることに、失敗をネチネチとほじくつていた。

「……」

だが、今のシャロンは何も言わない。

いつもひつで、事実には何も言い返さないのであった。

「シャロン殿……」

そんな唇を噛んでじっと堪えるシャロンを見て凜も何も言えなかつた。

シャキン！

そんな時だつた。

露が剣を抜いたのは。

やがて抜いた剣を顔の前に構え、無表情で綺麗に磨かれた刀身をじっと見つめる。

「お、おい、そんな……そんな剣をどう使うんだよ？」

「や、そつだそつだ」

不気味な笑顔をして剣を見ていた露に、騎士一人はびくつと一步後ずさった。

広場にいた全員がぐつと目を見開いて、露に注目した。
そして……。

「じりつて訓練に決まってるだろ？　ほかにじりつ使ひんだよ？」

ドサツ！

どこかでそう聞こえた。

この間抜けな言葉に誰かが倒れたのである。
露は最初から騎士一人など目に入つておらず、自分のことしか考
えてなかつた。

「シャロン、俺の腕前を見るんだろ？　いつたい何をすればいいん
だ？」

周囲にまつたく左右されず、自分を突き進む彼。
そんな彼に、一つ溜息をして、

「とりあえず、素振りをお願いしますわ！」

笑顔でシャロンは言った。

これに露は頷き、また全員が固唾を呑んで見守る中、剣を正中に構えた。

その皆の興味は同じ。

“露の勝ち方を知らない彼ら”は、“露がどれほどの実力かを楽しみにしているのだ。

「ヒテツ！」

上から下へと露は剣を振るつ。

「むっ！？」

だが、凜やシャロンとは剣から出る音が違つた。

一人が奏でるは、綺麗な風切り音。

露が響かせたのは振るつた剣の重さに耐え切れず、地面へと剣を叩きつける鈍い音だつたのだ。

「たんなる雑魚じやねえか！ ブワハッハッ、これに負けたお嬢様はどれだけ弱いんだよ！？」

「雑魚どじりか剣なんて子どもでも振れるぞー、あれは赤ん坊以下だぜ！」

一時の静寂の後、この予想外の弱さにて、シャロンへと絡んでいた騎士二人は大きく笑い出した。

他の騎士たちもこの弱さには、小さくくすくすと笑い、凜はやつぱつと口に出す。

(これが真剣か……予想以上に重いな)

そんな元凶である露は、一回振つただけで満足していた。
金属バットを思いつきり振つたような感覚。

もやしつ子の彼には、重すぎたようで耐え切れるわけもなかつた。
この時、筋トレ始めよ、と静かに露は決意するのだつた。
そんな様々な笑声が飛び交う広場を、

「お黙りなさいっ！ いくら貴方わたくし方でも、私の部下を殴なぐすのは許しませんわよ！」

静肅にしたのはシャロンであった。

「ふん、落ちこぼれを笑つて何が……」

ここまで言いかけて、一人組みの騎士は言葉を止めた。
バチッ、という音が、彼女の体から発しられたからであつた。
怒りによつて魔力制御が乱れ、魔力が全身に廻る。
それによつて引き起こされた魔力付加エンチャントマジックの兆きざししとも言える電撃音。
ここで彼女が一詠唱をすれば、全てにおいて彼らに勝ち目はない。
そこまで、魔力付加エンチャントマジックを使えるか使えないかの差は大きいのだ。

「きよ、今日はこの辺にしておこしてやる！」

「ふ、ふん。この事をよく覚えておくんだな」

いろいろと不利になつた騎士一人が逃げ出したことによつて、他の騎士の注目も次第に薄れていつた。

そして、騎士たちに残つた思ひは一つ。

露は騎士試験で合格した騎士ではない。

おそらく別の方法で騎士になつたと考へたのだつた。

「さて、邪魔者は消えましたね」

いつものうるさい一人を大声で怒鳴れたので、ちょっとすつきりしたシャロン。

「ところで、ルカは何で居ないんだ?」

先ほどの騒動を気にしなかつた露は、邪魔者よりもここに来ないルカのことを気にしていた。

「ルカさん、ですわね。彼は用事で今日は来れないみたいですね。それより――」

ここで一旦シャロンは考へをまとめる。

先ほど、自分は不本意ながら勢いで露を部下だと言つた。

とすれば、凜やルカはともかく、彼の弱さは小隊の弱点ともなりかねない。

魔術が使えるは嘘だつたし、剣も満足に扱えないからだ。あの時、自分に勝つた時の観察眼と、作戦は見事だが、あんな奇策なども成功しないと考へた。

(だつたら……)

と、彼女は思つた。

彼は弱い。

自分の小隊の中どころか、騎士の中でも底辺に値する実力だらう。

だが、じつとも同時に思ひ。

弱ければ鍛えればいい。

最初から強いものなどいないのだから……。

「 今日から剣の訓練を始めますわよ! 」

「 はあつ! ? 「冗談だろ? 」

すぐに彼は反論した。
が、それも無駄になる。

「 うむ、それは私も賛同しよう。強さはこの先必須だからな! 」

凜もシャロンに賛成したからだ。

こうして、凜とシャロンに近寄られ、退路の絶たれた彼は最後に
じつ呟いた。

「 私も協力するから安心しろ! 」

「 私も習つた全てを叩き込みますわ! 」

「 なにこの状況? 美女一人に寄つてられてるのに全然嬉しく
ねえよ…… 」

この日訓練で疲れた時に見た青空は、とても綺麗だったと彼は語るのだった。

第一一十七話 前日

不運によつて、異世界に訪れて五日目。今日もまた、露達三人はあの広場に集まつてゐる。

その広場では、きちんとした区切りはないが、小隊ごとにある程度の間隔で分かれており、露等もまたほかの小隊とは一定の距離の場所にいた。

「さて、今日も訓練を始めますわよー。」

そんな場所で、シャロンは昨日通りの格好をしながら、昨日の訓練の続きを始めようとしている。

彼女にとつて昨日の露の出来は最悪だった。

一日丸々費やしても、彼が覚えたのは上から下に振り下ろす切り下げる程度形になつた程度。

天才とは程遠く、しかも体が鍛えられていない露。

彼の上達速度は彼女から見るに下の上。剣術の才能はあまりなかつた。

「あー俺は今日調子が悪いんだ。明日にしてくれ」

一方、やる気があるシャロンとは反対に、露は疲れきつた顔をしてた。

それもその筈。

昨日たつた一日だけ行われた訓練によつて、彼の体の節々は悲鳴を上げ、手にはまめができていたのだから。都会のもやしつ子とはこのことだ。

「あはは、昨日は大変そうでしたね……」

そう苦笑いをしながら、木陰に座っているのは昨日いなかつたル力。

用事の詳しいことは言わなかつたが、三人に会つたときに謝罪だけをし、ここにいた。

服装は黒い下地に白い刺繡の入つたローブ。
茶髪は短く、長身で、温和そうな優しい顔。
難しそうな分厚い本を手には持つている。

「露、仮病とは何事だ！　すぐに始めるぞ！」

と、こちらはシャロンと同様やる気満々の凛。
彼女の服装は昨日とは違い、簡素ながら胸当てや腰当などの革で作られた防具をつけていた。

「だから筋肉痛なんだって。今日は休みにしようぜ」

「嫌ですわ。ひと時も無駄に出来ませんから」

と、手をぱらんぱらんとしている露に、すぐシャロンは反論する。

「じゃあ、凛。俺はこの通り、手が痛くて剣が握れない。今度にしよづめ」

「うむ、確かにそうだな。だが、大丈夫だ。人の体はそう軟やわではない。次第に慣れる」

今度は凛に手の平を見せるが、血豆を見ても彼女の意見は変わらず。

「じゃあ……」

「僕は何も言いませんよ。後が怖いですから」

露が最後の望みとなつたルカは、彼が何か言つ前に彼の言動を止める。

本を読みながらも、勘がよく働くルカであった。

「では、これで誰も文句はありませんわよね？」

「うむ

「ええ

四人の中の三人が賛成した。

「はあ、仕方ねえか……」

これによつて適當なことを言つても、頭から否定されるとと思つた露はどつこにしょと重い腰を上げると、ここで予想外の声が“響いた”。

「 シャロン、俺は文句があるぜ」

その男はジャック。

少し離れた所から、ゆっくりと四人に近づき、手には一枚の紙を

持つている。

ちなみに、露は立つた瞬間に座っていた。

「ジャック団長……」

「一日ぶりだな。調子はどうだ?」

「ええ。とてもいいです。でも、何故ここに?」

「良い知らせがあつて来たんだよ」

そうジャックは四人の近くに座った。

「良い……知らせですか?」

「」でシャロンの頭には疑問が浮かぶ。
良い知らせ。

元々一人で活動していた彼女に、ジャックの言つことに思い当たることはない。

「ああ。第一十四隊の初“^{クエスト}仕事”だ」

「仕事………！」

これにシャロンの顔に笑みが表れた。

この隊の実力を試すには、ちょうど良い機会だからである。

そんなシャロンたちが所属する第六騎士団はグラトウェル王国の中でも特殊に分類される騎士団で、本来の騎士の仕事は警察のような城や町の警護やもしくは要人の護衛が主だが、第六騎士団は違う。その騎士団は、各地に出没する魔獣モンスターを討伐するのが彼等の主な仕

事で、その致死率や危険性は騎士団の中でも随一に高く、別名死神騎士団^{ナイツ}と呼ばれることがあります。

ところで余談だが、この死亡率はあくまで騎士団の中で高いだけで、実際の死亡率は傭兵のほうが高いとされている。

「最初だからな。簡単な魔獣^{モンスター}討伐だ」

そうジャックは持っていた紙をシャロンに渡した。

内容は「これから歩いて一日の村に最近出没した魔獣^{モンスター}ローウルフ群狼。

よく叩撃される魔獣^{モンスター}で、レベル的には弱いのだが、群れの数が増えると厄介とされているだけで、本来なら傭兵に任せられるような簡単な魔獣^{モンスター}だ。

そんなのを、わざわざ自分達のためにこれを取りってきたと思つと、シャロンは涙腺が緩んだ。

「ジャック団長。有難う御座りますわー！」

「ふつ、じゃあ、俺からは以上だ」

お札を書いたシャロンをひとつ受け流し、ジャックはここから去つた。

おひりく、まだ別の仕事があるのだろう。

「聞きましたわね？」

「ああ」

「わむ」

「ええ

彼女は振り返って露と凛、そしてルカを見た。

先ほどとは違う引き締まった顔を見て、シャロンの顔もよう一層真剣になる。

「 今日は流すだけにして、明日に備えますわよー。」

そして、最初に言つてた言葉を百八十度覆したのだった。

第二十八話 群狼

遂にこの世界に来て、一週間が経つた。

昨日一日は仕事^{クエスト}のため、ほぼ徒歩での移動と野宿に費やした。シャロンとルカはともかく、露と凜は初挑戦の野宿。慣れない地べたの上での就寝はちと無理があるらしく、一人とも深いくまが目の下に出来ている。

これが仕事^{クエスト}の度の恒例行事だと考へると、少し憂鬱な気分の二人だった。

「ふわあ～、ねむ」

少し肌寒いからつ風が吹く中、そんな欠伸をはいた露も含めて、四人が今いる場所は木々が一定の等間隔でいった森の中。近くの者によつて整備されてる証拠だ。

しかし、昨日歩いていた草木が殆んどない剥き出しの土の道路に比べると、本日歩いているのはちゃんとした道もない獸道である。そこで三人が警戒しながら探しているのは、群狼。

群れ意識が高く、個々の能力がそれほど高いわけでもないので、狩りもほぼ集団で囲つて襲うことが多い種類とされている。そして本来なら人が出くわさないような森林に生息しているのが普通だが、たまに人里にも下りてくる。こうなると、一般人には危険で、傭兵や騎士には最初の登竜門とされている魔獣^{モンスター}と変わる。

「アラワさん！」

小声でシャロンは注意した。

それは彼だけが、ほかの新人に比べて緊張感がないからであつた。細かく周囲を見渡す凜とルカとは対照的に、露は正面だけをぼお

一つと見つめ、さらには欠伸までいている。

シャロンも過度な緊張感など求めてない。

力が入りすぎると空回りすることもあるからだ。

だが、露の緊張感はシャロンの注意で高まる様子は一向に無かつた。

顔だけシャロンに振り向くが、聞く様子は無く、さらにもう一回欠伸をするだけ。

ここでもう一回、今度は大声で露にシャロンは注意しようとしたが、それは叶わない結果となる。

ワオ ン！！

遠くで遠吠えが、鳴いたからであった。

狼のような、高く甲高い声。

その遠吠えを、四人のうちの誰もが思つ。これが“開戦の狼煙”だと。

シユバツ！

最初にその声へと向かったのは凜。

彼女は憤怒に染まつた目をし、腰にある剣を抜く低い体制で、最短距離に突き進む。

そんな彼女が怒りに染まつてゐるのは、“ある理由”があつた。昨夜泊まつた宿の主人から、この村には群狼^{ローウルフ}に襲われた者が複数いるという情報を聞いたからである。

悪い言い方をすると、彼女は単純だ。

襲われた者がいる、ただこれだけの理由で闘志を燃やして一直線に進める。その襲われた者が親族でもなく、友達でもなく、まして

や近所の知り合いでもないのに、だ。

そんな理由もあってか、彼女はまた一步、大地を蹴るのだった。

「ふう……」

次に標的へと走り出したのは、ルカである。
バツバツバツ、という普通に走るのなら出せない小さい爆発音を
出しながら、跨ぐように一步一歩を大きくして進む。

その速さはゆっくりとした動作とは反対に、驚くほど素早い。

そんな彼の戦いに望む理由は簡単だ。

“仕事”だから、である。

仕事だからここまで訪れ、仕事だから速やかに目的を排除する。

そして、手柄をあげ、“ある目的”的に、出来るだけ速く上位へ行きたいルカであった。

「行くか……」

そして次に向かったのが露。

前の二人とは違い、歩きながらゆっくりと進む。

左腰の白銀の剣の重さに煩わしさを感じていて彼の戦う理由は…

…残念ながら無い。

できれば自分が現場に着く前に、終わっていてくれ、と思う彼だ
った。

(アラワさん、何をもたらしていきますの!?)

露にやるせない気持ちを思いながら、三人を追つたのはシャロン。
今回の仕事^{クエスト}、これはある種の試験でもあり、その内容は三人の個性を見極めること。それがこの小隊の長である彼女の役目である。
何故なら、群狼^{ローウルフ}など、これまでに何十匹も一人で斃してきた彼女

にとつては、この仕事などたつた一人で楽にこなせるからだ。

キャンキャン！

森に響いた二度目の声は、群狼の悲鳴だつた。^{ローウルフ}

凛が一閃した剣により、その胴が綺麗に斬れた事によつて起きる彼にとつての生涯最後の悲鳴。

彼女はその悲鳴を聞いても、氣にも止めず、残つた群狼をまた狙いに行く。

生物を慈しみ、虫一匹殺さなかつた凛が、今や平氣で生き物を殺す。

日本にいた頃では考えられない行動だ。

おそらく、異世界にきて、彼女の心の中でなんらかの変化があつたのだろう。

(平氣に殺せる。私の中で何があつた？)

そう、また一匹殺しながら思った。

獣の血を体に浴びた事により、彼女の頭は一気に冷めた。

(ふつ、おそらくあいつだな)

その変化のきっかけは、たぶん露。

彼がこの世界に来て、一番最初に人殺しを見せたため。

あの時、次々に彼女を襲つた“不幸”の終章が、自分をこんな風に劇的に変えた、と凛は思う。

その事を別に恨んではない。

どうあれ、生き物を殺すという所業は、この世界で生きていくのに必要だと、どこかで直感したからである。

だが、冷静に考えると、いくら他人を守るために命を奪うという行為には、虚無感しか残らないのだと、知った凜であった。

「『燃える』」

ルカは群狼ローウルフが視界に入ると、それに向かいながら徐々に詠唱を始める。

「『その煙は断罪の証、その煙は業火の証』」

早く、何よりも早く言の葉を綴る。

「『そしてその煙は我が生きてる証と成れ』」

詠唱が終ると同時に、ルカの周りから数多くの火の玉が発現した。

その火の玉は、ルカの存在にも気づいていない三匹ローウルフの群狼を狙う。そして一匹につき数個の火の玉が当たって、『それ』は絶命した。

魔法属性、火　　『多連火球フレアボール』

火属性の中でも基本的な魔法である火球の数を多くなるように、ルカが発展させた魔法である。

このルカの一番得意な魔法による不意打ちで、彼は群狼ローウルフを殺したのだった。

(リンさん……流石ですね)

シャロンは、二人が取り逃がした一匹を剣で殺しながらそう思つた。

彼女が見た限り、凛の技量はやはり脱帽に値する。

まず、合計で三匹殺した凛の実力は、騎士試験の時から分かつていたが、今回の件でさらに折り紙つきとなつた。必要最低限の動きに、皮膚の薄いところを狙うことによる一撃必殺。まだ、動きとしては若干の硬さや不慣れな感じも見て取れるものも、新人としてはおそらく自分の時以上の逸材だ。

魔法を使えば勝てるとシャロンは思うが、にわか仕込みの速さに任せた剣技だけでは、また絶対に敵わないと感じた。

(ルカさんはやはり“あの方”的弟子だったことはありますね)

一撃で、凛と同様の三匹殺したルカの実力も、新人の中でも指折りだろう。

基本的な魔法を発展させる難しさも驚くが、彼女の視点は違う。最も驚愕したのは、三匹とも魔法を命中させるその集中力だ。三匹を同時に狙う難しさは、例えると同時に両手で文字を書きながら、口でもペンを持って字を書くぐらい困難だ。

シャロンもそんな芸当は当然出来ない。

凛とは反対に、剣も使えば勝てると思つものの、魔法単体では負けるというのが、彼女の見解だ。

(最後にアラワさんは、何がやりたいですか?)

だが、賞賛を与えた前の一人とは違つて、露の評価は些か厳しい

ものだつた。

それもそのはず。

二人が取りこぼした一匹は、本来なら最も近い露が狩るべきであつたが、彼は無様に逃げていた。

群狼ローワルフが飛び掛ると転がりながら避け、足で勝てないと分かると木に登つて高笑いします。

そんな光景にシャロンは呆れて、群狼ローワルフを殺したのだ。

そうすると自然に、そんな露に、どうして自分が負けたのだと、深い自責へと追い込まれる。

こんな“弱い人間”に負けるなんて、とまた思い返すのだつた。

「おっ、助かつた助かつた」

そう言つて、露は木から降りた。

灰色のローブは転がった代償に少し破れ、砂埃がかかっている。彼には男としてのプライドが無いのか、シャロンに助けられても平然としていた。

だが、内心は違つ。

初めて見る魔獸モンスターに、凄く動搖していた。

それはシャロンの話から、これが低いレベルの魔獸モンスターだと、知つたからである。

もはや、冷や汗も出ない。

もし高いレベルの魔獸モンスターと会つたら……と考えると、冷や汗しか出ない露であった。

ゴアアアア

！！！

しかし、彼がほっとしているのもつかの間、次なる災厄が四人を襲つた。

耳に残るは、群狼ローワルフの高い遠吠えとは違う、怒りに満ちた深い唸り声。

と、同時に木が倒れるような鈍い音も聞こえる。

ドスン！ ドスン！

その“何か”が、群狼ローワルフの最後の声を聞いて、ここに辿り着いたのは、四人が逃げる暇があるほどの時間はかからなかつた。故に、四人は逃げられなかつたのである。

第二十八話 群狼（後書き）

多い、の力タカナ表記が分かりませんでした。
もし、分かる人がいたら教えてください。

第一十九話 魔獣？（前書き）

先週の日曜日は更新できず申し訳ありません。
これは別に、今週の日曜日はきちんと更新しますので、安心してください。

第二十九話 魔獣？

最初に彼等の目に入った“それ”は、頭上の太陽も隠れるほどの大好きな体躯。そして分厚い毛に覆われた体の表面。その体色はどす黒く、太い四肢の先端には鋭い爪。口から覗かせるは鋭利な刀物。それから猛禽類のような眼。

(これは……！……！)

そして、露と凜が“それ”的姿を見たとき、彼等の脳裏に蘇つた映像は誰でも知ってるあの動物であった。

(熊！……！)

そう、凶暴な肉食獣だという認識が高い熊だ。その巨躯から見ても、顔から見ても、徹頭徹尾最早熊としか一人は見えない。だから、余計に危険だと、一人は思ったのだ。

さらに、この時、シャロンとルカにも露と凜とは違う考えが浮かんでいた。この魔獣^{モンスター}に見覚えがあると思ったのだ。どこで、どんな状況だった、かは思い出せない。だが、その記憶に刻まれていたのは、偶然にも前の二人と同じ事である。

これは危険だ、と直感したのだ。

奇跡的に四人の気持ちが、まったく違う方向で揃い始めた時、これまで佇んでいた“それ”が行動を起こした。

ゴアアアアア
！！！！！

咆哮。

それは凄まじい爆音だった。

周りの木の葉が揺れ、大気が轟いたほど……。

四人は、これに思わず手で耳を塞ぎたくなつたが、実行には移せない。各々が、それぞれ、“それ”に対する最も適した体勢をとつたからである。

その内、三人は戦闘体制だつた。そして、残つた一人は逃亡体制。

ゴアアアアアア
…………

二度目の“それ”的咆哮では、それぞれが、遂に行動へと移す。最初に動いたのは“それ”だ。

一足歩行から四足歩行へと戻り、一番近いシャロンへと向かつた。

「くつ！」

シャロンは突進してきた“それ”的噛みつきを、剣を間に入れて防ぐ。

剣は名匠に作られた業物なので、突進の衝撃でも、剣に加わる“それ”的咬む力でも、折れはしない。

だが、剣ではなくシャロンに問題があつた。

現在、彼女は魔力付加エンチャントマジックを使つてはいない。

だから、筋力の差で“それ”に負けそうなのだ。

しかし、魔力付加エンチャントマジックは、おいそれと簡単に出来るものではない。一度発動した状態の継続は簡単なのだが、その発動が難しく、ただ一度言詠唱するだけ、たつたそれだけの行為に多大な集中力を要する。今、集中力を魔法に回したら、間違いなく“それ”に胴体を喰いちぎられる。

そう思つたため、これを必死に耐えるしか、シャロンには出来なかつた。

「シャロン隊長っ！」

ここで、彼女を救う救世主が現れる。

凛が持つてた剣で、“それ”に応戦したのだ。

それは、抜きっぱなしの血が滴る剣を、縦に構えながら“それ”に駆け足で近づき、その勢いで一気に下へと剣を下げる。この攻撃には、流石の“それ”もシャロンの剣を口から外し、避けた。

「『燃える』」

この時、シャロンが苦戦しているときに、詠唱したルカがさらなる追撃を“それ”にした。

「『その煙は断罪の証、その煙は業火の証』」

先ほどよつ、丁寧に、もつともつと早く詠唱する。

「『そしてその煙は我が生きてる証と成れ』」

先程、三匹の群狼ローウルフを殺した魔法。

魔法属性、火　　『フレアボール多連火球』

これによつて、またもや発現した数個の火の玉。これらは木々の間をすり抜けるようにして、“それ”を的確なまでに向かう。

一つ二つ、とまずは外れた。

三つ四つ、と今度も“それ”が躲かわしたせいで、またもや外れる。だが、今度は違う。

残りの三つは全弾“それ”に当たつた。

「やつた……？」

火球が、ボンッと“それ”に当たった弊害によって起きた灰色の煙。それにより、四人の視界から“それ”が消える。

やがて、煙が晴れると、ルカの感激の声が、嘘に思えたような“それ”だった。

火球が当たった腹と右肩と左足だけ、燃えたことにより毛が無くなり少し凹んだだけで、下に見えるこれまた黒い皮膚には傷一つない。

ゴアアアアア
！――――！

さらにルカに危険が迫る。

彼の魔法は、“それ”にダメージを与えることは叶わなかつた。だが、火球は“それ”に挑発へと思われた。

それからの“それ”的行動は早い。

吠えるという威嚇によつて、ルカの動きを止め、周りの木々を倒しながら一直線に彼へと走り出した。

今度の攻撃方法は爪。

近づいた状態で、片方の腕を高く上げた。

(えつ……！？)

その時、疑問しか出ないルカだつた。

自分より少し高いところにある鋭い爪を見て、走馬灯のように様々な考えが頭を巡る。

詠唱の時間はない。避ける暇もない。持つている杖ではこの攻撃は防げない。

結論としては、八方手詰まりだ。

(死にたく……ありません……！……)

今はこう思う。

ルカはまだやり残した事がある。
その為に死ぬわけにはいけない。

だが、世界は無情だ。

ただ、世界は淡々と廻り、どれだけ急でも、どれだけ突然でも、
力が無い者はどれだけ願つても負ける運命にある。
死にたくない。

そう最後に思ったルカは、やがて眼を閉じた。

力キンッ！

しかし、神は彼を見捨てていなかつた。

シャロンが、その爪を、白銀の剣で防いだのだ。
エンチャントマジック
魔力付加を全身に施したその身体で。

「今ですっ……！」

「……有難う御座います！」

ルカはシャロンの言葉によつて、一気に目を開き、“それ”との
距離を一気にとる。

お礼を言われたシャロンは、“それ”的注意がルカに向いてる間
のほんの一瞬の間だけ、緊張を解いて魔力付加の詠唱を唱えていた。
だから、この危機的状況で、高速に動ける。
だが、この状況でも“それ”には力負けしていた。

このまま“それ”的圧力にシャロンが耐えている時、凛は信じら

れないものを見ていた。

(露つ！！)

彼が、露が、背中を見せて、この場から逃げていたのだ。だが、それを止めるほど、距離は近くはなく、こつちはこつちで、再度シャロンが“それ”と競り合っている。

(クソッ！！)

凛は、逃げる露と未だ硬直状態のシャロンを天秤にかけ、そして、シャロンを取つた。

彼女は、刹那の戸惑いの後、“それ”的顔面を狙い剣で突いた。これによつて、シャロンはまた助かる。

そして、息を切らした三人と静かに唸る“それ”という場面が出来上がつた。

この時、凛は一瞬先程まで露が逃げていた場所を見るが、そこに人影は無かつたのである。

「はあはあ……」

一方、露。

彼は“それ”ガル力に狙いを定めると同時に、全速力で逃げていった。

緊迫した状態では、その者の本来の姿が垣間見えるといつ。この現在逃げている姿が、悲しくも彼の本質なのだろう。そして、やがて彼は、深い森へと消えていくのだった。

第三十話 魔獣？

(あれ、アラワさんはどうなっていますの？)

三人と“それ”的硬直状態の中、周りを見回したシャロンが凛とルカに小さな声で聞いた。

“それ”が動かない理由は色々あるだろ。疲労、怪我の治療、はたまた気まぐれか、そこまではシャロンも分からぬ。だが、“それ”が動かないのだ。ならば、この状況を利用して、戦力の確認を彼女はしていた。

(口に出すのも恥々しいが、あいつは……逃げた……)

凛が答えた。

本当はこんな事口にしたくない。

この苦しい場面で仲間を捨てる露など、裏切る者と同じだからだ。

(やうですか)

こんな凛に対し、シャロンは淡々と頷く。
なかば予想していたことである。

凛やルカとは違い、露の実力は雀の涙ほどにも等しい露。
そんな彼では、おそらく戦う術すべを持たない一般人と一緒に。
そして一般人が強敵とあつたら逃げるのは当然だからである。

(それでどうします？ “あれ”に僕の魔法は通じてませんよ)

「」でルカが話題を変えた。

(ええ、そうですね。それだけではありません。私の剣はおろか、リンさんの剣も“あれ”に損傷は『えられませんでした）

凛もこのシヤロンの意見に首を縦に振った。

何故なら、斬つた手応えが無かつたからである。

むしろあれは、鎧に当たつてはじかれたようだった。

（ 聞くが、ここで逃げるという選択肢は無いのだな? ）

凛がここで口角を上げて言った。

逃げた露とは違つての一人だが、再確認のためである。

（ええ）

（はい）

また、凛は口角を上げる。

それほどまでに今の感情は高揚感に占められていた。

この世界に来る前とは違い一歩置いた距離ではなく、ほぼ対等な立場での共闘。

それがとてもなく嬉しい。

もちろんまだ地球上に、我が故郷に、帰りたいといつ感情はあるが、この点だけ見ればこの世界もいいと感じる。

（つむ、だつたら、びつぱつして、 勝つへ）

だが、これが最大の悩み。

剣も、魔法も通じないだらつ“それ”に勝つ手段は無いに等しい。

（一応あるにはあるんで……）

ここで苦肉の策をシャロンは発言しようとしたが、

「ゴアアアアアア
…………！」

“それ”に無残にも止められた。
と、同時に“それ”が動き出し、狙いを定めたはルカ。
勢いよく突進して、彼に噛み付こうとするが、シャロンが止める。

「生物本来の弱点を狙つてくださいませ…… 目や口内です！……
！」

“それ”的猛攻に耐えているシャロンが大声で叫んだ。
いくら“それ”が龍のような耐久性でも、そこだけは弱みだと考
えたからだ。

「はっ……」

ここで凛が“それ”的目に、剣を刺そうとした。
しかし、“それ”は凛の攻撃に気がつき、シャロンから瞬時に離
れて躲した。
かわ

巨漢とは思えぬほどの速さ。

それに対峙していた三人は驚いたものも、次の災難が彼らを襲う。

「ゴアアアアア
…………！」

叫んだ“それ”的攻撃方法が、全然変わったからだ。
これまでの“それ”は、噛み付きか引きかきという四足からの非
常に原始的な技。
だが、今度は違う。

最初、三人と邂逅した時のように、一足歩行へと戻り、両腕を大きく振り回したのだ。

その攻撃は凄まじく荒く、大胆。

木を何本も倒しながら、シャロン等へ向かう。

「えつ！…」

その驚愕は誰かは分からず、木が発するミシッミシッという音に、搔き消された。

“それ”はまだ突き進む。

一振り、一振りと、腕を振るう度、障害物の筈の太い木が、遠心力と鋭利な武器によつて次々と破壊される。その姿はまさに暴君だった。

森の王者とも言える。

絶対的に、ピラミッドの頂点に立つ生物。

それが今、“それ”的姿だった。

そして、それが三人の恐怖を、さらに誘う。

「リンさん、剣を構えて！ ルカさんは魔法をお願いします！」

これまでの幾つかの恐怖を退けてきたシャロンは、“それ”的圧力にも屈さなかつた。

しかし、新人一人は屈した。

ルカは始めて見る自分より上位の存在に対して屈し、凛は魔獣のモンスター怖さに屈した。

そんな二人が想像したのは、自分が血まみれに無残にもハつ裂きにされる姿だ。
（イメージ）

これは残念ながら、すぐに取り消せるものではなかつた。
長い年月と、積み上げた鍛錬によつて、初めて消せる想像。（イメージ）

「『奔れ』」

シャロンもその経験がある。

なので、一人を責めることはできず、“それ”に立ち向かう。だが、同時にこの運命を呪つた。

初めての仕事で、こんな強敵に会ひ自分達の運命を……。

「『もつと卑く、もつと速く』」

だから、今自分にかけている魔力付加^{エンドチャントマジック}を、もつと強固なものにするため、詠唱を追加し、“それ”に勝つ想像^{イメージ}をもつと強くする。

「『雷^{いかすち}のようひ』」

これまでとは違い、徐々に腕を振るいながら近づく“それ”的圧力に、負けぬよう続けた。

「『我が肉体よ、稻妻^{いなづま}と成れ』」

詠唱が終わると、シャロンの身体が、光を伴つようになる。そしてピシッピシッ、と彼女の身体から溢れ出した電気が静電気のようになびき出しつた。

ビシッピシッ……！……！……！

そして、シャロンが走り出すと共に、音は徐々に大きくなる。やがて、その音は静電気から雷鳴のようにに変わった。

そのまま、剣を両手で、横に寝かせるようにして、“それ”に突く体制のままである。

ドガアアアアン！――――――！

シャロンと“それ”がぶつかるのに、然程の時間は必要なかつた。

バサツ！

大量の砂埃が晴れ、そこに立っていたのは、それ”で、地面に倒れたのがシャロン。

ただ優雅に、ただあつさりと、腕を振り回すのを止めて、その場に立っていた“それ”にルカは恐怖さえ感じる。

だから、体が震えた。

ルカはシャロンの強さを知っていたのだ。あの年にして剣と魔法の腕は王都で噂されるほどの腕前。貴族としては珍しく、騎士試験で騎士へと成った。だが、騎士試験ではなくほかの方法で騎士になつたら良かつたのにと、どんな人も彼女を勿体ないと評価するほど の強さであった。

だから、体が震えた。

最後に、あの王者のような風格を思い出した。そして、あれから連想した自分がハつ裂きにされる想像^{イメージ}が拭えない。

だから、体の震えが一向に止まらない。

「……！」

言葉にもならない恐怖。

それはシャロンを助けることなど忘れ、先ほど“それ”に殺されそうな事態が自分に訪れた事すら凌駕して、頭を怖さという一色で塗りつぶされる。

深呼吸しても、目を瞑つても、他の事を考えても、思い出すは“

それ”への恐怖。

逃げ出したかった。

投げ出したかった。

だが、そんな祈りが通じる暇もなく、“それ”が辛うじて生きているシャロンから目を逸らし、ルカへと向けられる。

また、震える。

魔術を放とうとも、口がうまく開かない。動け、動け、と脳から指令を出すが、それも恐怖には勝てない。

「そこ」の獸風情が、調子に乗るな……！――

故に、先ほどまで一緒に震えていた凛の、隣で英姿颯爽と武器を構える姿が、理解できなかつた。

同じように震えていたときは、同じ人種だと思った。才能があり、これまでつましい事などないような自分達。先に壁はなく、あるのは段差だけだと思っていた人生。ルカはそんな風に、自分の代わりに“それ”の視線を受ける凛を自分と同一視していた。

（……まさに……英雄ですね……）

でも、違つた。

ルカは彼女を勇気を持ち、高い壁に立ち向かう英雄だと思つたのだ。

（なら、僕も……）

そして、彼は、そんな凛に影響されてか、自分自身も立ち上がつた。

すると、立ち上がった自分の震えは既に消えていた。なるほど、これが歴代の英雄たちの力なのだと思う。そしてこれも彼女の魅力なのだと……。

そんな凛が、立ち上がった理由は簡単だ。

赦せない。

ただ、この一点につきる。

彼女は露の時よりも、烈火のごとく怒った。

虫の息のシャロンが足元にいる“それ”に、その激流のような感情をぶつける為、恐怖なんか忘れて、挑戦状を叩きつけたのだ。もちろんそんな挑発は、人間の言葉がわからない“それ”には理解できない。

「ふん、来ないのなら、こちから行くぞ……」

だが、関係ない。

凛は剣が効かないと分かっていても、“それ”との距離をつめ、肩へと剣で斜めに切りかかる。

しかし、この程度では“それ”はびくともしない。

すると、すぐさま、反撃されぬよう後ろに回り、背中にかけて一撃。

しかし、これも当然はじかれる。

「『燃える』

その煙は断罪の証、その煙は業火の証

そしてその煙は我が生きてる証と成れ』

そして、凛の剣がはじかれてる間に、ルカが多連火球を撃つ。だが、“それ”が避けたせいで掠る程度に終わった。

「はあっ！！」

凛はそんな“それ”に追撃をした。
どれもが重い一発を、次々に繰り出したのだ。

横に、縦に、斜めに、幾度となく“それ”的後ろから剣を振るう。
無駄だと分かつていても、体が休みたいと言つても、無呼吸の連打を繰り出した。

ゴアアアアア
…………

しかし、“それ”にとつて、邪魔な凛は、太い腕で飛ばされ木に叩き付けられる

「！」の程度で……！　「！」の程度で……！　……

だが、凛はすぐに立ち上がり、また一步“それ”に踏み込む。
もう、彼女の頭には怒りによつてアドレナリンが大量に分泌しており、痛みや疲れなどどうの昔に超えていた。

凛の猛攻と、それに加勢する様なルカの火の玉による狙撃。

そんな二つの攻撃により、徐々に、徐々に、“それ”は後ずさる。“それ”的体の所々が焦げて行き、凛の斬撃によつてこれまで全く傷つかなかつた“それ”的右肩から少しだけ血の出たころ、“それ”がやつとシャロンから離れた。

「ルカッ！！　今のうちにシャロン隊長を……！」

「ええっ！！　凛さんはそちらをお願いしますっ！　すぐに戻りま

すので……」

二人の意見は、すぐに同意した。

凛が“それ”を止めている隙に、ルカがシャロンをおぶつて

“それ”から遠ざけたのだ。

シャロンは“それ”との衝撃で、現在氣を失っている。

ルカは、そんなシャロンを労る様に、優しく遠くの木に背中を預けるような形にした。

「…………？」

実はルカが凛の元へ戻ろうとした少し前に、シャロンは眠りから覚めた。

だが、今の状況の把握に徹したシャロンは、ルカの存在に気づかず彼を引き止められなかつたのだ。

「あれ……私はどうしてこんな所に……？　そしてここはどこですか？」

ついちよつと前まで、“それ”と戦っていて、自分の最高の技で、“それ”とぶつかつた。

そこまでは覚えている。

だが、そこから先が思い出せない。

それも当然だ。

彼女はそこで氣を失つたのだから。

「“あれ”は夢だったのかしら？」

わけが分からぬ彼女は、先ほどまでの急な悪夢を幻想だと
思い始めた。

群狼はまだ見つからず、静かなこの森で、そのまま寝てしまったのだと。
しかし、それもすぐ覆る。

ゴアアアアア
…………

“それ”の声が遠くから聞こえたのだ。
これにより、今までのは現実だったと瞬時に分かる。
そして、彼女は自分はあの激突によつて意識を失い、新人一人によつて助け出されたと瞬時に導き出した。

「だったら私も急がなければ……」

シャロンはそう思いながら、一人に駆けつける為、両足に力を混め、急いで立つた。

この時、胸に激痛が走った。
おそらくあの衝撃により、肋骨が何本か折れているのだろう。
だが、痛んでる暇などない。

深呼吸をして、体に空気を沢山入れる。

「あつ……！」

彼女の脳に、酸素が回り、頭が活性化すると、“ある事実”を思い出したのだ。

シャロンが気づいたのは、“それ”について。
あの熊のような魔獣モンスターの生態や名前が脳裏に蘇つたのだ。

「だとしたら、余計に急がなければいけないですわー！」

次の瞬間、半分以下となつた自分の魔力マナを絞り、「『奔れ』」と

一言だけ呟いて、氣絶によつて解かれた魔力付加エンチャントマジックを再度かけた、そ

の場から居なくなつた。

シャロンは消える前、“それ”の名を、暴君の名を、静かに言つていた。

テュラン、と。

第二十一話 魔獣？（前書き）

昨日は更新できなくてすこませんでした。
今度は土曜日に更新できると思います。

第三十一話 魔獣？

シャロンは全速力で森の中を疾走しながら、思い出したことをゆっくりと整理していた。

(なんて不味いんですねの！－！)

テュラン。

あの魔獣の正体に気づいたからである。

今思えば、群狼ローウルフがこんな人里に下りてきている時点で、より強大な敵を想定してない事がそもそも間違った。

群狼ローウルフが人里に来た理由で最も多いのが、元来住んでいた森を、より強者に奪われたという理由だ。また、それに気まぐれなどという理由は少なく、彼らが生息地を手放すこと自体稀だ。それに、ギルドに加盟している人間は、薬に使えるシャロンは全速力で、声の主を追いかける。

ゴアアアアア

！－！－！

と、ここでまた鳴つた。

まるで、一定の時間の感覚を告げる時計塔のよつこ。

「リンさん、ただいま戻りました！」

一方、こちらは戦場となっていた。

ル力がここを立ち去る前とは、ぜんぜん風景が変わっているのだ。前より大量の木々が地面上に倒れ、地面のあちこちは深くえぐれている。

(僕がいない間に、何を起こしたんですか！？)

そして、凛の体には細かい傷が増え、ほんの少しだが“それ”的傷は増えている。

「はあああっ！……！」

凛はルカの声が聞こえてないほど集中しており、また距離をつめ“それ”に斬りかかる。

“それ”もルカなど視界に入らず、右の腕で彼女の攻撃を防ぎ、左の腕を振り落とした。

「えっ！？」

ここでやられる、とルカは思った。

剣を払いのけられ、隙ができた凛に、“それ”的猛攻を防ぐ手立てはない。

だが、彼女は、体を無理に動かして、右腕を剣で、往なす。まさに、一瞬の攻防だった。

それほど、今の二人の力は拮抗している。

だが、それ故に、凛が不利。

圧倒的な防御力を持つ“それ”は凛の攻撃は通じないが、“それ”的攻めはあたれば凛に通じる。

このまま行くと、凛の死は明らかだった。

(探し！　探し！)

だから、凛は“それ”的弱点を探す。

これまで通じなかつた斬撃が、少しだが攻撃は通じたのだ。ならば、そこには何らかの共通点があると思う。

しかし、戦闘を行いながら同時に思考を使うのは至難の業。戦闘に赴きを置けば思考が回らず、思考に赴きを置けば戦闘に支障が出る。

こんなぎりぎりの事を彼女はやつていた。

「『燃える

その煙は断罪の証、その煙は業火の証
そしてその煙は我が生きてる証と成れ』」

そして、そんな悩みがあつた凛に、やつくり考えるチャンスが回ってきた。

ルカの魔術が“それ”に当たつたのだ。

凛はこの火の玉によつて、やつとルカが戻つてきた事に気がつく。

「ルカ、少しでいい！時間稼ぎを頼むーー！」

だから、彼に囮を任せした。

「ええ、でも、数十秒しか持ちませんよ？」

「つむ、それでいい。頼んだぞー！」

言葉を交わす暇さえ勿体ない凛は後退して、すぐに思考を再開した。

“それ”に出鱈目に撃つた自分の剣は通じる。

だが、その場所はどれもがばらばらで、一定の規則性はない。

唯一あつたのは、ルカの火の玉があたつた場所だけだ。

しかし、もし仮に、火が“それ”的弱点だとすると、火が“それ”に通じる素振りはないし、剣が通じたとしても掠り傷程度。ジリ貧にもほどがある。

やはり、一か八かで、目か口内を狙うしかないと、凛は思った。

「うむ、もういいぞ！ ルカ、一緒に隙を作つて口か目を狙うぞ！」

「わかりました！！」

ルカはこれまで、多連火球フレアボールを一気にぶつけるのではなく、一発ずつ時間を空けて放つことにより、時間を稼いでいた。

やがて、二人が一旦距離をとる。

「行くぞ！！」

「はい！！」

そして、二人で一斉に仕掛けようとすると、ここで一人の足を止める人物の声がした。

「お待ちなさい！！」

シャロンだ。

剣は地面に落ちたままで何も持つてない。

だが、気を失っていた彼女が動けたことに一人は驚嘆し、ルカだけが次のシャロンの言葉に驚いた。

「その魔獸モンスターは、危険度の高いテュランです！ 今すぐ踵を返して、すぐに逃げなさい！！」

ルカは師がこれを斃した事もあって、テュランを知っていた。その危険度は魔獸モンスターの中でも上位に位置し、その最大の特徴は討伐数の少なさである。それには生態数が少ないのも理由に上げられるが、一番はそのどんな攻撃も通じない防御力。弱点などなく、討伐のすべてが龍をも斃す圧倒的な力によるものだ。

だが、それ以外の厄介度は中篇的で、遠距離攻撃も持たないし、群れもしない。身体も魔獸モンスターから考えれば、より大きいものなどいくらでも存在する。

つまり、防御力だけで、魔獸モンスターの上位に存在するのだ

「それなら……」

「ここで、ルカの意思が揺らいだ。
逃げなければいけない、と。

「もう、しかし、こいつをここに放置していると、あの村人に迷惑がかかるぞ……」

だが、テュランの危険度を知らない凜の言葉で、それを踏みとどまつた。

「僕も残ります！！ 一人だけ残していくわけには行きません！！」

これにシャロンは思わず舌打ちをした。

確かに凜の意見は正論だ。

テュランをこのままにしておけば、いつか村までやつてきて村人に危害を与えるだろう。

「でも、それを、どうやって私達が討伐しますの？ 生半可な攻撃ならそいつには通じません！！ このまま残つても無駄死にだけです！！ 他の者に頼んだらいではありますか？」

だが、それを討伐するのは、自分たちでなくともいい。急いで王都に帰り、誰か討伐できる者に頼めばいいのではないか、とシャロンは思ったのだ。

ところで、テュランは荒い息を吐きながら立ち止まっていた。丁度いい時に、疲労を回復しているのだ。

「し、しかしだな！ その頼んでる間に村が壊滅する恐れがある！ それを食い止めるのが、私達騎士ではないのか？」

シャロンの意見も正論で、凜の意見も正論だ。

このまま、一人の正義が平行線のままぶつかり合つかに思えた。

ゴアアアアア
！！！！！

だが、ここで体力回復に徹していたテュランが動き出したのだ。

「シャロン隊長、逃げたければ逃げてくれ！ 私は自分の正義に従うー！」

「僕もリンさんの正義に従いますー！」

「隊長の命に一人とも従いなさい！ どうなつても知りませんわよ

「――」

「うむ、シャロン隊長は責任を感じなくていい――！――これは私の“独断”だ！！」

襲い掛かるテュラン。

それに勝つき満々の凛とそれに従うルカ。

そして、二人に逃げを一心に願うシャロン。

そんな、それぞれの思惑が交差する時の事だった。

ピカ――――ン――！――！――

「伊吹、その通りだ――」

閃光が森を包み、少し離れた末だ立つ一本の木の上から、“四人目”が現れたのだ。

「――だが、無駄に死ぬのは勿体なく思わないか？」

それは、常に、何を考えているのか分からぬ露だった。

第三十二話 魔獣？

それは突然だった。

三人がテュランから田を離している隙に黄色の丸い玉は投げられ、
テュランは目をやられうずくまっているのは。
それは急だつた。

ほかの三人の視線が彼へと突き刺さっているのは。

「あ、あ、露が、どうしてここにいる？」

そんな事態を飲み込めてない三人の中で、言葉を発せたのは凛。

「そんな事どうだっていいだろ？ それより大切なのはそのテュランの事じゃないのか？」

「た、確かにそうだが……」

だが、露は凛の質問に答えない。

未だ彼が登場した動搖の消えない凛は、つい数秒前の勢いを無くしていた。

あの時の自分はなんでも出来ると、どんな不可能だつて可能に変えてみせると、そう心に思っていたのに、彼が現れた途端に悪い意味でしらけてしまったのだ。

「ルカ、大丈夫か？ 表情が複雑になつてるぞ？」

「くつ……」

ルカもルカで凛が冷めてしまったのを分かつてしまつたので、ど

んな判断を下せばいいか迷つていて。

それが顕著なほど顔に出ていたので、よりもよつて露に指摘されたのだ。

「あ、貴方は今まで何をしていましたの……」「こんな状況”で出でくるなんてどうかしていますっ……」

「どうかしてこるのはお前だ。こんな状況で仲間を見捨てるなんて、隊長失格だぜっ！」

最後にシャロン。

彼女も露に事情の説明を追求するが、ひらりとかわされた。

「……もつと早く逃げた貴方には言われたくありませんわ……」

シャロンは自分は悪くないはずなのに、悪いようだと思つてきた。だからか彼女は唇を少し噛みながら下を向いている。

しかし、露はそんな彼女など気にせず話を続けた。

テュランの視力がいつ回復するか分からぬ今、ゆっくりとしている余裕などないのだ。

「さて、お前らは勘違ひしているが、ここで逃げるのも、一か八かで立ち向かうのも、どれもこれも正しくねえ」

そして、今、彼は三人の思いを全て否定した。

村人の為、命を懸けてテュランを食い止めようとした凜も、凜に従うと思つたルカも、勝つ算段が無い状況では逃げるのもまた正義だと思つたシャロンも、全てを根本から認めなかつた。

「 勝つのが正しい答えなんだよ」

そう、これが彼の答え。

例えば、凛やルカの判断でテュランに殺された場合、言い方は悪いが無駄な犠牲だと露は思う。

例えば、シャロンの判断で呼んだ増援が駆けつける前にテュランが村を壊滅させた場合、一生彼女の胸には深い傷が出来るだろう。ならば、勝つしかない。

圧倒的に、犠牲も無く、理想論でしか語れないような幸せな結末を訪れさすには、どんな方法を用いても仕方が無いのだ。

「いいか？ この団体だけの馬鹿を殺すことは簡単だ。その為の観察も、その為の状況も、しつかり整っている。後はお前たち次第だ。一人も欠けると勝つのは……無理だな」

露はこの目的があつたから、ここから一旦逃げ出した。
自分がいても盾にもならない事がよく分かつていたので、凛とシヤロンとルカとそれにテュランの目を自分に向けない状態を作り出しす為に逃げる。

そして、安全だと思った木の上で身を動かさず、テュランの観察だけを徹底的に始め、先程やつと“勝つ方法”を思いついたのだ。

「 私は乗るぞ。露に不可能は……無いからな

最初にその提案に乗つたのは凛である。

彼女はふと、あの部屋での呼び出された直後の、彼の行動を思い出したのである。

あの時もこんな自信満々な顔をしていた。

勝率がいくつあるか分からない。

だが、なんだか安心できたのである。

「 では、僕も乗りましょう。もとより、その覚悟ですか？」

ルカは凛と生死を共にする覚悟を、既に昔にしている。
その魅力が彼女にはある。

露に従う彼女を見るのは少し不満があつたが、そんな意地を英雄
たる彼女の為に捨てた。

「お前も逃げないよな？」

「 」で、露が良いタイミングで、シャロンを挑発した。

「 ええ、もう、どうなつても知りませんからね？ 必ず勝たな
いと、一生恨みますわよ～」

「 安心しろ。俺は“正直者”だから、な」

最後に、シャロンも場の空気に、露が作ったこの空気に、流され
た。

死ぬか逃げるかという選択肢ではなく、露が現れた事により劇的
に作られた“勝てる”という明確な確証も無い第三の選択肢。

不思議であった。

成功しないと思うのに、まだ策の内容を全く聞いてないのに、必
ず彼はテュランに勝つだろうと何故だかそう思えたのだ。

「アアアアアア

！――――――

やつと、この勝負の第一幕を、テュラン自身が開いた。それの日は回復し、これまで以上に頭に血が上り、一層凶暴となっていた。

「まずは凛とシャロンの一人でそいつを足止めしろ」

この露の指示により、二人は一回得物を構える。シャロンは上段に、凛は深く下段にしっかりと武器を持ちながら、二人とも一気に跳躍した。

「ルカは詠唱だけして、しかと待て」

ルカはその命令どおり、詠唱だけをして今いる所から一歩離れた場所で待機する。

(さて、騙そつか)

露は思う。

勝つのが一番正しいだろうが、それが最も難しいと。

露は考える。

騙す相手は決まっており、そこまでが正念場だと。

力キン！

そして、そんな思考を書き消すが如く、シャロンの払いがまざテュランに当たった。

第三十四話 魔獣？（前書き）

先週の日曜日は更新できなくてすこませんでした。
明日せぬやうへ更新できると想います。

第三十四話 魔獣？

凛の初撃から一分。

時は殆ど過ぎていなが、凛とシャロンには永すぎる時間が経っていた。

どんな手も、その大部分が弾かれ、このままだと消耗した体力の差でいつかテュランに食い千切られる。

「まだか！？」

「まだですの！？」

そんな嘆きが口から出てしまうほど、二人は焦っていた。
だが、露はまだ何も指示を出さず、木から下り、ルカの横にいる。
そして耳元で露が少し囁いた後、ルカが戸惑いながらも創めた。

「……離れて……ください！！」

二人がテュランから一歩引いたのと同時に、宙に待機していた多^フ連火球^{レアボール}が、舞つた。

上。 下。 右。 左。

斜め。

直進など、幾つもの火球は多方向から、テュランを狙つた
だが、テュランはこれまでとは大きく違うほどの俊敏な動きで、
その全てを避けた。

そして火球は木にあたつた。テュランが倒した木々の上にルカが

倒した木が、ドスンといつ音と共に倒れる。

「外した、ですって！」

シャロンが叫んだ。

彼女はこの火球を、当てる、と思っていたのだ。

しかし、違う。

露はもとより、“作戦”を知っていたルカと、彼はまともな策など考えつかないと思つていてる凜は、これを嘘^{ブランフ}だと分かつていた。

「あの木々の上に来い」

既に、円く倒れた木々の上にいる露は、大声を出し、懐に隠していた“赤色の玉”を下へと投げた。

ルカももう、テュランの数メートル先にあるその円にいる。

「つむつ……」

凜とシャロンもその声で、テュランの目を盗みながら走る。

「お前は急に止まれないだろ？..?」

森の中にぽつんと、木々で作られたサークルの真ん中に佇む四人。

バチッバチッ！

テュランは怪しげな音が発生する、そこへと向かっていた。

バチツバチツ！

それは、彼が先ほど投げた赤い玉から発生した“炎”だった。その“炎”は小さいが、一本の小枝に着火した。

数メートル、この距離は短いようで長い。

テュランはその“炎”が見えていただろが、走り出した時はそれ程大きくなかったので、氣にも止めなかつたのだろう。だが、“炎”は徐々に、そして急速に、大きくなつた。

この山に吹いているから風のおかげでもあつただろ。秋のようない季節のおかげでもあつただろ。たまたま倒された木々が綺麗に円形に重なつておるおかげもあつただろ。

バチツバチツ！

そんな様々な要因が奇跡的にも重なつた結果、“炎”は勢いをどんどんと増した。

ここまで速さだとは、露も誰も思つてはいない。

逃げる、と誰かが言う前に、四人ともその危険性からテュランとは逆の方向へ逃げていた。

ゴアアアアア

！－！－！－！

それは、遠吠えではなく、悲鳴のよつに耳に残る。

テュランは突進した結果止まれず、大きくなつた“炎”に突っ込んだのだった。

雄たけびを上げながら“炎”に包まれたテュラン。

「終わった……」

「終わりました……」

「やつと、終わりましたの……」

この姿を見て、誰もがこれで終わりだと思った。これまでに色々な困難があった、と三人は思う。意識を失つたり、仲間割れをしそうになつたり、そして誰か一人は本当に逃げた。

本当に沢山の出来事があった。
だが、意外と終わりは呆気ないものであつた。

「将来、これを語れる日が来るといいですね……」

だからか、茶髪の魔術師が、地面に腰をつけ、言った。

「ええ、今となつてはいい思い出、そう笑つて言いたいものですね……」

疲れきつた顔で薄く汚れた金色の髪の魔法剣士もそう言った。

「その前に露に怒鳴りたいものだがな……」

精根尽きたような黒髪の剣士も言った。

この“炎”は、最後のルカの魔術によつてある程度の距離が作られてるので山火事の恐れもない。

故か、三人は“炎”を見ながら座っている。

「何、勝手に終わってるんだよ？まだぞ」

しかし、露は、彼だけは、座つておらず、目の前をしっかりと見据える。

「ふん、何を言つている。もう終わったのだと？」

「ええ、その通りですわ

「じゃあ、あれはなんだ？」

“炎”の中から、黒い影がむくり、と起き上がった。
その胴体は先ほど戦っていたテュランと、瓜二つである。
いや、テュランではないと、瓜二つだとそう思いたかったのだ。
そのあまりの光景に、露以外の三人は、白く顔が染まっている。

「どうして……生きてる？」

そして、凜が声を出した。

「簡単な話だ。“火”はあいつの弱点じゃない。もし、“火”があいつの弱点ならあいつは“火”を怖がったり、少し見るだけで遠のくはずだ」

露がゆっくりと説明し始めた。

そう自分の弱点は、どんな生物であれ、どんな人種であれ、恐れるはずだ。怖がるはずだ。

それが本能というものだ。

だが、テュランは“炎”に恐怖という感情はなかった。

「思い返せば、僕の魔法もそんなダメージにはなってなかつたです……」

「どういづ？」

露は冷や汗が流れるル力に、ニヤリと頷いている。
しかし笑っているのは彼一人。

他の三人の表情は真逆だ。

「露、一体どういうことだ！　あれであいつが斃せるんじゃないのか？　もしかして私達を騙したのか！！」

「そうですわ！　弱点がないなら、斃す方法が無いのなら、最初からこんな無謀なこと言わなければ良かつたでしょう？　そうすればこんなことにはならず、私達は逃げて……生き延びましたのに……！」

彼の胸倉を凜が掴み上げる。

彼女は、疲労感と未来に待つてゐる絶望から、彼を責めた。

シャロンも凜に続いて彼を責める。

もう逃げる余裕など三人にはないのだ。

ルカは、半分意識がなくなっていた。

この間にもテュランはゆっくりと、こちらに歩み寄る。

もう時間は無い。

だが、戦う気力も彼女達には無い。

「へえー、ここで諦めるのか?」

しかし、彼だけは不気味に笑っていた。

「……つむ

「……ええ

そして、彼は、何の変哲も無いナイフをテュランに投げる。

「これでもか?」

ブシユツ!

そこには信じられない光景があつた。

ゴアアアアア

!!!!!!

これまで、数々の技でも大きな傷を負わなかつたテュランが、切れ味の悪いナイフで、簡単に鮮血をあげたのだ。

そのおかげか、テュランの動きも止まっている。

「し、信じ……信じられませんわ!？ こんなの……！？」

簡単なナイフで、テュランに大怪我を与える。

それは、これまでの数多くのテュランに挑んできた騎士達が、成し得なかつた光景だつた。

そして彼は言つた。

「あいつの毛は“火”に弱い。だが、あいつの皮膚は“火”に強い
」

凛の腕をどけ、虎視眈々とテュランを可哀想な目で見る。

「しかし、あいつの毛は斬撃に強く、あいつの皮膚は斬撃に弱いんだ」

それが彼の見つけた弱点とも言えない弱点だつた。

半分は勘でもあつた。

だが、これを思いついたのは、ルカの火球を受けた右肩から、凛の斬撃で血が出た事を不思議に思つたからだ。

そして、そこからゆっくりと頭を整理しだし、火球によって凹んだつまり毛が少々無くなつた箇所からは血が出やすいという事だつた。

けれどもこれだけでは、ナイフが軽く刺さつた理由にはならない。何故なら、凛の攻撃ではあまり大きな損傷にはならなかつたからである。

でも、これは彼がこう説明した。

「ルカの魔法では、火力が足りなかつたんだ。だから木で火力を上げた」

「どこまで合つてゐかは定かではない。
あくまでこれは彼の不確かな考え方だからである。

こうして、露の策ともいえない策により、テュランを退けた

あの激動の日から一一日。つまり、一人がこの世界にきてから九日が経っている。

ここはあの食堂。

そこに露と凜は見えず、シャロンとジャックが隅の席にいた。それは今日は前回とは違い、昼食の時間が少し過ぎた程の時間なので他の騎士たちもちらほらいたからだった。

「シャロン、これのビリまでが本当だ？」

そんな中、ジャックは目の前のシャロンを、怪訝そうに見ていて。それもそのはず。

彼も戦った経験はないが、噂だけは聞いていたテュランの強さ。それを“たかが”新人だけの小隊が討伐したのだ。誰でも嘘だと思うだろう。

「嘘だと仰るのなら、死体を確認してはどうですか？」

「ふう、そうじゃねえんだよ。俺はな、テュランを倒したことが問題だと言いたいんじゃないんだ」

シャロンはあの後、凜と一緒に死ぬ氣でテュランを倒した。

そして、その死体をあの村に住んでいた住民とともに、他の魔獣モンスターに食われないよう安全な場所へ運んだ。

だからジャックも先ほど向かわせた第六騎士団の一員から、彼らが斃した死体はテュランの死体とほぼ一致するという情報を得ている。

「では、何が問題なのですの？」

「はあ、まだ分からねえのか？ その斃し方が問題なんだよ。この新人、ありえねえぞ」

彼は先を考えて、大きな溜息を吐いた。

第六騎士団は貴族だけの別の騎士団と比べると、その殆どが平民なので下に見られやすい。なので、第六騎士団の大多数の人間は城へは入れず、国の重要な役職も片手ほどの人数しか就けないのだ。だから、こんな“報告”がジャックより上の人間に伝わると、悪い意味でシャロンの小隊は目立ち、彼女らは貴族出身の騎士に陰湿な嫌がらせを受けるだろうと思つている。

今までさえ、この小隊は同じ第六騎士団の連中からよく見られていない。

そうなると、この小隊はまともな仕事クエストをえ受けにくくなるだろ？ これに、また、ジャックは頭を抱えた。

「確かに、アラワさんはありえないですわね。あんな玩具おもちゃで、あんな奇策で、テュランを丸裸にするのですから……。私では思いつきもませんわ」

これに、また、ジャックは頭を抱えた。

何故なら、彼はシャロンの話など半分も聞いてはいなかつたからだ。

(今は異世界人の方が大切なに……)

そう、彼には本来ならこんな“些細な事件”より、“大きな事件”を考えなければ、準備をしなければならない。

「ちつ、仕方ねえ。上には正直に“誰も見つけられなかつた弱点”

を“あの新人が見つけた”と報告するか

全ての報告を総合して、ジャックは思つ。

テュランの皮膚は黒で、毛も黒だ。そんな毛が火で焼けたと確認するには、少し凹んだテュランの体表を、根気よく観察して粘り強く考えるしかない。

それをこんな若造が成すなんて、国の“上策士”ぐらゐの観察力がないと難しいだろう、と。

「ジャック団長、報告は以上でよろしくですわね？」

「ああ、帰れ帰れ……」

これでこの日のジャックとシャロンの会合は終わった。

そして、ジャックはシャロンからの報告を上に伝えるため、異世界人のことの綿密な会議を行うため、彼は王の間に向かったのだった。

「クススツ、遅かつたですね。もう他の皆さんは集まっていますよ

ジャックが王の間に訪れると、アンナが迎える。

「おいおい、久々だなあ

ジャックが「うづうづのも無理はなかつた。

王の間には、この部屋の入り口から王の御前にまである絨毯の脇を挟むように、六人の“騎士団長”とダーテインが片膝を地につけ

て集まつていたからだ。

「平民如きが我を待たすな！」

「そう言えども、また貴方の部下が問題を起こしたそつだな？」

いかにも騎士らしい厳格で派手な見た目だけの分厚い鎧を着けた第一騎士団団長のシェバが彼に、怒り白いマントにそのマントの間から見える両腰に相対的な剣を持つてゐる第五騎士団団長のナダンは彼を嘲笑した。

これにジャックは何の反応もせず、黙つて先人に習つように絨毯の脇に膝を落とす。

「ふん、言い返す事も出来……」

「よい、お前たちは少し黙れ。聞け、なぜ遅れた？」

このジャックの態度にナダンがまた、彼を悪く言おうとしたが、それを国王が止める。

「 部下の報告で、テュラン討伐の件を詳しく聞いておりました」

なにつ、などジャックの発言により、本題に入る前に場は荒れた。これを数十秒に渡つて国王とアンナは聞いていたが、すぐに王が制した。

「黙れっ！ ジャック、それは後に詳しく聞こう。それよりアンナ本題に入れ」

「クススツ、ええ、分かりました。今回の議題は皆さん人づてに聞

いていふと思ひますが、知つてのとおり“あの事”についてです

“あの事”これはこの場に居る全ての者が理解している。
まだ、名すら決められていない事件だが、異世界人に纏わること
である。

「でも、これまで通り相談する事など殆どありません。これは私はわたくし
よる独壇場ですから」

これに對して、この場に居る全員が文句一つ言わない。呑、言え
なかつた。

何故なら、騎士団に所屬する者は、全てアンナの部下だから。それはこの国が圧倒的な縦社会という理由にある。そこに全く下克上は存在しない。仮に、そんな革命など起こしたら……。さうと陽も浴びれぬような目に会うと彼らは知つている。

それにもし会議なら、ダー・ティン等の大臣もここに集まるだろ?。だが、ここには“騎士団長”しかいない。

しかし、これこそがアンナが独壇場と言つたことに繋がる。
そして、彼女が、たんに、この場に、彼らを集めたのは、体のいい駒が欲しいからであつた。

「でも、それだけじゃ、ここまでの人數を集めた理由にはならない
わよね?」

「」で富廷魔術師で、近頃正式に第三騎士団団長に就任したマナセが、ここで発言した。

以前の第三騎士団は彼女の母のネヘミアだ。しかし、ネヘミアは不運にも異世界人に殺された。故に、その繰り上がりとして最近ようやく手続きが終わり、マナセが就任したのだ。

「クススツ、ええ、その通りです。貴方方には、特に騎士団などの皆さんには、“勇者召喚”の準備と魔法によるこれまで以上の宣伝を行つて欲しいのです」

勇者召喚。

これには様々な順序と手立てが家柄等によつて、別々に分かれている。魔方陣一つにおいても一つの家系が独占などしていない。だから、誰か一人が他国に密告しても、この秘術を知られぬよう隠し通せているのだ。

そのため、全部の過程を知つてゐる者たちが集い、一齊に準備を機密に行わなければならぬ。

故に、さつきの発言は、勇者召喚の宣誓を、正式にアンナが発表した事になるのだ。

「だが、それっておかしくねえか？ 時期は決まつてゐるとしても、準備に必要なのはせいぜい一週間程度だらう。こんな早く皆に言つ必要あるのか？」

「ここで、疑問に思つたジャックが質問した。

「クススツ、ええ、ござりますよ。勇者召喚の公開はグラトウェル王国史上初めてですからね。通常とは違う仕込みが色々と入りますから、本音を言えばこれでも足りないぐらいです」

アンナが、扇子を仰ぎながら魔性のような微笑を見せた。
虚空を見るその瞳は、しっかりと未来を見つめている。

召喚の噂は広がつていなし、公開召喚の不安材料も多く残つている。

だが、彼女がこれまで圧倒的に勝つてきた他国との競り合により

も、この始めて行う策を楽しく感じていた。

策の規模が大きく違うからかもしれない。歴史初の出来事を自分が先頭となって行うからかもしれない。それとも、敵の異世界人が酷く狡賢いからかもしれない。

どれが本心かは全く見当もつかないし、そのどれもが彼女を燃やす材料だったのかも、だ。

「クススッ、では、今回はこれで以上です。以後は定期的にこのような会を開き、成果の発表を行いたいと思いますのでご協力をお願いしますね」

しかし、早くこれを実行して異世界人を捕まえたい気持ちを抑えて、まだ、まだ、と自分に言い聞かせるのだった。

じつして、今日の会は閉じた。

噂は既にダー・ティンの手によって、着々と流れている。

しかし、最初の会合から一週間もまだ経つておらず、噂は王都全域にも及ばない。

あくまで酒場で肴として語られる程度である。

けれども、意外と早く露と凜はこの噂を聞く羽目になる。今回のアンナの宣誓により、勇者召喚の意図的な情報封鎖が無くされたからで、一番ホットなニュースが飛び交う騎士団に彼らが所属していたからであった。

第三十六話 訓練（前書き）

すいません。

もう一つの作品に手を入れてしまい、更新が遅れてしまいました。
そのもう一つの作品の影響で、表現が少し変わりましたが、ご了承
いただけたと幸いです。

あれから二日。二人が異世界に来て二日。テュラン討伐の際の褒美の一つとして、四人は二日だけ休日を貰つていた。休みが明けた二日目の事だ。

「露、すぐ始めるぞ！」

凛の大声が、あの訓練場に響いた。四人とも数日振りに訓練場にいたのだ。

彼らの小隊がテュランを斃したという情報は、第六騎士団の面々の耳にも入つており、遠くからは陰口を言つていた。

露達に面と向かつて言わないのは、第六騎士団の連中もテュランの恐ろしさを知つているからだ。だから、仕返しをされないためにも表では悪口を言えないのだった。

「あー、まだ疲れが取れてないんだ。今度してくれ」

露の体自体は万全だったが、精神面は微妙だ。数日前の一人の鬼教官による訓練の日々が、脳裏に蘇り、心がそれを拒絶する。インドア派の露にとつて、あれは地獄だ。

そう、切実に思つていた。

「無理ですわ。だつて、群狼の一匹程度は斃せる実力がないと、戦力になりませんから」

だが、シャロンはそれを断つた。

露の実力は現在第六騎士団どころか、全騎士の中で最低だ。もしくは、そこらにいる傭兵にも数秒で負ける。

これは、由々しき事態だ。

グラトウェル王国の天下を誇る軍部が、たかがた群狼ローカルフ程度を斃せないとなると、一気に信用は地へと落ちる。

それだけはこの国の名誉のためにも、第六騎士団の名誉のためにも、何より、この小隊の名誉のためにも避けたかったのだ。

シャロンはその一方で、露を高く評価している。

自分に勝った時は勿論のこと、テュラン戦での観察眼もそうだ。“上策士”のような、策士としてなら大成するかも知れないと、心中では思っていたのだ。

「いいぜ。戦力にならなくても、俺は後ろで見てるだけの方が、楽だからな」

「アラワさん！」

「いいじゃねえか。俺がもともとやる気がないのは知ってるだろつ？」

シャロンは変わらない露に、大きく吠えた。

「あはは、やっぱり変わりませんね」

一方のルカはその様子を、分厚い本を読みながら苦笑いでちら見した。

彼は露に凛の事で複雑な感情を抱いているが、それを表には出さない。凛があれだけ信頼している露に、少し興味があつたからだ。

「露、訓練をしないと 怒るぞ？」

露は上手くシャロンは説得できても、凛は説得できていなかつた。背後には、鬼の形相をした彼女が立つてゐる。

「怒れるんなら怒つて……さあ、訓練しようぜ。やる気満々だ」

露は後ろを振り返つた。首元には剣があつた。凛はこいつと笑つていた。だが、目は笑つていない。黒く光るその瞳には、凄まじい威圧感があつた。

「うむ、私もいい返事が聞けて嬉しいぞ」

「ああ、そうかよ。そりやあよかつたな」

露はけつと、悪態づいた。

凛の目は本氣だと、あれは返事次第によつては斬ると、そう判断したからだ。

(おつそろしいな。あいつに何があつたんだよ?)

露はその一方で、ここ数日の凛の変わりように驚嘆していた。來た当初は脅すなんてしなかつた彼女が、今となつては平氣で脅す。しかもその手際がとてもいい。その原因が、自分自身だとは思つていなかつた。

「まずは素振りからですわ! 始めつー」

彼はシャロンの掛け声と共に、正眼に構え、剣を上から下へ振り始めた。

形としてはまだ不細工だ。

斬線は田茶苦茶で、体重移動もない。

「露、もつと体重を乗せろ！ 水が流れるように動かすのだ！」

「へいへい」

「むへ、もつとせぬ氣を出せー。」

そんな露に、すぐに凜の怒声が飛んだ。

最初に比べれば素振りもマシにはなったが、実践で使えるような代物ではない。

袈裟斬り。

逆袈裟。

撫で斬り。

幾つか習った振りを露は行うが、どれも初心者に毛が生えた程度だった。

「アラワさん！ 練習でそれですと、実践ではじつあるおつもりですかー？」

シャロンの大声も飛び。

上達が遅い露を、激励したのだ。

「はあ……」

その日の訓練が終わったのは、すっかり日が落ちた頃であった。

その晩。月夜の時だった。

露と凜は草木の寝静まつた頃、ロウソクをつけたベットしかない部屋に集まっている。そこはシャロンに用意された露の部屋だ。凜の部屋も別にあるが、今日は彼の部屋に集つことになったのだ。当然、シャロンはもう寝ている。

「露、“あれ”は聞いたのか？」

男女が夜中に密会と来れば大体は甘い空氣だが、ベットに座つて横になるこの二人に、そんな浮いた空氣はない。お互にがお互いに、恋愛感情を持つてないからだ。

どこまでも重く、陰鬱な雰囲気だった。

「ああ」

露は彼女の言葉に、短く答える。

あれとは、“勇者召喚”のことだ。

近い内、露と凜が呼び出された“勇者召喚”が再度行われる、という情報が他の騎士から耳に入ったのである。

それも、大衆に公開で行われる。これはこの国始まって以来の出来事だ。

勇者召喚。

これについては一人とも同じで、いい印象を持つていらない。今までの平凡な日常を壊されたからだ。

無理やり呼び出され露は殺されそうになり、凜は娼婦にならうとしていた。誰であろうと、憎しみを持つのは間違いないだろう。

「だったら、お前はどう動くのだ？」

「どう動くと思つ?」

「むへ、分からぬから聞いているのだ」

疑問に疑問で返した露に、凛はむすつとした。
露はそれにニヤツと笑つた。

「これまで言つてなかつたが、俺の目的は 帰ることだ」

彼は凛に投げかける。

露はまだ、元の世界に戻るのを諦めてはいない。いつか将来、“絶対”に自分の故郷へ帰ろうと思つている。

帰巣本能ゆえか、それともただ単純に日本を恋しく思つてゐるのかは分からぬ。

こんな世界でそれなりの地位を手に入れて、平穏に暮らすという選択肢も、露は考えたことがある。

だが、何となく會わないと悟つた。

全てを諦めるのなら、あの時ネヘミア等に殺されそうになつた時に、抵抗を止めていた筈だからだ。

露はそれを逆らい、今もこうして生き残つてゐる。ならば、最後まで、死ぬ一秒前まで自分に架せられた“宿命”に、抵抗しようと思つたのだ。

どこまでも 天邪鬼な露であつた。

「う、うむ。分かるぞ。私も同じ気持ちだ」

凛も露と理由は違うが、同じ気持ちだ。

できれば今すぐにでも、帰りたかった。

こんな血生臭い混沌に満ちた世界など、一秒でも居たくないからだ。それに彼女は純粋に、家族に、友に、その他大勢の人会いたいと思っている。

さうにこの世界に未練など、一つもないからだ。

「だったら、俺の行動も分かるよな？」

「ま、まさか……」

同様の思いだからこそ、同様の願いだからこそ、凛は露の考えに気がつく。

「 召喚陣を調べるのか？」

「（）答……だな」

あの幾何学模様が描かれた陣には、様々な情報が詰まっている。最近、ふとシャロンに投げかけた魔法談義によつて知つたことだ。

あの時、露達は自分達が召喚された陣を調べられなかつた。

誰かが駆けつけるのを考慮して、早々と立ち去つたのもそうだが、何より露の策により明かりがなかつたので、調べようにも調べられなかつたのだ。

「知らねえよ。だが、間違ひなく罷はあるだろ？」「い、いや、しかし、お前は今回の勇者召喚の全貌を知つているのか？」

勇者召喚の方法は、この国の禁書庫にも無く、各家柄によつて細

かく分かれていた。それらが一同に集う機会など、勇者召喚しかない。

そして、異世界からの召喚はこのグラトウェル王国しかなく、露が勇者召喚の情報を知りたければ、おそらくこれが最後のチャンスだ。

秘術の漏洩という危険は、グラトウェル王国自身も負っている。

「だったら、行かないほうがいいのではないか？ 眼なんだぞ。私達はこの国では、ある意味犯罪者だ。そんなリスクを冒さなくても……」

「嫌だね。それも国の上層部もそれが分かつてて、公開召喚なんかに踏み切つたんだろうが、 だったら受けてたってやる」

そう思えば、シャロンはこれを不可思議だと言っていた。
グラトウェル王国の秘術である勇者召喚を、わざわざ人前で行うのだ。特別な理由が無い限り、敬遠されるからだ。

「し、しかしだな、露。おそらく相手はこの国で最も頭のいい勝てるのか？」

相手は、こんな大がかりな策を国王に認めさせるような頭のいい人間だ。

並みの敵ではない。

難易度だけで云えば、別の意味でテュランを大きく超えるほど。

「ああ、 勝つさ。よつは騙し安いで勝てばいいんだろ？ 上等じゃねえか。俺とそいつ、どちらが上かの話だ」

この勝負。

武芸の巧みさでもなく、魔法の扱いでもなく、純粹で狡猾な頭脳戦である。

何故なら勝利の条件が、露が見つかるか見つからないだからだ。武力でどうこう出来る話ではない。

「本気なんだな？」

凛がぼそりと呟いた。

「本気や。だからって、心配すんなよ。俺が見つかっても、伊吹が異世界人だとは言わねえから」

「やつではない…… そうではないんだ……」

凛は一回大声を出してから、自己完結したように小さく呟つ。

「まつ、今日の話はこの辺でいいだろ。じゃ、お休み

「つむ……お休み

露は最後、強引に話を区切り、ロウソクを消す。

部屋を出て行つた凛に残つた後味は、なんとも悪いものであつた。

異世界の空氣に慣れ始めた十五日。

あれから、特に変わったことはない。ただ、一つ強いて挙げるなら、露に対する凛とシャロンの訓練が厳しかったことぐらいだろう。そして、今日も四人はいつもの訓練場に集まっていた。

「アラワさん、今日も素振りから始めますわよー。」

「えっ、ヤダ」

相変わらず地面に座り込んでやる気のない露に、シャロンはほとほと溜息をつく。

いつものことではあつたが、シャロンは全然やる気を出さない露に立腹した思いさえもある。そもそも、騎士に本腰を入れて頑張ってもらいたいのだ。

「露、訓練をしないと 怒るぞ?」

露の背後に凛は立ち、彼の前に剣を押し付けながらいつもと同じ脅し文句を吐く。

これで、露は簡単に折れるのだが

「嫌だね」

今日は、違つた。

今日は、首を振らなかつた。

今日は、腰を上げなかつた。

今日は、剣を抜かなかつた。

強い意志が移る双眸で、凛を見据え、れっきとした反対を述べる。

「……何故だ？」

凛は彼の目から視線を下に落とすと、静かに尋ねた。

「だつて、俺に剣は似合わないだろ？」

「……」

凛もシャロンも、何も言えない。

この数日の訓練で彼に剣士の才能が無いのは、剣を齧った者なら誰でも分かる。適当な体重移動、技の吸収率の悪さ、細い体躯。

「で、でも、努力すれば誰でも剣は似合うと思いますわ！」

強く、シャロンは彼へと訴える。

それでも天賦の才が無いだけで、露は努力すれば幾らでも伸びる存在だった。もちろん、努力さえすれば、武芸者の頂点まで登れる」とシャロンは思っている。

「そうだぞ、露。努力すれば、何年も鍛錬をすれば、誰でもおのずと強くなる。露もきっとそうなるぞ」

その考えについては、凛も同じだった。

努力は才能を凌駕する。生まれ持った才能よりも、積みに積み重ねた地力の方が、強い。何年も道場に通い、周りの練習生を見てきても、やはり、努力をした者の方が強かつた。

「いや、遅い。何年も、何十年も、努力する。そんな、時間のかか

る強さはこりうねえよ

ぐつ、と、この時、凜は唇を噛み締めた。

その言葉の裏に、さつさと日本に帰る、という胸中が伺えたのだ。

あの世界に戻るのに“武力”は、最低限必要。敵を斃すのにも、異世界召喚の情報を手に入れるのにも、“武力”が無ければ、碌な作戦さえ立てられないものである。

だから、凜は反対できないのであつた。

「でも剣は、習得するには必ず時間がかかります。では、アラワさんは、どうやって力を手に入れるおつもりですか？」

反論できない凜の代わりに、シャロンが尋ねた。

「簡単じゃねえか」「

そう一ヒルに笑つて、露は訓練場の端にある陰にいたルカへと近づいた。

「俺は魔術を教わる。このルカにな」

数秒後、三人から驚愕の叫びが出たのは言つまでもない。

それは、訓練場の中をさまぐるしく回る。

ルカが露の申し出を受けたのは、それから数分後。シャロンが私も手伝いますと言つたのも、それから数分後のことである。

黒川露、今世紀稀代の“詭策士”は、ここから動き始めたのであつた。

第三十七話 始動（後書き）

すいません。

キリのいい所で区切ると、とても短くなつてしましました。

次回からは、当分、アンナとの一騎打ちがメインになると思います。
更新が凄く遅れてしましましたが、これからも宜しくお願ひいたします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2405s/>

詭策士・黒川露の異世界記

2011年10月11日20時20分発行